

---

南の空の向こう - A g a i n s t a l l o d d s -

蒼井りゅう

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

南の空の向こう - Against all odds -

### 【Nコード】

N1536E

### 【作者名】

蒼井りゅう

### 【あらすじ】

タイムスリップの途中、マーシャは突然、荒涼とした土地に放り出される。見たこともない民族、知らない土地。彼女が連れてこられた村の人々は異人種の彼女を恐れ、言葉さえも通じない。帰る方法もわからない。そのうち、マーシャは彼女を恐れない族長カレブと恋に落ちるが、彼の部族には生贄の蛮習があつて……。 完結  
しました！ 「あなたと私をつなげる空間」の番外編

**第1話（前書き）**

「あなたと私をつなげる空間」の番外編

学生マーシャが事故で行方不明になっていた期間のお話です  
本編の第1〜12話も参考にしてくださいね

## 第1話

アメリカのどの都市かは見当がつかないが、視界が開けた直後に「ブルーライン記念塔」がマーシャの目に飛び込んできた。

通常移動モードに切り替え、自動運転で機体をそこまで近づける。

この記念塔の周囲は公共管理区域だろうか、人の姿は全く見られない。遠くに青い高層ビル群が見えたが、塔の近くには何の建物もない。

彼女の乗る政府認定の移動機は、この区域への侵入にもあらかじめ許可を受けているのだろう、上空で飛び回っている防衛センサーが移動機に攻撃をしかけてくることはなかった。

灰色のオベリスクのような記念塔には黒く太い文字で何かが書いてある。

彼らの功績は後世にまで語り継がれる、とかそんな類だ。

彼女は塔に刻み込まれている文章をメモリーに入力した。たった数秒で、期末試験の課題は完了。

あまりにもあっけなく短い冒険の終了に、彼女はせつかくの貴重な機体を使って別の場所へ移動したい誘惑にかられた。

でも、そんな危険を冒しはしない。

塔の前に着いてきつかり4分後、彼女は自動運転で移動機を到着した地点に帰った。通常移動から時空移動にモードを戻す。

それから彼女は、出発までの残り時間が表示されているディスプレイを確認した。滞在時間の残りは、5分をもう切っている。

移動器も外からも何の音も聞こえず、彼女は来週に控える試験の残り試験後の冬休みの予定について、ぼんやりと考えていた。

そっこうするうちにピーツと電子音が鳴って、残り1分を知らされ

た。

本当に静かに、機体はワープ・モードの準備をはじめ、それに伴ってメーターの数値が上昇していく。

彼女は記念塔への単純往復という通常運転しか操作を行っていない。ワープ準備も手動操作できるように技術訓練をしているが、実地が彼女に認められるのはまだ先だ。まずは初めての個人時空移動体験をしてこのコースの単位を修了し、次の技術課程のコースをとって初めて、手動操作の許可がおりることになっている。

彼女の耳にクラシック音楽が流され、久しぶりの家族の揃う年末に思いをさせているうちに、移動機は既に出発していた。振動も音もなく、出発は非常にスムーズだった。

彼女はつい、うとうととしてしまっていた。

高音のソプラノ歌手が耳元で思い切り歌い上げている。

彼女は眠りから戻りつつある意識の中で、女性歌手の声がだんだんと低くなって男たちの合唱に変わっていくのに気づいていた。男たちは3人からもっと多くなり、合唱のハーモニーが耳障りな雑談に移りかわっていくような錯覚に陥った。

不快そうに顔をしかめて目を開けた彼女は、自分が乾いた土の上に座っていることを知って驚いた。

そこは、大学の試験室などではなく、黄色い岩や乾燥でひびわれた土が延々とひろがった、開けた自然の中だった。

「・・・え？」

夢かと思い、彼女は目をこすった後に自分の手を試しにたたいてみた。

痛かった。

・・・夢ではない。

「・・・何なの、ここ？」

彼女が体を固定されていたはずの移動機も見当たらない。頭のヘルメットも消えている。

彼女の周りには誰もおらず、自然の造作以外に何も、ない。待って、待ってよ、えっと・・・

彼女はパニックにおそわれ、ブルーライン記念塔からの自分の行動を思い起こした。通常の自動運転モードの切り替えを操作したが、他には何も触っていない。機体が自動的にワープ・モードを起動したのも目で確認している。

何のミスもしていないし、異常もなかった。

ええと・・・いったい、これはどういうこと？

この場所を何とか特定できないかと、彼女は荒廃した周囲を見まわした。

乾燥地帯にはびこる低木が点在しているが、視界のずっと先まで黄色い岩肌と乾燥土の地面が続いている。天気はよく、空はどこまでも青くて高い。空気は乾き切っていて、埃っぽい。

ここには、何も無い。

だが、彼女は自分の見解を撤回した。

・・・いえ、そうじゃない。

## 第2話

彼女から50mほど離れたところにある、切り立った崖の向こうに砂埃が上がっている。

それは地響きを伴い、複数の声のようなものが空気にのせられて彼女の元にも届いた。

本能的に身の危険を察した彼女は、とっさに近くにあった平らな大岩の影に身を潜める。

怒鳴り声とも悲鳴とも区別のつかない声が、どんどん彼女に近づいてくる。

何か知らないけど、そのまま過ぎ去って!!

彼女は目を閉じ、必死に神様に無事を祈った。

それはたぶん、馬に乗ったグループと追われる複数の人々だったと思う。思う、というのは、マーシャが正面からその一団を見なかったからだ。

正体不明の軍団は大きな砂埃を巻き上げ、大声を出してわめきながら、彼女の隠れる岩の向こうを駆け抜けていった。

そして、音が少し遠のいてから彼女が覗いてみると、3頭の小柄な馬に乗った人間が前を走っている人たちに大きな槍のようなものを突きつけて、追いかけていた。騎乗の3人は白・赤・黒のカラフルな民族服のような物を身につけていた。

自分がどこにいるのかと混乱はしていたが、何とかやり過ごした危機に彼女はそっと息をついた。

一団の放つ足音はどんどん彼女から遠のいて行く。

ところが、ほっとしたのもつかの間、

「ヤー？」

と、背後からいきなり声がかきこえて彼女は縮みあがった。体を硬直させたままに首だけ動かそうとすると、彼女の頬に触れるかというところに灰色をした矢尻が突き出された。

「・・・っ!？」

「ヤー、セセン！」

男が、彼女の聞いたこともない言葉を発した。

恐怖で喉の奥がはりついた。後ろで、男が動く音がした。

「・・・やめて、逃げないから！」

顔の横にある矢尻が上下に揺れ、マーシヤは唾をのむ。

「助けて・・・！」

彼女が震えて動かないのを見ると、男が彼女の正面に回りこんできた。

矢尻は顔につけられたままだったが、男は彼女の前に立って、その場に座る彼女を見下ろした。

矢尻の先に長い木の棒がついている。

男は乾燥した植物のつるでできたような簡易サンダルをはき、剥き出しになった裸足の足は浅黒かった。古い映画で見た、ジプシーか古代ローマ人のような膝までのスカートをはいて、ベルト代わりの紐に小さな袋や小物をぶら下げている。

彼女はその風貌に驚いて目の前が真っ暗になった。

こんな冗談、嬉しくない!!

過去に紛れ込んだなんて・・・ううん、そんなまさか!

それとも、未開の地の原住民・・・??

『おまえ、何者だ?』

男は長い黒髪を1つに束ね、白・赤・黒の模様が入った上着を着ており、目の下にも同じ色の塗料で横線の化粧をつけていた。

彼は、顔を上げたマーシヤを見てぎよっとし、あとずさった。

『何者！？』

「待って！ねえ、私はあなたに危害を与えない・・・私は、何もしないから・・・！」

男は彼女を恐れていたようだが、不可解な表情をした。

警戒を解きはせず、彼女の顔につけた矢尻で彼女の顔を右に向けさせた。

顔に当たる感触は冷たく固い。

本物だ。

マーシヤは恐怖に体を震わせ、視線を地面に落とした。

『おまえ・・・どの言葉を話している？俺の話を理解できないのか？』

「ああ、もう・・・言葉が通じないってこと、わからないかな・・・」

彼女がゆっくりと顔をあげると、男は再び驚いて一歩退き、彼女の目を穴のあくほどに凝視した。

彼は短く何かを言い放ったが、彼女に聞き取れるはずもなかった。

### 第3話

マーシャが不安そうに男と長槍を見ていると、彼は槍を彼女から離し、代わりに服の間から朱色の太い縄を出した。今は殺されないで済むらしいが、彼はマーシャの身柄を拘束するつもりようだ。彼女は逃げたかったが、自分が少しでも逃げる素振りをすれば男に即座に殺されると確信していた。それに、ここから逃げても行く先が全く思いつかない。彼女は動く気にもなれなかった。

男はマーシャの体に必要以上に触らないように注意しながら上半身をきつちりと縄でしばり、それを引っ張って、彼女に立つように無言で促した。抵抗せずに立ち上がった彼女と男はそう変わらない背丈で、彼はそれにも驚いていたようだが、マーシャをじろじろとぶしつけに眺めた。

それに満足したのか、彼は彼女の体に巻きつく縄を引っ張ると、彼女を岩の裏側へ移動させようとした。彼を刺激しないように彼女はおとなしい態度を貫き、彼のあとを黙ってついていくことに決めた。彼女はそれまで気づかなかったのだが、そこには背の低いロバのような、ずんぐりとした馬が立っていた。

『乗れ』

言葉は理解できなかったが、彼がロバの方へ首で示したので、マーシャは馬に近づいた。

動物の背に乗ったことは一度もない。手の自由もきかないため、どうやってまたがればいいのかとウロウロしている、イラだったらしい男が彼女の尻を持ち上げて馬の上に押し上げた。小さな悲鳴をあげた彼女は、それでも何とかして馬の背に体を安定させる。ほっとして彼女が男を見ると、彼は困惑し

た表情でマーシヤを見上げていた。

「ヤー、フィマレ??」

マーシヤは、言っている意味が理解できないという意味で首を左右に振った。男はもう一度違う言い方で何か言ったが状況は同じで、彼女は肩をすくめるしかない。

無駄だと感じた彼は、あきらめたように息を吐いた。

それから、マーシヤと男は景色の変わらない真つ直ぐな土の道を気が遠くなるほど地平線に向かって歩いた。囚われの身であるマーシヤが馬上に、彼女を捕らえた男がその馬をひいて、延々と歩き続けた。

体を照らす日差しと巻き上がる砂埃に体力を奪われ、疲労から気をそらすために、彼女は自分の帰りを待つ家族と学校での勉強の事をずっと考えていた。

マーシヤの喉の渇きがいつそうひどくなった頃、二人の前に突如として石造りの塀で囲まれた集落が現れた。黄土色の石を高く積み重ねた門の両脇に、マーシヤを連行する男と同じような服装をした二人の男が守りを固めている。遠くからでもマーシヤを連れた男を特定した彼らが、頭をふって何かを言い合い始めた。

緊張と不安、慣れない乗馬で疲れきっていたマーシヤは、とりあえずの目的地に行き着いたらしいことに安堵した。その後の身の振り方は考えたくもなく、彼女はとにかく、馬から降りて水を口にしたかった。

門を通過した彼女たちは塀の内側に沿って左へ進み、いくつかの粗末な建物を通り越して、赤茶色に着色した屋根の建物の前で止まった。馬から降ろされた彼女が地面にやっと足を着くと、彼女を遠くから取り巻くように見ている男たちの存在に気づいた。浅黒い肌、黒や茶色の長髪、彼女と同じか少し高い背丈。麻のような生地の手

ユニック、マーシヤを連れてきた男と同じような服装をした男たちばかりだ。

彼女を見た男たちは全員、驚いて息をのんだり、怯えた反応をしたり、先を争って逃げようとしていた。彼女のような違う人種を初めてみたのだろうとは容易に想像できたが、ここがどこなのかはマーシヤには想像つかなかった。

過去なのか、現在ではあっても、どこかへき地にある原始民族なのか……。

彼女を連れてきた男は、どうやら身分が高いようだ。男は他の者たちに横柄な態度をとり、彼らも男に敬意を払っている。

「ヤー！」

マーシヤはその時になって、その言葉が“あなた”を意味するのだと理解した。“あなた”というより“おまえ”とか、もっと侮蔑したような呼びかけだろうが。

男に呼ばれたマーシヤは男の後ろについて、赤茶色の屋根のある平屋の建物に入った。通路の左側は壁がなく、木で組まれただけの格子となっていて日光が入った。すぐに右折して室内に入り、壁のつきあたりを左折した先は、太陽の光がほとんど入らなくてうす暗かった。二人の前には格子の扉があり、その前では横幅の大きい男が番をしていた。

「セカ・ネデル！」

彼がマーシヤの隣の男に大声で挨拶し、マーシヤは彼に引き渡された。

……ここに拘束されるんだ。

男が彼に何かを説明している間に彼女の目は暗闇になれ、格子扉の奥につづく通路の左脇にも格子戸があるのを見つけた。格子越しに小さく四角い光線が通路を照らしており、窓があると思われた。ざわざわと不思議な音がそちらから聞こえている。

彼女がさらに目を凝らしてよく見ると、奥にある格子戸の木の合間から何人もの人々の足や顔が見えた。

ここは監獄だ。

彼女が入られる部屋には、多数の先客がいるのだ。

## 第4話

マーシャを連行してきた男が牢番と話を終えて、彼女に鋭い視線を向けた。彼の目の下の化粧は汗ではげかかっており、素顔がわかるほどになっていた。そんなに年がいった男ではなく、たぶん、20代後半から30代前半だ。

彼女に思いがけず見つめられた男は視線を外して少しうるたえ、牢番に彼女を早く連れていくように命じた。

マーシャは男の手に引きずられるようにして格子の内側に入った。屋外の乾燥した空気とは一転し、湿った空気には汚水とし尿の臭いが混じっていた。2つあるうちの手前にある牢の前で彼女は縄をほどかれた。そこは、小さな子どもや女たちばかりが集められた牢だった。奥の牢には3人の男たちがいて、ぐったりとした様子で地面に座りこんでいた。そこにいる誰もかれもが疲労し、あきらめ、恐怖に支配された表情をしていた。彼女が格子扉についた小さな正方形の入口から男に押し込まれるように牢に入ると、それまで手前にいた女・子供たちが全員、あわてふためいて牢の奥へと逃げていった。そして、決して彼女の側に寄ってくることはなかった。

マーシャを牢へと託した男が牢小屋から出てくると、彼の戻りを今や遅しと待っていた人々が一斉に群がってきた。彼らは口々に、彼がどこから連れてきたらしい、一風変わった人間についての質問を次々に浴びせてきた。人間なのか、という者さえいた。彼は面倒そうに眉をあげたが、彼らがひるむ様子はない。

尚も彼は人々を無視してやり過ごそうとしたが、彼らはぞろぞろと後をついてきた。

『ネデル様、ねえ、お待ちくださいよ、ネデル様！あの者はどこで

見つけたのですか？なんと白い肌、それに満月の夜のような瞳の色！」

特別しつこいのは、彼の義理の弟だ。

彼の妻によく似て、口がよく立ち、おしゃべりだ。話をさせたらうまいのに義弟が信用されないのは、その口が軽く、口と同じくらいに身持ちも軽いからだ。

自分の横にひつついてくる義弟に腹が立った彼は、むっとして足を止めた。

『ねえ、ネデル様？あのような珍しい者を得られるなど、一家の誉れですよ！ヨード様もカレブ様も、ことのほかお喜びに・・・』

『きさま、あの者の存在を声高に言いふらしてみろ。おまえの舌を引っこ抜くぞ！』

彼にまとわりついていた人々の足が止まり、義兄がまじめな顔をして怒っているのを見た男は、さつと口をつぐんだ。

ネデルは周囲の者を威圧するようににらみつけ、いらいらした口調で続ける。

『お二人には私の口から報告する！人々が浮き足だった状態で儀式に臨むのを、お二人が好まないのはおまえも知っているな？この件をむやみに口にのぼらせた者は、それが誰であろうと見つけ次第、厳罰に処する！皆も、よく覚えておけ！』

全身を怒りでみなぎらせて彼がその場の人々に怒鳴ると、辺り一帯が冷たい緊張感に包まれた。義弟も目をしろくろさせて、ばかみたいにつつ立っている。

それを確認した彼は満足そうに鼻をならすと、大きな足音をさせて人々の前から立ち去っていった。

怒鳴ってはみたものの、彼らの口に戸を立てられないことなど、ネデルは承知していた。

噂をたてるなどは言っても、めずらしい者の存在は水面下で皆の間にすぐに広まるはずだ。たとしても、表立って噂されなければそれ

でいい。

儀式に先立って一族より隔離されているヨード様には、近いうちに、あの者の存在をお耳にいれよう。あの目の色は気味が悪いが、青色を収集されているヨード様のお気に召すはず。

彼の自宅が見えてきて、母親と妻が入口の前で立ち話をしている姿が見えた。両名とも、ものすごくおしゃべりだ。

義弟の口からこの件を知った彼女たちから、噂は村人たちにあつという間に伝わるにちがいない。その光景が彼の目にも見えるようだ。いずれ、カレブ様の使用人たちの耳にも入るだろう。彼らから主人に噂が告げられることはないと思うが……。

自分の仕える族長カレブを思って、彼は苦々しげに口をゆがめた。

……カレブ様は、当日、お知りになればいい。

## 第5話

女たちが夕食の準備をし始め、ネデルはここ1ヶ月の日課となった、族長の身重の妻が住む居宅への訪問に出かけた。族長が父親だと囁かれる子どもは村に2人ほどいたが、彼にとっては、初めての正式な子どもとなる。

一族の女たちが妊娠してお腹が大きくせり出す時期は、夫から離れて「妊婦の家」で出産までの日々を待つのが慣例となっている。「妊婦の家」に妻たちが滞在するこの時期は夫と妻の直接的な接触は禁止されていて、族長の代わりにネデルが族長の妻の様子を確認することとなっていた。

助産婦、乳母、何人かの女たちが詰める家で、他の2人の妊婦とともに、族長の妻は何から何まで世話を焼かれていた。出産は近づいているが、急を要するわけではないそうだ。

族長の妻は、腹部分だけが丸くふくらんだだけの痩せた体を重そうに長いすに横たえていた。丸々とした顔に赤い厚い唇をした彼女は美人に分類される器量ではなく、前族長にそっくりだ。カレブは、亡くなった前族長の残したひとり娘の選ばれし婿だ。

ネデルが来るやいなや、彼女が大音量で切れ間ない話をし始めた。彼女は自由のきかない体ではあるが健康で、室内に閉じこもりきりな毎日に退屈しきっているのだ。こちらの都合など全然構いなしだ。

女のおしゃべりは母と妻でなれている彼は、関心をもって聞いているふりをして上手に聞き流す。

ひととおり話終わって満足したらしい彼女は自分の話が一息つくのと、夫の近況を一言も尋ねることなく、もう用はないというように彼をさっさと解放した。義務的に訪問を重ねているネデルにも、それで助かっていた。

「妊婦の家」をあとにしたネデルは、その足で族長の自宅に向かった。朝と夕方の二度、彼は主人に顔を見せる。

あちこちの家から夕食の支度をする白い煙がたちのぼり、様々な食べ物のにおいが漂ってきた。族長が住む家は人々の家を全部通り過ぎ、集落敷地内の北寄りにある。

「妊婦の家」から集落の敷地をほぼ真横に横切っていった彼は、見慣れた三角屋根が視界にあらわれた時、ついつい身構えてしまった。族長カレブは頭がきれてカンもよく、力も強い。だからこそ、死ぬ前の前族長が一族の男の中から自分の娘の夫に、つまりは未来の後継者にと彼を選んだのだ。

ネデルは彼の族長としての素質を認めてはいたが、勇敢で行動力があるものの、同時に、非常識ともいえる自由で大胆な気質を苦手としていた。

・・・あの異形の者の存在は伏せておかねば。

他の人家と同様に料理の煙が空に向かってあがっていく三角屋根を見つめ、彼は改めて自分に言い聞かせた。

変わった者がいると聞けば族長は興味をひかれて見に行き、行けば、あの者が“女”と判る。それは、絶対に阻止せねば。

マーシャの存在を自分自身さえも忘れてしまえるよう、彼は族長に報告すべき他の話題をぶつぶつと口の中で呟いた。

ネデルが家に現れると、族長の家の前で食事の用意をしていた女たちが口々に挨拶をした。

ネデルが選んだ家事女たち。料理の腕がよく働きもので、決して美しいとはいえない女たちだ。夫の気に入るような女を含めなかったネデルの選択に、族長の妻は夫がいない所でひそかに彼を讚えた。

「カレブ様は？」

「さつき、裏で長老たちと話しているのを見かけましたよ」  
女の1人が答え、ネデルはうす暗い家の中へ入っていった。

通路の先の居室には誰もいなかった。それを左手にみながら、彼は裏の出口に通じる道を歩く。長老たちの姿はもう消えていた。

カレブは家の裏に置かれた一枚岩の台に、他の者ならば着きはしない地面に片足をつき、別の足を台の上に投げ出して左右にごろごろと動かしながら座っていた。

彼は他の者たちにくらべて、体の割には手足が長く、背も少し高い。数ヶ月前の転落事故で、大したケガは負わなかったが長髪の半分を切り取るはめになり、やっと肩まで伸びた彼の黒髪が、風に吹かれてなびいていた。

涼しい風の通り抜ける場で夕食までのひと時をやり過ごす気なのだろう。

陽光をうけた頭髮は、光に透けて茶色に見えた。

南の空の向こう - Against all odds -

第5話（後書き）

やっと、族長カレブが登場  
この人、本編でも意外にキー・キャラです

## 第6話

人の視線に気づいた彼が後ろを振り向いた。家の中から出てこようとするネデルを見つけ、唇を上げる。

『帰ったのか』

『はい、カレブ様』

岩についていた手で体を押し上げ、カレブは地面に両足をついた。機嫌はよさそうだった。

『長老の方々と一緒に聞いたのですが・・・？』

『もう帰った。穀物の出来が悪いとこぼしにきただけだ。ふん、まるで俺のせいだと言わんばかりに』

言うほどには彼は怒っていないようだった。外に出て来ようとするネデルを手で押しとどめ、彼は屋内に入ろうと歩いてくる。彼を待つて、ネデルは一緒に中へと戻った。

『奥様にお会いしてきました』

『ふーん』

興味もなさそうにカレブは返事をする。

『お元氣そうでした。出産まではまだ日があるようですね』

カレブはネデルをちらっと見たが、何の返事もしない。

彼の目の位置はネデルの頭のとっぺんだ。2人は並んで狭い通路を無言で歩き、カレブの普段過ごす居室へと歩みをすすめる。

カレブは寡黙ではないが、目的や用事がないと話をしてしない。時々、彼との沈黙が苦しくなることもないわけでもないが、家族の騒々しさに辟易しているネデルにはそれもちょうどよかった。

居室には火がともされ、他のどの部屋よりも明るかった。1年を通して寒い気候になる地域ではないが、日が暮れると気温がそれなりに下がり、室内はとりわけ涼しくなる。これらの火は照明だけでなく、暖房の役目も果たす。

一番大きい椅子に、カレブは体を投げ出すようにして身を沈めた。その向かいの床にネデルはあくらをかいて座る。子どものようにカレブは手足を伸ばし、大きなあくびを声に出した。

『お疲れのようですね、薬師を呼びましょうか？』

薬師とは体のコリや痛みを和らげるマツサージ師だ。カレブは天井を見たまま、ぶっきらぼうに答えた。

『いらん。疲れてはいない』

その後、カレブが目を閉じてしまったのでネデルは口をきくのを控えた。眠ってしまったのだと思った。

しばらく主人の動きを待っていた彼だったが、カレブがなかなか目を開けなかったので、あきらめてその場からそっと立ち上がった。睡眠の邪魔をしないよう、音をたてないように慎重に足を踏み出したネデルだったが、後ろで物音を聞いて振り返った。

『ネデル？』

体を椅子に投げ出した格好のまま、カレブが顔だけを彼に向けていた。

『起こしてしまいましたか？今、カレブ様の邪魔をしないようにと帰ろうとして・・・』

『儀式の準備は順調か？』

ネデルの言葉など耳に入っていないかのように、カレブが真顔で尋ねた。瞳の奥が燃えているような鋭い彼の目はいつものことだが、その目で見られると、何だか落ち着かない。ネデルは首を縦にふった。

『ええ、全て順調ですよ。貢ぎ物もあと数日で揃います』

『必要な人数は“狩れた”のか？』

『はい。問題ありません』

牢にいるマーシャの存在を思い出した自分の動揺が声ににじみ出ないよう、ネデルは必死にこらえた。

あの存在が知られてはならない。異形のあの人間が“女”などと、

わかつてはならない。  
興味をひかれた族長が、神への貢ぎ物である“女”に手を出しかねない。

それだけは絶対に避けねば。

カレブが眠そうに、天井にむかつて大きく長いため息をついた。ネデルは他の話題に移るべく、身を乗り出す。

『カレブ様、グルージの民の事ですが・・・』

『ネデル、白い民がいたとは本当か？』

『はっ??？』

ネデルの目の前で、カレブがはずみをつけて椅子の上に体を起こした。

カレブの目の奥が冷めている。

ネデルは身構えた。

『捕虜の中に我々と異なる者がいたと聞いた。おまえが狩ったそうだな？何がどう違うんだ？なぜ、俺に言わない？』

ネデルは口さがない誰かの軽率な告げ口にかつとなった。

こうなることを怖れて皆に黙るように言ったのに！

彼は焦った。

どうやって主人の気をそらそうか、あれこれと考えを巡らせる。

## 第7話

眉をひそめたネデルが小さく口を開けたままで動こうとしない。彼の出方を観察していたカレブは、最初は不審そうに、そのうち、興味深そうに表情をかえた。

『そうか、おまえは俺に知らせない方がよいと思ったのか。それほど不自然に、変わった者なのか？であれば、俺はその実物をぜひにも見てみたい』

『いけません、カレブ様！』

『なぜだ？』

『ら、乱暴で危険です！捕虜たちでさえ近づこうとしません！私も手こずって、何とかここまで連行したのです』

しかし、カレブは表情をかえない。

信じていないのだ。

『今はまだ危険ですが……儀式の日までには弱りましょう。その際に、大人しくなったその者をいくらでも存分にご覧になればいいではないですか！』

『……それが事実なら、余計に見てみたい』

ネデルの思いなど知らず、彼は豪快に笑う。

ネデルは奇声に似た声で主人を再度止めたが、彼はすっかり牢に行く気だ。彼の無邪気で楽しそうな口調にネデルは腹が立った。

『せめて、ヨーダ様に異人をいさめてもらうまでお待ちください！カレブ様！』

行く手を邪魔しようとしたのはだかったネデルに、彼は顔をしかめた。

『嫌だ。それに、俺はあの女を信用しない』

『なんとという事をおっしゃるのです、カレブ様！ヨーダ様は神と交信できるお方ですよ、軽んじてはカレブ様の身に不吉な事が起こります！』

『ふん。あの女は嘘を言っている。それを忘れたか？』  
カレブはにやにやと笑ってネデルの頬を手の甲で軽くたたいた。過去の二度にわたる苦い体験を思い出し、ネデルは下唇をかねて言葉をためる。

カレブ様は、よくも悪くも非常識だ。

儀式に必要で隔離されていた美しい生娘を一度は興味本位で、二度目はヨードの儀式に疑問を抱いて、彼は我が物にした。一時的な主人への恐怖と誤った忠義心から、ネデルは主人の手引きをした。そして、祈禱師ヨードには何も知らせることなく、生娘と偽って捧げられた娘を用い、彼女は儀式を行った。

二度にわたり、彼女の祈禱結果には何の変わりもなかった。

私はカレブ様の共犯だ。そして、だからこそ、今回も間違いを起こしても「起こせない」ように秘密を守り通そうとしたのに。

あの異人が“女”とわかって貢ぎ物でなかったとしても、一族の普通の男は手を出そうとも思わない。信心深く、畏れを知る人々はそのような行為をしようという考えさえ持たない。

しかしネデルには、カレブが異形の女に興味を持ち、手をつけるという確信めいた自信があった。

カレブがいまいましたように鼻をならしてつぶやいた。

『そのうちにあの女のカラクリを暴いてやる。あの女は、力を持ちすぎだ』

カレブの手がネデルの肩を押し、彼は歩き始めた。

捕虜たちが捕らえられている牢へ行くのだ。

ネデルは、自宅を出ようとしていたカレブに走って追いつき、その腕を後ろからつかんで引き止めた。カレブは家来から許可もなく体を触れられたことにむっとして、振り返った。

『何をする…！』

カレブは目をつりあげて怒鳴り、腕をぶんぶんと振ってネデルの手をどかそうとした。ネデルは我に返って手を彼からぱつと放し、彼の足元にひざまずいて謝罪の言葉を口にした。

『お許しを！されど、カレブ様、どうかしばしお待ちを！』

『嫌だと言ったはずだ！』

『お願いでございます！』

『そこをどけ！』

『どうかお聞き届けを、カレブ様！民を刺激しないよう、せめて・・・牢に行くのは、せめて夜が来るまでお待ちを！』

怒って興奮していたカレブは体を翻しかけたが、ネデルの譲歩した嘆願に歩みを止めた。彼をじろつとにらみ、それを確認するようにネデルに意味を問いただす。

『暗闇にまぎれて見物に行けというのか？』

ネデルは口惜しさを隠し、顔を地面に向けたままに主人に頷いた。

『ええ。今行けば、騒ぎになるのは必至。夜になったら・・・私  
が、案内いたします』

ネデルの視線が落ちた地面に、向きを反対にかえたカレブのつま先が出された。彼がネデルの提案に沿うことを決めたのだ。

ネデルが上を見上げると、すずしい顔でカレブが家の奥の方を見ていた。

『いいだろう。最初からそう言え、ネデル』

『・・・はい。申し訳ありません』

家来の返事を最後まで聞かないうちに、カレブは今来た道を戻りだした。

ネデルは口惜しさと今後に対する恐怖とで、体が細かく震えるのを止められなかった。異人を“男”の牢へ入れてやればよかったと後悔した。女は一族の男並に背が高く遠目には少年に見えないこともないし、それに男牢の誰もが彼女を恐れて近寄らないはずだから、

身も安全だ。

今にでも誰かに処遇の変更を依頼したかったが、それを牢番に伝えることは、彼にはままならない。

自分に同行するよう期待して居室の前でネデルを待つカレブの姿をみとめ、ネデルは胃の下の方が重く痛むのを感じた。

## 第8話

日が暮れてしばらくたつと、族長宅の周囲は真つ暗になった。それぞれの家をともし火は家の出入口や喚起口からわずかにのぞくだけでほとんど見えず、村の入口を照らす2箇所の大きな火が小さく闇に浮かんでいる。今夜は月も空高くにあり、明るい光を照らしてはいなかった。

カレブと夕食をとった後、ネデルはちびちびと時間をかけて食後に出されたハツカのお茶を飲んでた。ずいぶんと前にそれを飲み干したカレブは、小枝の繊維を使って歯を丁寧に磨いていて、鼻歌さえ出していて上機嫌だ。

牢へ行くのをできるだけ後に引きのばしたいネデルは、ついに終わってしまったお茶の容器を置くと、時間を稼ごうと、自分用の小枝を探して室内を見渡した。

『おい！闇にまぎれて何かをするには、そろそろいい時間だぞ！』  
ネデルが手を伸ばしてつまんだ小枝を払いとばし、カレブがいらついたように言った。がっくりきて、ネデルは渋々うなずいた。

『早くしろ！異人が眠る前に、この目で見てみたい』  
あの異人、さつさと眠っていてくれたらいいが。

ネデルがのろのろと立ち上がる一方で、カレブは期待に目をきらめかせ、跳ねるように立ち上がった。

・・・夜の闇であんな気味の悪い瞳を見るのは、私はごめんだ。

目立つという理由で明かりの火は持たず、二人は外の夜の闇へ体を溶け込ませた。牢は村の西の果てにあるが、カレブの家からそれほど距離はない。風と砂が舞う音しか聞こえない、静かな夜だった。彼らは用足しに出た村人に遭遇しないことを祈りながら、足早に目的地へと向かった。

牢の建物前には男が2人で番をしていた。男たちは眠そうにあくび

をしては、空や周囲をのんきに眺めていた。

周囲に人家がない地区にある牢小屋に近づいたカレブは、その存在を隠そうとはしなかった。明かりに照らされた持ち場からネデルと族長の姿を見つけた1人の牢番が、びっくりして口を開けている。ネデルは男に黙るようにさっと手で合図した。男は相方にも来訪者を知らせ、黙るようにと告げた。

『何事です?』

周囲が静か過ぎるため、牢番は押し殺した声で、やって来たネデルに尋ねた。

『所用で来た。とおせ』

牢番たちは彼らを止めようと考えたらしいが、一族の長がやることに反対できるはずもなく、部下ネデルの気迫に押されて道をあけた。ネデルにつづき、カレブが大股で建物内に入っていく。

入りしな、ネデルは守番たちに釘をさした。

『我々がいる間、誰も通すな。いいな?』

『はい』

突然の侵入者におどろいた牢番が、通路の先で立ち上がった。自分の持つ明かりで予期せぬ侵入者の顔を照らした彼は、ネデルと族長の姿を見てぎよっとなった。カレブは人々から特に畏れられているため、牢番は自分がヘマをして制裁をされるとでも思っただけ。男は地面にへなへなとひざをつき、2人に対して必死に祈り出した。カレブはあきれ、小さく息をつく。

『牢番? 立て、おまえ!』

声を低くし、威圧的にネデルは男を叱咤した。

『お、お許してください! 何をしたかわかりませんが、俺は本当にはかで……』

『何を訳のわからないことを言っている! それより、ここを開けよ!』

『ええ?』

男はぽかんとしてネデルを見上げ、視線を移動して隣のカレブを見た。カレブが男をじろつと見た。

『はあ、えええ、すぐに開けます、はい!』

男は服の中から鍵束を取り出し、格子扉の鍵にそのうちの1つを差し込んだ。

異変を察知した捕虜たちが動揺し、にわかには嘔き出す声が暗闇の空気にのって伝わってくる。カレブは身を乗り出して格子扉の向こうをのぞきこんだが、人々の気はいはするもの、はつきりとは見えない。乱暴らしい異人の、怒鳴り声も叫び声も悲鳴もしない。

『・・・どこだ?』

カレブはネデルを見たが、彼は気後れしたようにその場に立ちすくんでいた。

『見れば、すぐにわかります』

格子扉が手前に開けられた。

カレブは足を踏み出そうとして、隣に立っているネデルの瞳の中にあきりと浮かぶ恐怖を見てとった。牢番も、誰に対する恐怖かはわからないが、音がするほどにひざを震わせていた。

・・・それほどにその者は危険なのか?

腰につけた短剣の位置を再確認し、カレブは危険へ対面するための心構えをした。だが、好奇心の方が勝っている。

『俺が1人で見てこよう。おまえたちはここにいろ』

牢番は言われなくてもそのつもりでいたようだ。ネデルは反発しようとしたが、足が地面に固定されているように、微動だにしない。

カレブは半分あきれ、ネデルをそこへ置き去りにした。

## 第9話

頭を下げて高さのない格子扉をくぐると、暗い通路の左側に男女別の牢があつた。何度か来たことがあるので、手前が女、奥が男の入れられる牢だと彼も知つている。夜中の侵入者に驚き、怯えた捕虜たちは体をひしめきあつて、牢の奥にかたまつていた。子どもがすすり泣く声もかすかに聞こえた。カレブが泣き声の持ち主に注意を向けると、母親らしき女が急いで子どもを口を手でおおつた。自分たちの短い将来を聞き知つている彼らの居る空間は、絶望と恐怖だけがみえた。

男の牢に視線をさまよわせ、女の牢でお互いを抱き合つてなくさめあう者たちに視線を迷わせた後、カレブは、彼女らの群れとは反対側の壁に背中をあずけ、眠つてゐる白っぽい顔の人間を見つけた。女……？

カレブがはやる心を抑えて牢の格子に近づくと、他の囚人たちが声にならない悲鳴をあげた。

彼女のいる壁側に寄り、格子につかまりながらしゃがむと、その人間の肌の白さがよくわかつた。見たこともない、おかしい衣装を身につけている。たしかに「彼女」は大柄ではあるようだが、直感で危険は感じなかつた。彼女は、彼が思いきり手を伸ばしても届かない位置にいる。

カレブは振り返り、格子扉から身を乗り出して事の成り行きを見守つていた牢番とネデルに言った。

『こやつを外に出せ』

二人の顔が恐怖にゆがむ。

『無理ですよ！』

囁きに似た、はげしい声がネデルの口から絞り出された。牢番も必死にネデルに同意して、首を振つてゐる。カレブは不機嫌そうに

顔をしかめ、牢番を見た。

『ならば、俺が中に入る。この鍵を開ける』

『めっそももない！そんな危険なことはさせられません！捕虜どもに殺されてしまいますよ！』

ネデルは牢番の持つ鍵束を彼の手の上からにぎり、カレブの要求を拒んだ。二人ともが少しづつ後ろにさがっていく。

ふがいない家来と要求を拒否された怒りにカレブはすつと立ち上がり、彼らの所へずんと寄っていった。ネデルも牢番も後ずさりしたが、足に力が入らないらしく、カレブは簡単に二人に追いついた。彼が格子越しに手を伸ばして牢番の胸元をつかむと、牢番が言葉にならない悲鳴をあげた。

『来い！鍵を開けるか、あやつを外に出すかのどちらかだ！』

牢番の恐怖は頂点に達し、鍵にしがみついていたネデルの手を振りきって鍵束をカレブに差し出した。牢番にあるまじき行動にネデルが目をもひんむいている。

牢番がカレブの手に押し付けるように鍵束を放してしまうと、カレブは自由になった鍵束をつかんで女の牢に舞い戻った。ネデルが両手で自分の頬をおさえ、何かうめいていた。白い異人は、同じ姿勢でまだ眠っていた。

カレブの鍵で牢の扉が開けられても、他の囚人たちは動きもしなかった。身をかがめて中に入ってきたカレブを化け物のように見て、彼がマーシヤに近づくのを見ると、彼女らは我先にとさらに隅へと逃げようとした。

マーシヤの前にひざまずいたカレブは、まず、彼女の着ている妙な服に手を触れた。指の上で生地が滑る。なめらかでしつとりした、初めての手触りだ。女の白い顔には自分たちと同じものがついている。カレブに異人の存在を耳打ちした者の想像に反し、造りはちゃんとした人間だ。閉じてはいるが2つの目、鼻、唇、耳も2つだ。

眉毛もまつ毛もある。近くで見なければ信じられなかったが、どれもこれも女の造りをしている。

ちよつと躊躇したが、カレブは彼女の頬に人差し指の背でそつと触れた。日にさらされ、乾燥地帯に住む彼らの肌と違い、すべすべして柔らかい。頬から鼻に指を移動し、唇を触ったカレブは、今はもう恐怖よりも好奇心に征服されていた。

こんな肌触りは経験したことがない。

## 第10話

そのとき、彼女の瞼が震えて唇からうめき声のような音がもれた。はっとしたカレブは思わず指を離す。彼女のまぶたが大きく動いた。彼女自身の体を抱いていた片方の腕が動き、彼女が指で頬をこすった。その手は小さく、指も細い。

女が気づく前に逃げなければ、と理性の声が叫んだが、カレブは足に根がはえたように動けなかった。牢内にいる捕虜たちの緊張が一気に高まるのを感じたが、彼の勘は、彼女が安全だと囁いていた。カレブが固唾をのんで動向を見守っていると、頬をこすった彼女の指は目に伸び、目じりもこすった。まぶたが大きくしばたいたが、目は下を向いていたので形までは見えなかった。

反対側の手も一方の目をさわった。両目が開かれ、違和感に気づいた彼女が床に視線を落として地面につかれたカレブの足を見つけた。それを上にたどって、彼女が視線を彼の顔に向けた。

なに・・・!?

カレブは彼女の瞳の色に仰天してしりもちをつき、彼女は間近にいた男の存在に驚いて言葉を失った。二人の新たな反応に怯えた人々が部屋の隅でひしと抱きあっている。子どもまでもが注意をひきつけることを恐れて、声を殺して泣いている。

「あなた、誰!？」

マーシヤは自分と同じようにびっくりしている目の前の男を見つめた。他の人々と同人種だが黒髪が肩ほどしかなく、野性的な風貌で生き生きとした黒い大きな目をしている。額が張り出て、鼻筋がとおった精悍な顔つきだ。大きく横に広がった口の上唇は薄かった。浅黒い肌に麻製の茶色い半袖のチュニツクを着込み、顎を支える首筋と肘から下の腕はけっこうな筋肉がついた、立派な体格をしていた。

彼女が姿勢を正すと、我に返った男が後ろに飛び跳ねるようにして身構えた。暗い目は彼女をじっと見据え、右手は腰にある短剣に当てられている。それを視界の端にとらえたマーシャは、不用意に体を動かさない方が賢明だと判断した。こんな凶体の男に襲われたら、死んでしまう。

彼はマーシャから目をそらさず、彼女も視線をそらせない。しばらくはらみ合った状態が続いた。

『カレブ様？ご無事で？』

突然、カレブの後方からかけられた声に二人は注意をそらせた。先に視線を戻したのはカレブで、彼女は彼の背後の暗闇に視線をめぐらせていた。彼女の不安そうな、困惑した様子を見てとった彼は、自分が信じた勘が正しいことを確信した。

『・・・俺は無事だ。すぐに戻る』

彼が発した言葉はマーシャの注意を引き戻した。

こやつは、危害など加えない。

彼が腰から手をゆっくりとおろすと、彼女にほんの少しの安堵が戻った。表情で瞳の色が微妙に移り変わるの印象的だ。彼は、彼女の目を昼間の光の中で見てみたい衝動にかられた。

『おまえ、どこから来た？』

彼の言葉は、“ヤー”という“おまえ”を意味する部分しか聞き取れなかった。マーシャは、今までにこの地で出会った人々とは異なり、恐怖を映し出さない彼の瞳を見つめた。

反応をしない彼女に彼がもう一度同じことを言ったが、理解できない彼女は目を細め、わからない旨を伝えようとした。男はすぐに悟ったらしい。今度は別の言葉を投げかけた。

「マー、サイ、カレブ」

ゆっくりと一語ずつ言葉をくぎり、彼ははっきりとした音で言った。そして、自分の胸を手でたたく。それが、彼の名前を告げているのだと理解するまで大した時間はかからなかった。彼は同じことをもう一度、ゆっくりと繰り返した。

彼女は、この男が自分とコミュニケーションをとろうとしているという思いがけない事実直面して、肩の力が抜けた。

「マー、サイ、カレブ」

三度目に彼がそう言っただけで胸をたたいた後、マーシャは口を開いた。「ヤー、サイ、カレブ？」

男が驚いたように目を見開いた。だが、すぐに大きな口を横に伸ばし、笑顔のような表情になった。

「ヤー？」

彼は親指をマーシャに向けた。想像するのは簡単だ。彼女は自分の名前を告げた。

「マーシャ」

疑うように男が顔をしかめる。

「マーサ？」

「マーシャ」

彼女は首をふり、彼の間違いを訂正した。彼はまだ納得できないような、困惑した表情をしている。

そのうち、さっき男にかけられた声が再び彼を呼んだ。声に切迫感がにじんでいる。男は振り向いて何かを言い返したが、すぐに彼女に注意を戻した。好奇心にあふれた、興奮した表情が彼に戻っている。マーシャは男の動向を見守っていたが、彼はもう何かを言うのは止めることにしたらしく、彼女を神々しい何かを見るかのように眺めている。

「マーシャ？」

ひとしきり彼女を見終えた男は、今度は正しい発音で彼女の名を口にした。彼女が彼に微笑みを作ると、男の顔はまるで子どものように自慢げな表情に変わった。笑うと、彼はかわいかった。

## 第11話

それから彼は、後ろ向きに這って牢の出入口まで向かった。マーシャをもつ見ることはなく、他の囚人たちに注がれた鋭い視線は彼らをそこに留めておくかのように威圧的だった。小さな正方形の扉から体を抜け出させた彼は、袖の中から鍵束を取り出して、彼らを抑留しておくための鍵をかけた。マーシャを見ることは一度もなかったが、彼は、彼女にずっと見られていることに気づいている様子だった。

女の牢から無事に出てきたカレブを見て、ネデルは本当にほっとした。牢番もウロウロと歩きまわっていた足を止め、族長が歩いて戻ってくる姿を見て顔をゆるめている。自分の欲求を満たして帰ってきた主人は、すつきりとした笑顔を彼らに向けた。彼から差し出された鍵束を牢番がうやうやしく両手で受け取る。

『ご無事で・・・安堵いたしました』

ネデルが顔をほころばせると、カレブは、大げさな、と肩をすくめてみせ、今歩いてきた通路の向こうに振り返った。カレブの頬は上気して少しだけ赤らんでいた。

『あれは、人間だったぞ』

『そうでしたか』

ネデルはカレブの興奮に気づかず、主人の言葉に頷いた。

『あれは賢い女のような。ほんの数回言った俺の言葉を、理解していた。あやつには名もある』

『異形の者にそのようなことが？偶然でしょう』

ネデルは既に格子扉から去ろうとしていて、主人も当然、それに倣うところだった。ネデルの短絡的な決め付けにカレブはむっとした。

『あやつの名は“マーシャ”だぞ？“女神”だ』

『そんなばかな。お聞き間違いでは？』

『確かにそう言った。マーサ（山羊）と言ったらマーシャと正された』

カレブが苛立った口調で言ったが、異人の件から解放されたがっていたネデルも苛立っていた。不気味な異人の女について話を長引かせるのは気分がよくない。それに、主人の興味が増してしまったのに嫌でも気づかされたネデルは、早々に現場から引き上げようと焦っていた。

主人の興奮をいさめられるような娘をどこから調達してこなければ。墓守の二番目の娘か、冶金師の三番目の娘がいいだろう。

ネデルが主人に再び振り向くと、彼はまた牢の方を見ていた。

『カレブ様、ここは長居する場ではありません。そろそろご自宅へ戻りましょう』

ネデルが主人の返事を待たずに行こうとすると、不本意ではないだろうが、彼もついてきた。牢小屋を去る前にもう一度後ろをそつと振り返るカレブに気づいたが、ネデルは知らない振りを決め込んだ。

カレブとネデルは真つ直ぐに族長宅に帰ってきた。主人の帰宅を迎えに出た召使の女をつかまえ、ネデルは、どちらでも構わないので娘をすぐに来させるようにと、墓守と冶金師の所に遣いに行かせた。どちらの家にも事情は通じている。娘を差し出す代わりに受領する手当ては両者の生活の足しになっているはずだ。召使はネデルの命令を受けて、急いで家を出た。

カレブと別れたネデルはいずれかの娘による来訪を見届けるまでは主人の家を去らないつもりで、召使の集う部屋でまんじりともせず、娘を連れだした召使の到着を待っていた。

カレブに酒を出しにいつていた召使が戻ってきた。主人の様子を彼女に尋ねると、ぼんやりとしている、という答えが返ってきた。主人が異人の事を考えているのはわかっていた。すぐに娘が来る、それまでの辛抱だ。ネデルは手の指を何回も組み替えながら、その

時を今か今かと待っていた。不機嫌なネデルにも、召使から遠慮がちに酒が出された。

『ネデル！』

召使部屋のすぐ隣、玄関の方から自分を呼ぶカレブの大声にネデルは心臓が止まりそうになった。

『ネデル、いるんだろう！』

彼はカレブに別れの挨拶をしていた。酒を運んだ女が、ネデルがまだいるとうっかり口を滑らしてもしたのだ。

『遣いはまだ戻っていないのか！』

ネデルに連絡がない以上、遣いにやった者が戻っているはずもないが、彼はその場にいた召使たちにあたり散らした。哀れな彼女たちは怯えて、一様に首を振って否定した。彼は齒軋りをし、カレブに召使部屋に踏み入られる前に自分から彼の前に姿を現すことにした。

嫌な予感がした。とてつもなく、嫌な予感。

『カレブ様』

ネデルは玄関にまわり、落ち着いた態度を装ってカレブに挨拶した。カレブの体からは、戦や儀式前に自らを発奮させるために用いる、キリルという香料の匂いがしていた。その香りはきつくて、玄関から通路にまで漂うほどだ。帰宅すると言っていたネデルが現れ、カレブは明らかに不審そうに彼を見つめた。

『おまえは帰ったと思っていたぞ？今まで何をしていた？女どもと世間話か？』

『はい。帰るつもりでしたが、ついつい話はずんでしまいました。』

女とも誰とも長話をしながらないネデルの嘘は彼にはお見通しだった。ハン、と主人は息を荒げた。

『おまえが世間話などするものか！だが・まあ、いい。おまえに用事があったからな、呼びにやる手間が省けた』

ネデルは顔色をうかがうように主人の顔を見上げた。別部族と戦う前のように高揚し、晴れやかな顔をしている。彼の視線をとらえたカレブは自分に近寄るよう、手招きした。

## 第12話

ああ、行きたくない。その心に反してネデルの足は動く。

『はい』

近寄ったネデルに息がかかるほど顔を寄せ、カレブはぼそつと言った。

『あの異人を“生娘の間”に移せ』

主人の顔を振り払うようにして、ネデルは恐れおののいて主人から離れた。家来に無礼な態度をとられたカレブだったが、ネデルの悪霊でも見たかのような形相を目にして文句を言うのをやめた。

今の言葉は主人の悪い冗談だ。ネデルは期待を込めて主人を見、彼が腕を組んで自分を見下ろしているのを見つけ、主人が本気なのだと悟った。

『カレブ様！・・・おお、お赦しを！！そのような事はとても、とても、私にはできません！！』

『おまえはできたじゃないか。二度も、三度も変わらない』

『いいえ、カレブ様！当時の私はどうかしていたのです、そのような手引きは金輪際、いたしません！カレブ様？カレブ様は、仮にも一族を率いる身ですよ！？そんな恐れ多い考えを持つのは、もうおよしなさい！！』

『は、怖れ多いだと？笑わせるな、ヨードが民を巻き込んでしている事こそ、怖れ多いじゃないか！まやかしの力しか持たぬあの女が、何も知らぬ民からどれほどの贈り物をもたらっているかぐらい、知っているだろうに！俺は一族に多大な貢献をしているのだぞ、その俺が娘の1人や2人をもらったところで、何の咎めがあるものか！』

『おお、カレブ様、娘をとることには何の異論もありません！一族には若い娘がいくらでもおるではないですか！そちらを取ればいいではないですか！』

『あの女が司る儀式に神聖さなどない。祈祷の体裁をつくらう為だ

けの貢ぎ物に、そんな配慮など要らん！」

ネデルは深く嘆いてカレブを見た。カレブは怒りから来る興奮で目が輝いている。大声で言い合う二人のやり取りは召使たちにも筒抜けだ。カレブが並び立てる祈祷師への冒瀆もしつかり露呈されているだろう。何とかカレブをとどめる手段がないかと、絶望的にネデルは辺りを見回した。

ネデルが頼れないと悟ったカレブが玄関をくぐって外に出ようとした。誰か別の者に頼むつもりでいるのだ。

「カレブ様！」

過去に遡ってこの恐ろしい企みが他者にばれるのを恐れ、ネデルは彼を追って飛び出した。

「カレブ様、おやめください！」

「うるさい！おまえに用はない、失せる！」

「カレブ様、どうかお静まりを！」

前にまわりこんだネデルをカレブの足が蹴倒した。地面に倒れてもなお、ネデルはカレブのサンダルにしがみついて止めようとした。その手から逃れようと足で彼の手を踏みつけようとするカレブ。

騒ぎを聞きつけた護り番たちが家の中から走り出してくるのがネデルの目にも見えた。だめだ、誰も来るな・・・！男たちの足音に気づいたカレブが後ろを振り向いた。

二人の男が、族長と族長の足元からよろよろと立ち上がるネデルの元に駆けつけて来た。カレブが口を開けてしゃべろうとすると、ネデルが彼より一步前へ踏み出してカレブに小さく首を振ってみせた。瞳が、しゃべるな、と言っていた。まさか主人に指図する気かとカレブがかつとなった時、ネデルが口惜しそうに唇を噛み締め、手を震わせるのが目に入った。本意ではないことに従うときに彼が必ずやる仕草だ。カレブは、口を閉じた。

「カレブ様、ネデル様！」

男たちは、争いをしていたように見えた二人の体を確認するよう

に見て、問題がないかと尋ねた。

『ちよつとした行き違いだ。もう解決した』

カレブのサンダルに傷つけられた右手の甲にある傷をさりげなく隠し、ネデルは堂々とした態度で答えた。男たちは疑わしい目をしてネデルから視線をはずし、彼らの族長に目をやった。

『族長、大丈夫ですか？』

カレブは肩をすくめた。

『何のことだ？俺は何ともないぞ』

ネデルが顔は動かさずに目だけでカレブを見た。彼がねじまげた意志はカレブに通じている。彼は自分の身を呪った。

二人の護り番たちが家の裏に完全に消えていつてしまうまで、ネデルとカレブは何も言葉を発しないままに二人を見送っていた。気づくと、満月に近い形をした月が随分と明るく地面を照らしている。さつきまで爽やかに吹いていた風は止み、辺り一面が静まりかえっていた。

ネデルが意を決し、カレブに向くと、彼はにやりと笑った。

『左端の個室に連れていきます』

『そうだな』

彼はよくわかつているとでもいうように、ネデルに言った。過去二度の場と同じ場所だ。

住居が立て込む場から離れて建つ“生娘の間”には、右から大部屋、2つの個室とがある。個室が使われることはほとんどないが、大部屋には儀式用に一族の男たちが他部族からさらってきた複数の若い娘たちが軟禁されている。特に出入りが制限されるその神聖な場の周囲は常に無人で、神の報復をおそれる民に代わって飲食を差し入れるヨーダの助手しか近づかない。ヨーダを畏れず、“常識の通じない”カレブがその場に目をつけたのは、当然といえば当然だ。勇気を奮いおこして異人と対面する心の準備をし、ネデルはカレブに牢へ出向くと伝えた。

『あれを怖がることはない。変わってはいるが、あれはただの人間だ』

ネデルの緊張を見てとったカレブが、あくびをかみ殺しながら言った。

『そうでしょうが・・・』

『喉が渴いているはずだ、水を見せておびき寄せろ。暴れるようなら、俺の名前を言え。少しは気を許すだろう』

そんなに・・・簡単に行くだろうか？

大きな不安と葛藤を抱えながら、ネデルは主人のもとを離れた。

第13話

カレブと落ち合う小屋は、牢小屋から北へいった、人間の背丈ほどもある大岩の裏手に建っている。カレブの助言に従って行動を起こしたネデルは今、異形の女とともに“生娘の間”へと歩いているのが信じられなかった。女は、彼のつき出した水に駆け寄って無我夢中でそれを飲み、彼の出したカレブの名前に従順についてきた。上半身に縄をかけられてはいるものの、逃げようと思えばできそうな環境下で彼女は黙ってネデルの横にいた。

彼女を連れたネデルが牢小屋の出入口を通過しても、守番たちは何も言いとがめず、むしろ、彼女から目を背けているくらいだった。彼が秘密裏に彼女を処理するとも思っているのかもしれない。

目印の大岩まで来たネデルは風に漂うかすかなキリルの残り香に気づいた。主人カレブは既に到着し、個室の鍵を開け放っているのだ。繰り返される計略に馴れてきた自分をネデルは恥じたが、もうここまで来てしまっている。

乾燥土と石で建てられた黄土色の建物が彼らを迎え、並んだ3部屋に行くために石の階段を6段ほどあがる。階段を上がりきり、人が中でざわめく大部屋の扉の前を通り過ぎて、二人は左端の部屋に入る扉の前で止まった。扉の枠は木製で、真ん中にはいくつもの木板が張り合わせられて塞いであるが、格子となった上下10cmほどがそれぞれ空いている。

「入れ」

開き直ったネデルが彼女の身を拘束する縄を引っ張った。彼は外側に扉を引き、マーシヤを室内に押し入れた。

室内は、彼女がいた牢よりもかなり清潔な部屋だった。室内の空気が澄んでいて、し尿の臭いもしない。細長い部屋の奥には部屋と同じ幅の石台があり、赤やオレンジ色のぶ厚い織物の布が何枚も重

ねられてあつた。屋根にほど近いところに両手のひらを広げた大きなぐらいの横長の穴がある。扉を入れて右手の壁には、植物の繊維でできた細長く小さな棚があり、石彫りの丸い人形や鮮やかな色使いの装飾品が無造作に置かれている。マーシヤを引っ張ってきた男は、一緒に持ってきた水のカメをその棚の横にゴトツと音をさせて置いた。

「・・・こつちに移れってこと？」

マーシヤの声にびくつとした男だったが、それに答えることはない。彼女の後ろにまわった男は、彼女の上半身の自由を奪っていた丈夫な縄をほだき始めた。牢を移動させられた理由は知らないが、衛生的な環境に居られることにマーシヤはひと時安心し、喜んだ。縄を全部ほだき終わった彼は部屋の奥に行くように彼女に手で示し、自分は部屋をそそくさと出て行つた。

外に出た彼は鍵をかけていない。だが、彼が扉のすぐ横に居残っているのは扉の下の隙間からも見えた。監視されるようだとわかったが彼女は逃げる気も失っていたので、ベッドらしき奥の台にのぼった。寝具らしき織物を見た目よりも柔らかい。壁の上方にある穴から夜空の一部が見えた。

なんて1日だったんだろ。これから、どうしよう・・・。彼女は膝を抱え、大きなため息を吐いた。

ネデルが部屋から出てくるのを見計らい、カレブは隠れていた小屋の裏側から正面へ移動した。部屋の前でそわそわと主人を待つていたネデルは階段を上がってくるカレブを見つけ、ぱつと顔を輝かせる。さつき来たときに覗いて目ぼしい娘がないのを確認した大部屋の前を通り、彼は部屋の中と自分とを交互に見るネデルの所まで行つた。

「カレブ様！」

ネデルは囁くようにカレブを呼んで近づき、カレブが持っていた鍵を受け取つた。長い時間を待たずにネデルと再会したことに満足

し、カレブはにやりとした笑みをネデルに向けた。

『苦勞はなかったようだな』

『ええ。カレブ様の言うとおりでした』

カレブとネデルは役目交代をし、主人を通したネデルは外側から扉に鍵をかけるために引き下がった。そして、前回隠れたのと同じ、隣の部屋へとそっと入った。主人に危害がおよんだらすぐに駆けつけるために。

## 第14話

自分の膝の上で寝かかっていたマーシャは、名を呼ばれたような気がして顔をあげた。

「・・・マーシャ？」

彼女の膝の前で、ベッドに横向きに座ったカレブが彼女の膝をたたいて彼女を起こしていた。

それほど驚きはしなかった。彼女が連れ出されるとき、男が“カレブ”と何度も言ったのだ。この移動はカレブがやってくれたんだろうと思った。

「カレブ？」

彼の黒い大きな目が揺れて笑顔になった。

「このきれいな部屋に入れてくれたのは、あなたでしょ？ありがとうございます」

彼が理解できるとは思わなかったが、礼を言いたい気持ちだったので構わず彼女はしゃべった。彼は困ったように眉根をひそめたが、彼女が好意的な態度をくずさなかったので、それが悪いことではないと察したらしい。再び、大きな口を横に伸ばすようにして笑った。

カレブの目の前にいる異人の女は、自分たちとは違いすぎる人種ではあったが、まったく同じとも思える親愛の情を持っているように思えた。

彼女は初対面のカレブを怖がるどころか親しみを感じているらしく、彼自身も妙な温かい感情が胸の底から湧き上がってくるのを実感していた。急に、この女とは昔から繋がっているのだとカレブは感じた。彼女の意思を無視した勝手な思いつきから連行したというのに。ただの好奇心からの行動が、実は運命に定められていて必然的に起きた出来事のように思えて、カレブは混乱した。

彼が何も話さずに驚いたようにじつと自分を見つめているので、マーシャは居心地が悪そうに膝を動かした。はっとしたカレブは彼女の膝から手を離し、彼女から視線を外したが、すぐに彼女を見つめ返した。自分で彼女をこの部屋に追い込んだくせに、彼は行動に移すのをめずらしく躊躇していた。

言葉が通じればいいんだけど。マーシャは困惑するカレブを見返した。彼の瞳には勢いがあり、その深い目で見られると彼女は胸がつまり、途方に暮れそうになる。

『言葉がわかればな』

彼女と全く同じ思いをしているのを気づかず、彼がそう漏らす。

何度か視線を交わしては外した後、マーシャはついに苦笑して膝を伸ばした。

「ねえ？」

気をまぎらわそうとしてパンツの腿部分を伸ばしていたマーシャの手を、浅黒い大きな手が掴まえた。マーシャが目をあげると、カレブが上半身を近づけて彼女を見ている。重ねられた手に視線を戻した彼女は、自分をつかむ彼の左腕を右手でつかんだ。小さく身震いし、彼は彼女の首の後ろに手を伸ばした。

彼女と触れた彼の唇からは異国的な香辛料の香りがつたわってきた。

ネデルが扉に鍵をかけてから結構な時間が流れている。二人の居る隣室で声をひそめて主人を待っていたネデルの耳に、主人の苦しそうな吐息が時折聞こえてきた。彼が苦しい思いをしているのではないことくらい、ネデルにもよくわかっていたが、信じられなかった。自分がいる部屋の扉前まで行って隣室の様子に耳を傾けたネデルは、くすくすと小さく笑いあう声まで聞いて耳を疑った。異形に手を出そうなどと思いつく主人を到底信じられない彼だったが、どうやら主人と女は密室で“我々と何ら変わらず”普通に楽しんでい

るように思えた。

そのうちに、扉にぶつかったような音が近くで聞こえ、びっくりした彼はあわてて扉の前から奥に逃げる。主人の身を彼が心配して戻ったのもつかの間、カレブのかすれた声が混じった大きな息が聞こえはじめて、扉を振動させるような音が繰り返し響く。

扉を背に行為におよんでいるとわかり、ネデルは頭にきて、鍵を放りなげて帰りたくなった。反対側の大部屋に納められている女たちからは何の物音も聞こえないが、彼女たちにはこの興味深い物音がはつきり聞こえているだろう。

## 第15話

マーシャは、彼女の背に胸を押し付け、彼女の肩越しに腕をのばして自分を抱きしめるカレブに振り返った。その唇には笑みがいすわり、彼を見上げるマーシャを見て、さらに笑みは顔中に広がった。「わたし、あなたが好きみたい」

彼女の肩に口づけるカレブが顔をあげた。鼻にしわをよせて、彼女に問う。

「何だつて？」

「わたし、あなたが、好き」

彼女が自分の唇を見たので、カレブは顔を寄せて唇をつけた。

「ワタシ、アナタが、スキ？」

花が開くように彼女が口元をほころばせ、カレブは思わずその笑顔に見惚れた。彼は、その耳慣れない音が訴える意味をすぐに悟った。

彼女が彼の方へ体をよじらせたため、カレブは彼女の体が正面を向けるように腕を緩めた。扉の隙間から差し込んでくる月光が彼女と彼女の腕を白く照らす。彼女の肌は断然白く、彼に向きなおった彼女のあごを両手ではさんだ彼は、彼女を見て笑顔を見せた。

「俺も、おまえが、好きだ」

彼はそう言い、彼女を胸に抱きしめるとその言葉を繰り返した。

「俺も、おまえが、好き」

「オレモ、オマエガ、スキ」

彼女の唇が彼の喉にあたり、彼の発した音を彼女が真似した。彼女は、男の腕にぎゅっと抱きしめられた。

カレブはいつまでも出てこなかった。ネデルははやる気持ちを抑えきれずに何度も室内を行ったり来たりし、何度も扉越しに隣の室内の物音に耳をすまし、その度にがっかりして戻ってきた。何かし

らの音がしたりしなかったりだったが、彼を呼ぶカレブの声は空気を伝って聞こえはしなかった。

こんなに長く何をしているのだ、朝になってしまわないか！ 暗闇に全てを隠して危険な試みを早く終わらせてしまいたい彼は、のんきな主人に心の中で毒づいた。

異人の女の魔力に魂でもからめとられてしまったのか？

しかし、今できる事は何も見つからず、彼は仕方なくベッドに戻り、両足を投げ出してそこへ座った。窓から差し込む月光が彼の膝のあたりを四角く照らす。ただ待っていると悪い考えばかりが頭に浮かんでくる。

まさか、あの女に食われてしまったのでは・・・？

ネデルはカレブが残忍に殺されてしまう恐ろしい光景を想像してしまつて、ぶんぶんと激しく頭を振つた。

あのカレブ様だ、そう簡単にやられるわけではない。それに、悲鳴さえ聞こえてこないではないか。

彼は窓から見える、マーシャの目のような深い色の夜空を見つめた。

足の下の手音が不用意な音をたてないよう、ネデルは周囲をばばかりながら、二人のいる部屋の扉の前に近づいた。村中が寝静まつていて、室内からの音も止まつている。彼は息をとめ、ゆっくりとしゃがんで、扉の下部の空間からそつと中をのぞいた。二人のどちらも見えなかったが、カレブの茶色いチュニツクが床に丸まつて転がっているのを見つけた。彼は息をそつとついて、自分の背後に再び目をやった。誰もいない。

それから、しゃがんだのと同じスピードでゆっくりと立ち上がった。今度はつま先だちとなり、扉の上部にある隙間から室内をのぞいた。女の体は見えなかったが、カレブの右足がオレンジ色の織物の上に立てられているのが見えた。左足は織物の中につつまれていた。彼の左足の太腿あたりに茶色の織物の塊が続き、カレブの左

手がそれを支えるように添えられていて、ネデルにもそのふくらみの中身が彼女だとわかった。主人が眠ってしまったのかと思っただが、カレブの手は、大事な宝物を撫でるように動いていた。それを見たネデルはがっくりとうな垂れ、仕方なく、部屋へと引き上げた。

ベッドの上に戻ったネデルは、明日にでもあの女の存在をヨードに報告しようと考えていた。カレブはヨードの力をまるつきり信じていないがネデルは違う。ヨードに過去の“主人の”過ちを打ち明けはしなかったが、彼女は既に全てを知っていて、族長の名譽の為に黙ってくれているのだとネデルは信じていた。祈祷結果が変わらなかったのは、彼女が人一倍、心を砕いた賜物で、それこそが彼女の力の証だ。

カレブ様が明日もあの異人を引き止めようと言い出す前に、ヨード様の手にあの女をさっさと渡してしまおう。

ネデルは喉の奥からこみ上げるあくびを無理に飲み込んだ。夜はすっかり更け、遠出の疲れが彼の手足ににじみはじめていた。

## 第16話

鼻に違和感を覚えて大きなくしゃみをしたネデルは、自分が眠りこんでしまっていたことにその時気づいた。ベッドからあわてて跳ね起き、扉の通気孔からのぞく空が明るい水色へのグラデーションを作っていることに愕然とした。すでに夜明けが近い。

『ああーっ、俺としたことがなんてへマを！』

髪をかきむしりながら、ベッドにいつのまにか放り出されていた鍵をひつつかむ。

主人も眠りこけているのか、主人に呼ばれた自分が気づかなかつたのか。どちらにしても、夜明け前に主人を自宅へ戻さなければいけない。足早に隣室の扉前に行った彼は、押し殺した声で扉越しに主人に二度呼びかけた。少し待ったが、返事も物音もない。ネデルは急いで鍵を開けた。

扉がきしんで開き、室内に滑るように入ったネデルの前に、裸体のカレブが茶色の織物に包まれた女を胸に抱いて眠っている姿があった。ネデルは焦っており、物音をさせないようにしようという注意を払いはしなかった。彼が踏みしめた床とサンダルがこすれて鳴り、その乾いた音がカレブの意識を戻した。危険を察知した時のようにカツと目を見開き、女を両腕で守るように引き寄せると、彼は侵入者を見極めようと首をくるりと入口に向けた。

『カレブ様！』

怒ったような、泣いているようなネデルが走り寄ってきた。

『なんだ、おまえか・・・』

『なんだ、ではありませんよ！もう夜が明けます、早くここを立ち去りませんか！』

彼はカレブの胸にいる女と主人を見ながら悲痛に叫んだ。目の横に青筋がたっている。

カレブが放たれた扉の先を見ると、空の下の方が明るい水色に変化していた。ああ、朝が来てしまうのか……？

ネデルが、早く、早く、と彼を急かしている。ネデルの声が頭の中にぼんやりと反響して、全てが夢の中で起きることのように思えた。昨日の一夜があまりにも忘れ難く、体のあちこちに痺れるような余韻があった。今までに感じたことのない深い感情に支配され、二人は永遠に一緒だという妙な感覚に陥っていた。時間は驚くほどに遅く過ぎ、夜はこのまま明けないのだと思えてならなかった。『お急ぎください、カレブ様！』

けれど今、ネデルは夜明けが来ると言っている。

反応の鈍いカレブにネデルが神経質そうな声をあげた。その声で腕の中のマーシャが目覚め、カレブは彼女に視線を落とした。

「……どうしたの？」

『おまえはまだ寝ている』

彼女の髪を指ですき、カレブは彼女を見つめる。そんな主人の態度を見たネデルは半狂乱になった。

『カレブ様！』

『騒ぐな。わかっている！』

低い声でカレブが怒ったように言い返すと、ネデルがようやく口をつぐんだ。そして、振り返ったマーシャと目が合ってしまった、驚いた彼は後ろへ数歩下がった。

『マーシャ、俺は行かなきゃならない』

彼女の注意を引くため、カレブは彼女の後頭部に手を伸ばした。

夜空が明るくなるのと比例して、彼女の目の色も移り変わっていた。

「ワタシ、アナタガ、スキ」

そう発音するとマーシャが喜ぶのを知っているカレブは、再び彼女の笑顔を手に入れた。ネデルが不審そうに主人の顔を見やる。それからカレブは、自分を指差し、部屋の扉を指差した。

『俺は帰る』

「行くのね」

カレブが体を起こすのを見たマーシャは、理解して頷いた。

彼は全裸で床へ飛び降り、ネデルの前にあつたチュニツクを拾うと頭からそれを被る。ネデルは不満そうな面持ちを隠しもせず、無言で主人の帰り支度を見守った。カレブがサンダルを履き終わって彼女に振り向くと、彼女は茶色の織物を体に巻きつけ、ベッドに起き上がっていた。頼りない姿で、カレブは胸が突き刺されたような痛みを感じた。

『行きましよう』

ネデルは無表情でカレブを扉の方へ促した。カレブは外へ足を向けかけたが、発作的に彼女のいるベッドへ駆け戻ると、彼女の唇にキスをした。マーシャは驚いたが、彼が切ない目で自分を見ているのに気づくと、彼を安心させるように微笑んだ。

『オレモ、オマエガ、スキ』

彼女の唇がカレブに嘯き、彼はほんの一瞬、放心した。紫の目に吸い込まれそうになる。

『行くぞ』

彼女を振り切るように部屋を横切ったカレブは、ネデルがいる扉の前を突っ切った。ネデルは、初めて異性を意識した思春期の少年のような表情をたたえるカレブを呆然と見送り、その表情を作らせた元凶だろうマーシャを見た。彼女は寂しそうに視線を床へ向けていた。

外に出たネデルは、静かに部屋の鍵をかける。

あの異人は・・・カレブ様に災いをもたらすかもしれない。

白々としてきた夜空を見上げ、途方もない彼の不安が的中しないことをネデルは何度も空に祈った。

第17話

自宅へ帰る道すがら、カレブはネデルの言うことなど何一つ聞いていなかった。というよりは、異人の魔力だとか、ヨードの目利きとか、妊婦の妻がいるとか、ネデルがくどくどと並べ立てて何を言おうとしているのか、さっぱり理解できなかった。カレブには、マーシャの存在が唯一そこにある事実だった。彼女を一人残してきたことに罪悪感を抱き、後悔していた。

あの部屋は清潔で安全だが、隣にいるべき俺が欠けている。彼は、今にでも彼女の元に戻りたかった。

二人が夜明け前に家に戻ると、心配していた召使たちが喜んで主人の帰宅を迎えた。主人を自宅へ無事に送り届けたネデルだったが、彼の様子がおかしいことを目の当たりにして、抱いていた不安は倍増されていた。過去二度の場合には自分の身体的欲求さえ満たせば、それで終わりだった。ところが、今夜の族長は心ここにあらずで女に魂を溶かされてしまったようだった。

いや、それとも、異人特有の手管にでもやられたか？ああ、一刻も早くヨード様にお伝えし、あの身をカレブ様の手の届かないところにやってしまいたい。

召使の用意した寢酒をカレブは取らなかった。眠ったら、全てが夢に消えそうな気がしていた。彼は、彼女を記憶している自分の手のひらや腕に感慨深げに触り、しばらく思索していた。

ネデルも眠れないままに夜明けを迎え、村が朝を迎える準備で動き出し、様々な音を立て始めるのを聞いていた。母と妻は夜明けを少し過ぎた頃に起き出し、外で朝食の下ごしらえを始めていた。朝の明るい光が小窓からふりそそぎ、室内の気温がゆるやかに上昇していた。

そのうちにさすがに眠くなってきた彼がうとうとすると、今度は

7歳になる1人娘がもぞもぞと起きてきて、父親である彼の脇にや  
つてきた。彼女の母親や祖母が忙しい早朝は、父であるネデルと遊  
ぶのが彼女は大好きなのだ。彼は娘を大事に思い、一緒に遊ぶのも  
楽しんでいたが、主人への不安と寝不足に悩むこの時ばかりは、幼  
い娘の無邪気な元気を鬱陶しく思った。

同居する弟家族、母、妻と娘と一緒に朝食をとり、その後は「妊  
婦の家」に寄ってから族長宅に訪問するのを日課としているが、こ  
の日、ネデルは別の場へ行った。祈祷所の独立棟にこもっている祈  
禱師ヨードに謁見し、異人の件を報告しようと思っていたからだ。  
収穫祈願の儀式を前に精神を集中する目的で棟にこもってはいるが、  
日が悪くなければ、心に迷いのある者たちが彼女を頼って行くと、  
扉越しに話を聞いて、必要であれば彼らに助言を与えてくれる。そ  
の日の良し悪しは村人たちにはわからず、当日になって彼女が弟子  
たちに伝える。

結婚後、妻との間になかなか子どもが授からなかった時期にネデ  
ルは彼女の助けを請い、祈祷所に家畜やアロ工等の贈り物をし、1  
年後にひとり娘を得た。娘はとてもかわいい。彼は、ヨードには多  
いに感謝していた。

祈祷所の門を越えると、祈祷師見習いである弟子たちが庭で作業  
をしていた。ネデルに気づいた一人が目を閉じて頭を軽く下げる。  
祈祷師たち特有の挨拶だ。

『おまえたち、ヨード様に面会したいが今日はできるか?』

三人を順番に見て、ネデルは尋ねた。残念ながら、全員が首を横  
に振った。

『今日はいつにも増して悪いめぐりの日だそうで、ヨード様は誰と  
もお話になれません』

半分予想していたことだ。

『・・・そうか。仕方ない、それでは、また明日来ることにする』  
『し足労さまです』

三人の弟子に礼を言い、ネデルは歩いてきた道を引き返した。主人をどうやってあの異人から遠ざけようと考えながら。

祈祷所の次に、彼は数時間前に後にしたばかりの族長宅に行った。家の前で木の皮をなめしていた召使の女がネデルを見つけ、声をかけてきた。

『ネデル様、族長はまだお休みになっていますよ』

夜明け近くまで戻らなかつたことを考えれば眠っていて当然だ。

彼は納得し、言った。

『それなら、また昼過ぎに戻ってくる』

夕方まで待つてしまえば、自分の訪問より先に起きたカレブが何か行動を起こしてしまう怖れがある。聞き分けのない子どもに分別をつけさせるように主人をうまく説き伏せよう、と彼は考えた。

『そういえば、ネデル様？長老たちが先ほど訪ねてこられたのですが、族長がまだお休みだったのでお帰りいただきました。何かご依頼があるとか……。ネデル様でもいいとおっしゃっていましたが、お伺いになりますか？』

『長老のご依頼か。……。いいだろう、どなたの家へ行けばよい？』

ネデルは、召使が名を挙げた長老の家へ足を向けた。

## 第18話

めまぐるしく色々な出来事が起こった昨日を思い返し、マーシャは心地よい寝具の上でぼんやりとしていた。ここがどこでいつなのか、想像すらつかない。だけど、あまり悲観的に考えたくはない。わかっていることは、彼女は何らかの原因で時空移動機から一人放り出され、未知の世界で生きているということだ。

もしかしてこの体験も、学生には事前に知らせず、危機脱出能力を測る目的の試験の一部なのかも。

彼女は視線を移動させて、窓から見える昼間の青い空を見た。雲ひとつ見えない。彼女の口からため息がもれた。

この体験が試験の一部なんて事は考えられなかった。

だって、私は戻る方法を知らない。

衣服は既に身につけていた。彼女の服を、下着にいたるまで、カレブはもの珍しそうにつまみあげては、細部までよく観察していた。昨夜に自分がしたことが脳裏に浮かび、マーシャの動悸が早まった。こんな体験は初めてだ。初対面で、言葉が通じない男相手と。しかも、私たちは信じられないくらいに気が合った。

外の明るさから判断すると、昼頃だ。昨日の夕方に出された食事で降、胃に何も入れておらず、空腹にお腹があえぐ。生存の危機に瀕しているかもしれないというのに、体は通常どおりに機能している。昨夜のことがあるから、よけいにお腹が空いているのかもしれない。

・・・あの人はまた会えるのだろうか？

そのとき、彼女は扉の前に誰かが現れた気はいを察し、そちらを見た。扉の上部の隙間から、今はもうよく見知った男の黒い瞳が覗いていた。

「マーシャ？」

彼女はベッドを降り立ち、扉まで走り寄った。扉の鍵が開けられ、男が昼間の光の中に姿を現す。彼女が安堵した顔を見せると男は微笑み、部屋に踏み入った。左脇に食物のつまった袋を抱えていた。「カレブ！」

「腹が減っただろう？食物を持ってきた。一緒に食おう」

茹でジャガイモ、固パン、山羊肉の煮込み、蒸しイモ、塩茹でコーン、山羊のミルク。彼女が大喜びで袋の中をのぞくのを、彼は満足そうに眺めた。彼女がはじけるような笑顔で自分を見上げ、カレブは、太陽の光の下で初めて目にした彼女の瞳にしばし、意識を奪われた。

「ありがとう！」

彼女に肘をつかれ、カレブは現実を引き戻される。

こんなに表情が変わる女も、こんな想いも初めてだ。

彼は彼女の肩を抱き、ベッドの上の織物を払いのけて、そこへ持参した食物を拵げた。空腹だったはずの彼女は食べ物を見て目を輝かせて嬉しそうだ。だが、自分を見る彼女の目はもつと嬉しそうだとカレブは思った。

彼がマーシャの服を全て手にとって確認したように、彼女はカレブの用意した食事を一つ一つ、珍しそうに見ていた。匂いをかいでは笑顔を見せる。彼女の動き全てが新鮮で魅力的だ。口に食料を入れるたびに彼女は驚き、嬉しがり、満足していた。言葉はわからなかったが、彼女がとる反応や行動は、彼女の内側の感情を手取るようにわかりやすく語っていた。

食事をした後、床に座ってベッドの台に寄りかかっていると、マーシャがカレブの腕に腕をからませてきた。彼女の二の腕は柔らかく、脇にはさむと温かかった。

それからカレブが彼女を床にやわらかく押し倒すと、彼女は軽やかな笑い声をあげ、彼は彼女の伸びてきた両腕に頭を抱かれた。日はまだ空高かったが、部屋には真夜中が落ちてきて、カレブは彼女

の瞳の中にある紫色の闇にいた。幸せなものにもどかしく、力強いのに切ない感情が、カレブの心を溺れさせた。

## 第19話

昼過ぎにネデルが族長宅をもう一度訪ねると、彼が朝出会った同じ召使に、族長が死んだように眠りこけていて起きてこない、と長いため息をつかれた。彼女の不満や懸念ももつともだが、カレブが在宅しているのが何よりだと思っていたネデルとしては嬉しかった。主人の疲労度合から想像すれば昼まで起きてこなくても無理はない。そこで、夕方にまた立ち寄る旨を彼女に伝えると、ネデルは安心して自宅へ戻った。あの異人の部屋の鍵は自分が持ち帰っているし、夕方には大部屋の食事を運ぶ者の目があって、主人の自由がきかない。

夕方までの時間に昨夜取り損ねた睡眠をとろうと、ネデルは自宅の柔らかい寝具の上で思い切り伸びをした。

夕方、その日三度目の訪問をしたネデルの前で族長の召使たちが慌てふためいていた。護り番と召使の女が玄関前で言い争いをしている。その緊張感の漂う光景に、ネデルは一番年下の召使の女を呼びとめて何事かときいた。

「カレブ様が、いつのまにかいないのです！」

「いない？」

ネデルはさつと青ざめた。

「昼過ぎに俺が来た時にはいたはずだ。いつからいないのだ!？」

「私はよく知りません! 私たちはカレブ様が寝室にずっといると思っていたのですが・・・護り番が昼前に、族長が裏庭にいるのを見たと・・・」

「何だと!？」

やられた!! ネデルは自分の認識の甘さに悲鳴をあげた。

してやられた! あの異人のもとへ行ったのだ。こうなることを予測しておくべきだった!

召使たちはオロオロし、護り番たちは族長を探しに出かけようとしていた。

『ああ、どうしましょう？カレブ様の身に何かあったら、ああ！どうしましょう！？』

『おまえたち、カレブ様の寝ている姿を確認しなかったのか？』

『えっ？ええ、したそうですわ！でもよく見たら、服を丸めて置いてあっただけとかで・・・』

『愚か者！カレブ様の失踪はおまえたちの怠慢のせいだ！族長に何かあればタダでは済まないぞ、よく心に刻んでおくのだな！』

『はっ、はい！申し訳ございません！』

頼りにならない召使の女を追いやり、ネデルは走り出そうとした護り番を大声で呼び止めた。焦っている男はものすごい形相で振り向き、相手がネデルと知るやいなや、任務の怠慢を責められることを想定してうるたえた。ネデルはもう一度、男を呼びつけた。

『ネ、ネデル様？その・・・今から族長を探しに行くところですよ』

『わかってている。だが、その必要はない』

『は？』

男が面喰らってネデルを見た。召使たちもネデルに注目した。

『カレブ様を探す必要はない。居場所に心当たりがある』

そして、同行しようとする護り番たちを切り捨て、ネデルは苦々しい顔をして、村の北へと歩いていく。

牢小屋を経由して族長宅へ戻ったネデルは、どうにも腑に落ちなくて首をひねった。主人を連れ戻そうと訪ねた“生娘の間”にはカレブはおらず、ネデルがいきなり開けた扉の向こうで異人の女がびっくりしていた。室内に主人のいた形跡はなく、不必要に異人の恐怖と不審をあおっただけだった。いみじくも自分の姿をあの女の視線にさらしてしまったことで、彼は不吉な出来事が自分の身にふりかかってしまうのではないかと恐ろしかった。

しかも、念のために牢小屋も確認しようと思った道の途中で、

大部屋の娘たちに食事を運んでくる途中のヨーダの助手に出くわしてしまった。女に、うさんくさい顔でにらまれてしまった。“生娘の間”と牢小屋がある一帯は人家がなく、一般の人々に遭遇する確率が低いので、そこをうろついていたネデルは助手に怪しまれたのだ。

助手は口に障害があつてしゃべれず、そのためにヨーダの庇護を受けているのだが、卑しい噂話をしたくてもできない彼女はヨーダの良い助け手になっている。この一帯でまるつきり用事がないともいえないネデルとの遭遇について、精神統一を実践している女主人の邪魔をしてまで助手がわざわざ教えることはないと思うが、油断は禁物だ。牢小屋を訪ねて牢番や守番といつになく言葉を交わし、自分が彼らを懸案していると印象づけることにネデルは努めた。

牢小屋にもカレブは寄っていなかった。

## 第20話

族長の家に入り、ネデルがカレブの居室を見渡していると、裏口から入ってきた護り番がネデルを見つけて近寄ってきた。男はネデルを捜していたようだった。

「ネデル様！」

「ああ」

男に顔を振り向けもせず、彼がそっけない返答をしても気にもせず、男は彼の前に立った。

「先ほど来た酒造りの少年が言っていたのですが、東の岩柵で槍投げの練習をされているカレブ様を見かけたそうです。何人かの子どもが周囲で見物していたそうですよ」

「何だつて？本当か？」

「はい。・・・行つて、お確かめになつてはいかがですか？」

男が、彼を意味ありげに見つめて言った。主人が居ないことで使用人たちをひどくなじり、居場所に心当たりがあると豪語して出ていったネデルが空振り帰宅したのを面白く思っていないのだ。ネデルはその振る舞いにむっとしたが、さらに悪態をつけて自分の印象を悪化させたくなかつたので、何とか感情を押し留めた。

「同行しましょうか？」

「結構だ。行つてくる！」

頬が赤くなるのを男に見られない前にネデルは居室を抜けていき、男は冷めた顔で彼が去っていくのを見送っていた。

主人も主人だが、使用人もなつてない！

カレブの無事を知った召使たちが庭で夕食の支度にとりかかっていた。主人の居場所を知つたのはネデルが最後だったようだ。彼は持つて行き場のない怒りを発散させようと、地面にどすどすと音をたてて歩いた。

村の境界線でもある東側の切り立った白い崖は、男たちにとってかっこうの武術の練習場となっている。直角に近い角度の崖の高さは村の反対側からも見えるほどに高く、崖の表面はほどよく柔らかくて、石で突けば簡単にポロポロと崩れる。

ネデルが練習場を一面に見渡せる近さまで来ると、地面の思い思いの場所に座った5、6人の子どもたちの向こうに、彼に日に焼けた背中を向けているカレブの姿が目に入った。大人は他におらず、上半身を剥き出しにして筋肉質の体を露わにした彼は、助走をつけて大きな槍を投げようとしているところだった。子どもたちが甲高い声ではやし立てている。

吠えるような声をあげてカレブが放った槍は、岩につけられた赤い点を手のひら幅ほど右にずれて岩に突き刺さった。岩とカレブの中間地点にいた少年が岩まで走っていき、彼の身丈1.5倍ほどもある長さの槍を岩から引き抜いた。カレブは額の汗をぬぐい、走ってくる少年に途中まで近づいて、その手から槍を受け取った。それから彼は振り返り、そこにネデルが歩いて来るのに目を留めた。

カレブが起点に戻ると、隣にすつとネデルが並んだ。

『探しましたよ』

カレブは眉をあげた。

『何か用事だったのか？』

『そういうわけではありませんが……。家の者に行き先ぐらいは告げて、お出かけください』

『忘れていた。今度から気をつける』

汗で額にはりつく前髪をかきあげ、カレブはほうつと息をついた。運動で上昇した彼の体温がネデルにもじわりと伝わってくる。ネデルはカレブの横顔を盗み見て、彼にほんの些細でも異変がないかを観察する。

『こちらにずっとおられたのですか？』

『そうだ』

首にまとわりつく髪をうるさそうに払い、カレブは崖の赤い目印を見つめている。一見して、彼に妙な点はない。

『・・・用がないならどいている。夕食までには戻る』

カレブは目でネデルに離れるように促し、長槍を持ち直した。まだ問い詰めたい事が山ほどあったが、ネデルはそれを飲み込んで子どもたちが座る場まで離れた。

カレブは神経を集中し、槍を肩の後ろに掲げると、また走り出した。子どもたちが手をたたき、高い声で騒ぎ立てる。放たれた槍の先は赤い点に当たった。

槍を受け取って戻ってきたカレブは、ネデルが子どもたちに何かを尋ねているのに気づいた。風によって、会話がはっきりと聞こえてくる。

『・・・ずっと、ここにいたのか？』

『ずっとさー！』

『ずっと、ここにいたよ！』

『ずっとって、どれくらい？』

『そりゃあ、ずっと長い間さ！僕たち、ずっと族長と一緒にだったよ！』

ネデルの困惑が手に取るようにわかる。カレブは思わずもれた笑みを手で隠した。

彼らの元に着いたカレブはその中でも年長の1人の少年を手招きした。呼ばれた少年は顔を輝かせ、自分たちの族長に駆け寄っていた。

『特別に、おまえにも教えてやろう』

残りの子どもたちから歓声と羨望のため息があがった。村の中でも1、2位を争う長槍の名手カレブから指導をつけてもらえるのは、とんでもなく名誉なことだ。ネデルは退屈そうに、その光景を眺めた。

## 第21話

夕日が西の空に低く傾き、見物していた少年の中の兄弟2人が帰っていった。それを機にカレブもやっと投げ槍の手を止め、少年たちは家に帰る時間が来たと悟った。賑やかに族長に別れの挨拶をし、彼らは元気に各自の家にと走っていく。

結局、カレブが練習を終えるまで待つていたネデルは、主人の長槍を代わりに受け取ると、一緒に彼の家まで歩いていった。主人への疑いを完全につぶすまでは、気分がすっきりしなかった。

『最後までつきあわなくてもいいのに』

自宅が見えた頃、あきれ半分でカレブがネデルの顔を見下ろした。

『カレブ様の投げ槍を久々に見られて、よかったです』

カレブは肩をすくめた。

二人が家の玄関に姿を見せると、護り番がネデルにちらっと視線を走らせ、主人に迎いの挨拶をした。召使たちが寄ってきて、汗だくとなったカレブにあれこれと世話を焼く。召使の手にカレブを引き渡したネデルはひと足先に居室に行き、主人の帰りを待つことにした。既に用意の整った料理が召使部屋にあるらしく、酸味のある果実の香りが鼻につく。彼は落ち着きなく、部屋の中央で立ち尽くしていた。

『ネデル』

隣の控え室からカレブがひょいと顔を出した。

『えっ？』

『おまえはもう戻っていいぞ。今日は特に用事はない』

『は・・・』

ネデルが少しうろたえ、視線をさまよわせるのを見て、カレブが不審そうに顔をしかめた。

『何だ、何かあるのか？』

『あ、いえ。……その、今日、長老が来て……』  
『ああ、それなら聞いた。長老の家に寄ったのでな。おまえも行ったそうだな』

彼が“生娘の間”に行っていたと疑っていたネデルは、拍子抜けした。

『そ……うですか？ならば結構です。一応、お耳に入れようかと思っただけなので』

ネデルが明るい声となったので、カレブは納得して小さく頷いた。召使の女がカレブを呼んでいる。

『また明朝な』

カレブは隣の部屋に首を戻し、ネデルは頭を垂れて帰宅の意を表した。ほんの少しでも主人を疑った自分をネデルは恥じた。

『ああ、ネデル？』

居室の出入口をくぐろうとした彼を、再び主人の声が止めた。彼が何だと思っただけ振り返ると、上半身がまだ裸のカレブが居室に入ってきた。ネデルも歩みを戻した。

『何か御用でしょうか？』

カレブは頷き、ネデルの隣に立った。

『あの女に食事をやるのを忘れるな』

はっとして主人を見上げるネデル。しかし、その顔には今朝未明にあつたような、艶っぽい表情はなかった。

『しかし……』

『捕虜を飢え死にさせる気か？ そうなれば責めを負うのはおまえだぞ。他の者と同様に食事を与えておけ』

『は。ですが、あそこへ近づくのはどうも……』

『おまえは文句が多いな。今さら、牢に戻すこともできまい。俺に行けとでも？ 鍵を持っているのはおまえだ、おまえがやれ』

そうだ。主人を疑い、それまで主人が保管していた鍵を自分が持ち帰った。

主人カレブは、面倒なことに関わり合いたくないとでも言うような顔だ。ネデルがつい、湿ったため息をもらすと、主人がじろりと彼を見た。

刺すような視線を向ける主人に抗えず、また、自分が行くことで主人を女から遠ざけられると考え、ネデルはしぶしぶ同意した。それを見たカレブはそっけない態度で、彼を帰した。

ネデルは、村が完全な暗闇で覆われるのを待ち、共同の食事を用意する棟に向いて一人分の食事を受け取った。その足でマーシャの拘束されている小屋に行き、持っていた鍵で扉を開けて、中に食事を押し込んだ。ネデルが怯えるのを察したららしい彼女は、彼が来ても動こうとせず、ネデルはほっとした。

主人の彼女への興味は目覚めと共に自然消滅したと考えることにした。

## 第22話

同じ棟に監禁されているらしい“仲間たち”に日に二度の食事が支給されているのがわかり、ネデルが運ぶ自分用の食事と同じ頻度でもらえるだろう、とマーシャは漠然と思った。ネデルはカレブと違って彼女を恐れ、その恐怖からつつけんどんな態度をとる。彼女の近くに来ることさえ拒む彼だから、危害を与えられることはないだろう。

部屋の隅に転がっていた白い石の破片を床や壁につけると白く線が付くとわかり、マーシャは小窓の下に短い線を縦に一本引いた。映画などでよく目にする、監獄に閉じ込められた受刑者が日数を数える、あれだ。

まさか、そんなドラマみたいな行為を自分ができることになるなんて。

事故を知った学校側が、その線の本数になるべく少ないうちに彼女を救出してくれることを期待し、彼女は恐怖に体が支配されそうになるのを必死に耐えた。絶望するのは、まだ早い。

彼女は、複数の大学合同研究会の発足パーティーで、助教授フレッドマンが教員たちに見せた、自信たつぷりの目をなぜか思い出した。プライベートな面は知らないが、とびきり優秀な人だ。事故を知れば、きっと対策を講じてくれる。

涼しい夜の空気の中に、マリファナに似た匂いが混じっていた。石の床をひたひたと進む、かすかな音が近づいてくる。彼女は脈が速くなるのを感じた。

扉が外側にゆっくり開く。

ベッドの上に立つマーシャを、部屋に体を素早く入れたカレブが不思議そうに見上げた。マーシャには初めて上から見るカレブが子どもっぽく見えて、彼女は小さく笑った。

『そこで何をしている？』

彼とは、会ったばかりとはとても思えない！

マーシャがベッドを蹴って彼に飛びつくと、カレブは驚きながらも彼女の背中を支えて抱きとめた。首に両腕をまわし、彼の肩に頭を置いた彼女は、カレブの腰を両足ではさむ。カレブは彼女の背中から腕をずらし、彼女の太腿を抱えるようにして彼女の体重を支えた。

『何だ。どうした？』

彼女の頭の上で声がする。風の中で感じたマリファナの匂いがカレブの首から香ってきた。マーシャが鼻をその首にくっつけるようにして香りを感じると、彼が喉を低く鳴らした。匂いで神経が酔いそうだった。

『……何かしゃべれ。おまえの声が聞きたい』

振り絞るように言うと、カレブは自分にしがみつく彼女の体を引きはがす。

「1日に二度もあなたに会えるとは思わなかった」

カレブはマーシャを上目使いに見て、にやりと笑った。

『わかったぞ。今日は二度来たからな、俺にまた会えて嬉しいと言っただろう？』

彼女がくすぐったそうに笑った。

カレブはマーシャの足を一本ずつ自分の腰から降ろし、自分の前に立たせた。一族の女たちはカレブの肩にも届かない背丈だということに、彼女の頭は彼の目線にまで届いている。最初こそ彼女の大きさに面食らったものの、今では彼の体にあたる彼女の体の各位置が気に入っている。

「カレブ？ ここがどこで、今が何世紀かわからないけど、私があるあなたに出会えたのは本当に幸運だと思ってる」

彼女がしゃべるのをカレブが真顔で聞いている。そうしていると全文を理解しているかのようだ。

「私とあなたはどこかで繋がっていて、だから私がここに引き寄せられたのかな？」

マーシャは自分の手をかざし、そこからカレブに繋がる、見えな  
い糸をつまむような仕草をして、彼の方へ糸を伸ばした。彼は不安  
そうに彼女の手を見たが、はっと息をのんで目を見開いた。彼も、  
彼女に手をかざす。

『おまえも、そうなのか？ おまえも、俺たちが縁えにしで繋がっている  
と思っているのか？』

カレブの伸ばした糸と彼女の透明な糸の先端が空中で出会う。彼  
女の中指が、彼が親指と人差し指で作る円を自分の方へ引いた。彼  
女が目を細めてカレブを見つめ、彼の唇は思わず震える。

「不思議。私の言っていること、わかっているのね」  
マーシャは彼の指を手の中に握った。

## 第23話

「ねえ、もつと何か言つて。あなたの言うことをわかりたい」

『何をしゃべっているか、俺にはわからない……!』

カレブが口惜しそうに顔をゆがめた。マーシャは彼のあごに手を伸ばし、辛そうな彼を励ますように輪郭を撫でた。

『ワカラナイ』

彼女が聞き取れた、カレブの言った最後の部分を復唱すると、カレブがあえいだように息を吐いた。

『ワタシ、ワカラナイ』

『俺はおまえをわかりたい』

マーシャは大きく頷いて微笑んだ。背伸びをして、横を向いたカレブの頬にキスをする。彼女に視線を戻したカレブの瞳は潤んでおり、白目が赤かった。

彼女は彼の手を引いて、部屋の隅にある棚の前へ連れて行った。

彼は怪訝な顔をしている。

「これは何？」

棚の上にあつた石人形をつかみあげ、カレブの前に差し出す。訳がわからない彼は、大きく眉根を寄せた。

『何が知りたい？ その人形がどうした？』

「あなたはカレブ、私はマーシャ」

名を呼びながら、彼女はそれに応じて彼と彼女自身をたたいた。名前を意味する音だけを聞き分けたカレブが頷く。彼女が人形をたたいて言った。

「これは？」

『人形』

『ニンギョウ』

次に、彼女はネデルの持ってきた食事が入っていた皿を取り上げ、

反対の手でたたいた。

「これは？」

『皿だ』

『サラダ』

突然、彼女の意図がわかったカレブは彼女に首を振ってもう一度言いなおした。

『皿』

『サラ』

完璧な発音ではなかったが、彼女はカレブの言うことを一度で聞き取り、覚えていた。泣き笑いのような表情を彼女に向けると、彼女は頼もしい笑顔をくれた。

それから彼女はぐいっとカレブの腕を引っ張ると、ベッドの上に飛び乗って、窓から見える月を指差した。

「あれは？」

『月か？ 空か、どっちだ？』

彼は月光のあたる腕を彼女に見せ、両手で丸の形を作った。

『月か？』

彼が空に浮かぶ月をそうやって指差すと、マーシャは誇らしげにうなった。

「そうよ、月。なんて言うの？」

『月』

『チュキ』

彼女の発音が中途半端で別の意味を示す言葉になり、彼はぶつと吹き出した。

『チュキじゃない、ツキだ。チュキだと狂人の意味になる』

「ねえ、何で笑っているの？」

彼がやつと笑ってくれたことに喜び、マーシャは彼の腕をさわって、訊いた。彼は笑いながら、口をすばめて大げさに発音してみた。

『月』

「チユキ？」

カレブはおかしくてたまらない、と言ったように笑った。

彼女が何度言いなおしても、正しい“月”の発音はできなかった。  
『わかった、もういい。おまえの“チユキ”は“月”のことだと認識しておく』

一緒に笑っていたマーシャがすねたふうに口をふくらます。彼は息をついて、彼女の腰にさりげなく腕を伸ばした。

『いいか？ あれはチユキだ』

自分で言っておいて吹き出しそうになるのを何とか堪え、彼女に空の月を指差して見せる。

マーシャの顔が月の明かりに照らされ、まつ毛の横と鼻の横に陰をつくる。急に、月光に彼女が溶け出していきそうな気がして、カレブは彼女を引き寄せた。

「きれいなね」

ほぼ満月に近い月を見上げ、マーシャは彼の背に腕をまわす。

『なあ、マーシャ？ あの月は、実は“狂人”なのかもしれないな。あれのせいで、俺が“狂人”に変わってしまったって、それも悪くないだろう？』

マーシャが顔を傾けてカレブを不思議そうに見上げた。

マーシャの腰にまわされていたカレブの手が動き、彼女の髪をすくい、耳にかける。その耳元へカレブの唇が近づいた。

## 第24話

ネデルがマーシャを閉じ込めてから5日が経過した。彼女には疲労の色が見えてきたが、支給される食事は残さずたいらげていた。ネデルが食事を差し入れる時はほとんど、彼女はベッドの上に座っていて彼に注意を向けなかった。

主人カレブの口からそれ以降に異人の話が出ることはなかった。彼は普段どおりに長槍や弓の練習をしたり、長老たちの相手をしたり、ネデルと共に村をまわったりして過ごしていた。護り番たちが、自宅をこっそりと抜け出る主人を目撃することもなかった。食事もきちんと1日2食とり、何かに悩んでいる素振りもなく、健康そのものだった。ネデルは、主人の頭から異人のことがすっかり忘れ去られてしまったのだと思った。過去二度の時と同じだ。

その日もカレブは東の岩棚で子どもたちを相手に槍投げを教えていた。途中で母親に呼びつけられ、練習を抜けるはめになった少年が、怒りながら母親に頼まれた家事を手伝っている時に何人かにしやべったのだ。

カレブが直々に子どももの面倒を見ることは過去になかったが、ここ数日になって彼は熱心に指導しているらしかった。それを知った長老の一人は、初めての実子が誕生するにあたり、族長に子どもへの愛情が芽生えたのだらうと嬉しい変化を喜んでいた。ネデルは何となく腑に落ちなかったが、カレブの指導の様子には子どもに対する情が確かに含まれていて、長老の言葉を全面的には否定できなかった。それに、年長者が年少者に技術を伝承するのは昔から推奨され、カレブの行いに嫌な顔をする理由もない。

カレブの妻は変わりなく順調で、出産が始まる前兆もなかった。彼女はあいかわらず退屈していて、毎日訪ねてくるネデルに余興を期待し、それが叶わないとなると彼女の不満をぶちまける形で一方

的に話し続けて、最後には結局満足して一方的に彼をさがらせた。

ネデルの妻もおしゃべりだが、前族長のひとり娘としてかなり甘やかされて育った彼女と違い、もう少し人間的な思いやりがある。彼女に出産まで仕える女たち全員が彼女の身勝手ぶりに辟易していた、毎日足を運ぶネデルの役割に同情し、彼に親切してくれていた。

日没近くなり、カレブが子どもたちに囲まれて自宅に帰ってきた。ネデルがふと見ると、少年たちはそれぞれに自分の背にあった長さの槍を持っている。カレブが職人に指示をし、子どもたちの為に造らせたものらしい。主人の変貌ぶりには目をみはる。

去っていく子どもたちに片手をあげ、カレブは玄関前の地面に足を投げ出して座った。

『お帰りなさいませ』

口を開けて天を仰いだカレブに召使の女が寄っていく。

『ああ、喉が渴いた！ 麦酒を持ってきてくれ』

『まあ、ここで飲まれるのですか？ 中にお入りになって』

『外の方が気持ちがいい。ここで少し休みたい』

やんちゃな子どもに目を細める母親のように女は笑い、彼にやる酒を取りに家の中に入ってしまった。

彼は汗に濡れた髪を乾かそうとでもするように、吹いてくる風の中で頭を何回か振り、暮れていくオレンジ色の空を眺めた。風は髪の中をぬい、服をはだけた上半身をさわやかに吹きぬけていく。

ネデルが近づいていくと、目を閉じて心地よい疲れに身を任せている主人の横顔が見えた。汗に濡れた背中が夕日に照らされて光っていた。

『お帰りなさいませ、カレブ様』

『ああ』

声の主がわかっているカレブは目を閉じたままだ。

『今日も子どもたちの指導をされたんですね。良い行いだと長老た

ちが褒めておりましたよ』

『ふん、何を今ごろ』

悪態をつくが、カレブの声はうわずり、唇の端が上がっていて嬉しい様子だ。

『それで？ 今日は何が変わったことでもあったか？』

『いいえ、特には。ヨード様もまだ籠りきりで、儀式の日取りはわからないようです』

カレブが真顔になり、目をすつと開けた。

『あの妖婆、一生そこから出てこなければいい』

『カレブ様！』

『冗談だ』

カレブはやりわり否定し、また目を閉じた。

ネデルに、カレブの暗い怒りが伝わってくる気がした。

『奥様の様子を見て参りましたが、お変わりなく、大変お元気でした』

『あの女は、そうだろう』

彼が自嘲気味に笑い、ネデルは話を続けるのが難しくなった。彼は目を開けず、ネデルは困ったように彼の体を眺める。

ふと、カレブの右肩甲骨のあたりに斜めに走る二本の引っ掻き傷がネデルの目に入った。傷は深くはないが、まだ新しい。

『……その背中の傷はどうされたのです？その、右肩の少し下』

『傷？』

カレブが目を開け、右肩越しに振り返って見ようとしたが、彼からは死角の箇所だった。彼は左手を背中に伸ばして傷に触れてみようとしたが、ほんのちよつと届かなかった。

いつそれがつけられたか思い出そうとし、視界に見える人家に焦点をあてて考えていたがわからなかったらしく、彼は頭を振った。

『傷などあったか？ 知らなかった』

『ほんの引っ掻き傷ですからね。何かの時に気づかず、つけてしま

南の空の向こう - Against all odds -

ったのでしょ  
う『  
カレブが曖昧に頷いた。

## 第25話

カレブは自分の肩をつかむマーシャの指を一本ずつ優しくはがした。

『マーシャ、爪をたてるな』

「え？」

『爪』

彼は彼女の指先に口づけ、その爪を自分の二の腕にくいこませた。肌がへこんで痕がつき、カレブはわざと顔をしかめてみせる。

『爪が痛い』

「ごめんなさい」

彼の意図することが伝わったのを見て、カレブは微笑んだ。

「ダイジョウブ」

そして、彼女が謝るのを何度か聞いて知った言葉に対応する言葉を発した。彼の笑顔を見て、彼女もふっと力を抜いて笑う。

『背中にもおまえのつけた傷がある。俺も気づかなかった。ネデルにそれを見つけた時には焦ったが、あやつは何も気づいていない。間の抜けた男だ、自分が鍵を持っているから、俺がここに来られないと思っっているんだからな！ 長年この合鍵を保管していた俺が、もう一組鍵を作って持っているとは想像にもしないらしい』  
彼は独り言のようにしゃべってしまい、置いてきぼりをくらったマーシャが不満そうにカレブをにらんでいる。彼は口をつぐみ、申し訳なさそうに彼女を見た。

「何？」

彼女が手を伸ばし、カレブの鼻をつまんだ。

『悪かった、何でもない』

彼の鼻が左右に揺さぶられた。

『わかった、わかった！』

カレブは悲鳴をあげ、彼女の隣にうつぶせに体を横たえた。右手

は彼女の背にそえられたまま、反対の手を使って彼は自分の背中に  
ついているはずの傷を指し示した。

「見えるだろう?」

彼女は、カレブの肩甲骨の上に流れる二本の線を見た。

「ツメ?」

「そうだ」

その後自分を指差す彼女を見て、彼は大きさに悲しそうな顔を  
して彼女の注意を引く。

「イタイ」

「ごめんね」

素直に謝られ、カレブの胸がきゅんと痛んだ。心配するな、と彼  
女の腰を軽くたたくと、彼女の元気がよみがえってくる。

「ネデル、見た」

「・・・ネデルに見られたの?」

彼女は驚いて、そして表情を曇らせた。カレブも記憶力と勘はい  
い方だが、彼女の吸収力はおそろしく早い。彼が端的に彼女が覚え  
た言葉を繋げれば、ほとんどの場合に彼女に正しく理解され、的確  
な反応が続いた。

「バレたの?」

彼女が自分たちの両方を指差すのを見て、カレブにも彼女の心配  
がわかった。彼は彼女の前で首を振った。

「ネデル、知らない。俺が、鍵、知らない」

頭の上にある鍵を指差し、カレブがそう言葉をつなげると、彼女  
の強張った顔がほぐれていく。

「よかった」

「だが、おまえをいつまでもここに置くのは危険だ」

「何?」

「おまえをここには置けない」

彼はいきなり口をつぐみ、口を手でおさえて彼女から目をそらせ

てしまった。彼女が腕をゆすつても振り返らない。

「カレブ、どうしたの？」

彼女は体を移動し、彼の肩に顔をのせた。それでもカレブは振り返らない。

『コワイ？』

カレブはビクツと体を震わせて彼女にゆっくり振り向いた。

「怖いよね」

彼女はうつむき、そして、再び彼に視線を合わせた。

「私だって、怖い」

彼女自身が傷つけた彼の肩甲骨に指をのばし、彼女は体重を移動して、その傷に唇をつけた。ひきしまった筋肉の感触に混じって、唇にひっかかる皮膚の傷。彼は甘んじてそれを受けていたが、彼女がもつと上部に頭を動かすと、彼女の顔を支えて離し、自分の体の向きを変えた。

『明日はおまえをここから出そう』

「何？ 何て言ったの？」

彼女を自分の体の上に移動させながら、カレブは力強く微笑んだ。

「アス、オレノ、イエ、イク」

明日、俺の家に行こう？

マーシャは息をのんだが、カレブの唇がすぐに襲ってきて何も考えられなくなってしまうた。

## 第26話

ヨードとはタイミングが合わず、ネデルはマーシャの存在を未だに報告できていなかった。彼女の弟子たちに伝言を依頼して内容を知った彼らに不要な不安を抱かせたくなかったので、彼は彼女と直接会った時に話そうと決めていた。マーシャを監禁してから6日も過ぎていたが、ヨードは依然、独立棟で沈黙を守っており、ネデルもマーシャの件で緊急性を感じなかったので、彼は報告していない事について深く気にしてはいなかった。

用事があつて義弟宅にいた昼前、大声で自分の名を呼びながら妻が彼らの前に駆け込んできた。ネデルと義弟がびっくりしている前で彼女は激しく肩を上下させ、玄関の方を指差して大きく息をついた。

『ネデル！ 今、知らせの者が来て！』

『まさか、族長に何か！？』

『そうじゃないわ、牢小屋からよ！ 捕虜の半分以上が朝になったら死んでいたって、皆、大騒ぎよ！』

彼女は息切れしてそこで言葉を切った。ネデルと義弟は顔を見合わせる。

『それは本当か？ なんでまた急に？』

『最初は疫病じゃないかって疑ったらしいのよ。だけどよく調べたら、死んだ者たちは全て自害したんだって！ 自分たちがゆくゆく殺されるとわかって自分の身を悲観したのよ。ああ、なんて恐ろしいったら！ そんなことだから、男たちはまた狩りの準備をしているわ。ヨード様から儀式の日のお告げはまだ出ていないけど、今のままじゃ人数が全然足りないもの！ 儀式がいつになっても間に合うように、生け贄を急いで集めなきゃならないわ。この間よりもっと遠くまで出かけなきゃいけないって、大急ぎで皆が準備をしているの！』

ネデルはさつと立ち上がった。

『わかった。俺もすぐに出かける』

『私もすぐに準備をして一緒に行きます、ネデル様』

帰り支度を始めたネデルに義弟も神妙な顔をして声をかける。

『ああ、そうだな。支度が済んだら家に来い』

ネデルは妻を引き連れて、急いで自宅に舞い戻る。途中にある家々でも、事情を知らされた男たちが慌しく支度をしている姿があった。

家に着くと、彼の先回りをした母親が水と携帯食を既に用意してくれていた。ネデルは妻が持ってきた狩猟用の衣装を頭からかぶった。妻が、部族の色である白・赤・黒の顔料で夫の目の下に化粧をほどこす用意をする。

『カレブ様にも連絡は行つたんだな？』

『ここに来た者が、伝えると言つていたわ』

妻が、指につけた顔料で彼の顔を横になぞっていく。

『死んだのは牢小屋の者だけか？ …… “生娘の間”の者たちは？』

『その娘たちは全員生きているそうよ』

彼は胸をなでおろした。あそこに拘束してある異人の女も見つかつてはいないようだ。彼は二重に安堵した。

夫に化粧をし終わった彼女は発奮剤キリルを取り出し、彼の鼻の下と手首、膝の裏にその固形の香料をこすりつけた。体温と混じつて、すぐに独特の匂いが蒸発してのぼってくる。妻が夫の無事を願つて祈りを捧げた。

義弟が家にやって来てすぐ、二人は今季二度目の人狩りに出発した。同じ服装をした男たちが7人で1グループとなつて、村の正門から外の世界に向かって飛び出して行く。彼らの前には、低木と岩乾いた大地が延々と続いている。次に村の門を目にするのは三日後だろうとよみ、ネデルは仲間たちと馬を急がせた。

狩猟用衣装に身を包んだ村の男たちが次々に村の出入口に向かうのを目にし、カレブは複雑な思いを胸に交差させていた。誰かの子ども・親・恋人・配偶者が新しい捕虜として、どこかからこの村へ連れて来られる。この一族に恵みをもたらす儀式の為だけに。一族の悪習は周囲から恐れられていて、家族を奪われた人々は二度と戻らない者の為に一生嘆き悲しむことになる。

今では当事者の気持ちが想像できるようになっていたカレブは、そんな事がいきなり身の上に起きたら、自分は狂ってしまうと確信に近い思いを抱いていた。

狩りに出た男たちは数日間、村を留守にすることになる。人の目が少なくなることカレブは動きやすくなり、マーシャをたやすく自宅に入れられる。彼女を自宅に迎え入れたのを知ればネデルは激怒するだろうが、あの男を丸め込むのはそれほど難しくない。けれど、あの目立つ風貌の彼女を自分のもとでどうやって守る？ ヨーダに嗅ぎつかれたら、あの女は適当な、もっともらしい理由つけて彼女を貢ぎ台の上に送り込むに決まっている。一族の者はヨーダに服従的で、族長であろうと俺の言うことになど耳は貸さない。

あのいんちきな女がいなければいいのに。  
そして、この悪しき蛮習さえなければ。

## 第27話

狩りに行かず残った男たちは、牢で死んだ捕虜たちの搬送に借り出されていた。村の敷地内に埋めるのは縁起が悪いとされ、死んだ人々は村から離れた石の谷に投げ捨てられた。谷底に落ちた死体は鷹や自然の生物の貴重な餌となり、跡形も残らずに処理され、自然界にも害になることはない。村の女たちはヨーダの弟子たちと一緒に、儀式前の捕虜の死によって村に不吉な事が起こらないようにと祈りに忙しくしているようだ。死んだ捕虜の化身は村を浮遊すると恐れられ、母親たちはその悪霊にさらわれないようにと子どもたちを家の中に閉じ込めていた。村は死んだようにひっそりとしており、カレブは気分転換に東の岩棚に行くのも中止した。

『カレブ様、どこかに行かれるのですか？』

太陽が真上に来た頃、玄関に向かおうと姿を現した主人を護り番がみとがめた。カレブは重い息をついて言った。

『その辺を廻ってくる。大丈夫だ、夕方には戻ってくる』

『今日は、外出されるのをやめたほうがいいのでは？』

『家にいると気が滅入る』

彼がそう答えると護り番は何も言わなかった。

村は、信じられないぐらいに人の姿がなかった。天気はよく、乾いた風が村を西にゆるやかに流れていた。カレブが牢小屋の見える場所に立つと、二人いる守番は一人に減っていた。周囲にひと気はなく、カレブは方向転換をして、村の北へ向かった。

何度通ったかわからない石の階段を踏みしめ、カレブはマーシヤのいる小屋の通路にあがった。ふと視線を感じて大部屋の扉の方を見ると、上部の隙間から二組の目がカレブに注がれていた。彼と目が合って両方とも驚いていたが、その目からは恐怖が消え、必死に何かを懇願する目が変わった。カレブは視線が外せずにはいたが、そ

のうちにどうにも切ない気持ちになって下を向いた。

彼は最終目的地に足を進めようとした。だが、扉の上部に女の手が出て、彼は視線を戻さずにいられなかった。さつきとは違う目が無言でカレブに恐怖を訴えていた。彼は同情して彼女に一瞥を与えたが、すぐにその場を後にした。彼の後ろでは複数の女のささやき声が飛び交った。

目に見えない無数の腕が彼の両腕にからみつき、引き止める感触がして、カレブはためていた息を短く吐いて空を見上げた。雲ひとつない青空だ。それから、くるりと向きを変えた。

彼が戻ってくるのに気づいた女がひっ迫した声を出し、何人かが扉に体を寄せているようにカレブは思った。

俺は、何をやっているんだ？

彼は腰に隠していた鍵を取り出した。

『早く行け！ 扉に沿って東に崖まで歩けば、そこにおまえたちでも何とか登って外に出られる部分がある。さあ、早く出る！』

まだ年端も行かない三人の少女たちは救世主カレブに礼を言い、足早に階段を駆け下りていった。そのうちの二人は彼に振り返り、感謝するように組んだ両手を彼に向けた。彼は笑いもせず、ただ、彼女たちに急ぐように、と繰り返した。彼女たちが扉をつたって走って逃げていってその姿がやがて見えなくなると、カレブの気分はすっきりとした。

マーシャのいる扉に行くと、さっきの少女たちのように彼女が扉の隙間からカレブを見つめていた。どうやら、カレブが彼女たちを逃がしているのを見ていたらしい。彼と目があつた彼女は嬉しそうに、瞳までをも微笑ませた。

彼が扉を開けようとする、彼女が一步退いた。扉が開き、彼女から抱きつかれると期待していたカレブは、彼女がその場から動かないでここにこしているだけなのを少しだけ落胆して見つめた。

「ねえ。あなた、彼女たちを逃がしてあげたのね」

カレブは叱られた子どものように扉の外につっ立っている。

「あなたが逃がしたってわかったら、怒られちゃうんじゃない？」

『マーシャ』

カレブがよろよろと手を彼女に差し出した。彼は寂しそうに微笑み、彼女の手が載せられるのを待っている。マーシャは、様子がいっつも違う彼に気づいた。

「どうしたの？ 何かあった？」

彼は笑うだけだ。

彼女は一歩近づき、伸ばされた彼の手首をつかんで引き寄せた。前につんのめるような形で彼はマーシャの体に受け止められる。

「ねえ、どうしたの？」

彼女がカレブの頭を抱くと、彼は長い息をついて彼女の背に手をやった。彼の湿った吐息が彼女の肩にかかった。

『カレブ。イチバン、エライ？』

彼女がそう言うと、彼女に触れるカレブの体が小刻みに揺れた。

『エライ、カレブ』

彼は笑い、笑い皺のできた瞳を彼女の顔の前に寄せた。彼女が、満足そうに笑う。

『俺が偉いつて？ 偉いのはおまえの方だ、俺にこんな事までさせたのだから』

マーシャがカレブの唇をついばむようなキスをした。

『俺は偉くない。まだ、おまえを逃がしていない。俺には、おまえを助けられる力がないっていうのに』

彼の瞳からいつまでも哀しみの色が消えないのを怪訝に思ったマーシャが、彼の耳元でダイジョウブと囁いた。耳にキスもした。彼は彼女の背を抱きながら、胸に沸きおこってくる怒りのような熱い感情を抑えようとしていた。

事態は変わっていない、何にもダイジョウブなんかじゃない。それでもこの女は、変わらずに笑顔でいる。

## 第28話

『……来い。家にはまだ連れていけないが、少し外に出よう。今なら誰にも見つからない』

顔をあげたカレブが彼女の二の腕をつかみ、扉の方へ引つ張った。『ソト、イク？』

カレブは返事をせず、マーシャを何日かぶりに外気にさらす。

久しぶりに見た昼間の直射日光の眩しさに目がくらみ、マーシャは思わず目を強く閉じてしまった。腕や顔にあたる太陽はとても暖かだ、彼女は自分が確かに生きているのだと感じた。カレブはマーシャの手を握り、彼女が外の気候に体を馴らすのを辛抱強く待った。やがて彼女がゆっくりと瞼を開くと、彼らは通路を歩き、階段を通って乾燥した土の地面に降り立った。彼女が懐かしいものを触るように地面に手を伸ばすのを見ると、カレブの胸はキリキリと痛んだ。

二人は小屋の北側に場所を移した。小屋の北側はまったく何も無い、低木と乾燥に強い雑草が蔓延した、ただの空き地だ。並んで壁に体をあずけ、二人は澄んだ空気を胸いっぱい吸い、午後の太陽の日差しを全身に浴びた。マーシャが手を伸ばして彼の手を握りたがったので、カレブはそうさせた。彼女の無垢の笑顔は彼を虜にした。

「ねえ？」

マーシャはカレブの黒く光る目をのぞいた。

「聞いて。私は22世紀から来たのよ。ここには、どうしてか解らないけど、過去から現在に移動する途中に紛れ込んだみたいなの。私の家族は私を心配して探しているはずで、そのうち救出されるはず……と思うの。だけど、私がもしここに一生残らなきゃならないのなら、その時は、カレブの側がいい。ここの生活

はわからないし、言葉も知らないけど、カレブがいてくれれば私はきっと寂しくないと思う」

彼は彼女が言っていることを理解したいと思ったが、途中で口を挟もうとするのはやめた。自分を見つめて話してはいるが、彼女が自分自身に言い聞かせているように感じたからだ。

彼女が話を終わると、代わりに彼は微笑んだ。彼女はそれを目にするのと照れたように笑い、何かを言いあぐねた末、地面にしゃがみこんだ。彼もそれに倣って彼女の隣に座る。

「あのね。私がもしここにいるのなら」

彼女は自分の胸をたたき、続いて地面をたたいた。それから近くにあった小石を拾いあげ、地面に絵を書く。

「これが私、こっちがカレブ」

興味深そうにカレブが眺めていると、彼女の手によって男と女の簡単な絵が描かれた。彼は苦笑して彼女を見る。

「俺とおまえのつもりか。それで？」

彼女は楽しそうに笑いながら、二人の絵の横に四角形を書き、中央に扉の図を付け足した。この村にある典型的な造りの家だ。そのあと、彼女は絵の二人が立つ間に丸を描き、下に伸びる線を書いていった。人間のようだ。

カレブは、何となく彼女の言わんとしている先がわかって顔を微妙に強張らせる。

彼女の手は小さな人間を描きあげた。

「私がもしここにずっといるのなら」

カレブの表情の変化に気づかず、マーシヤは自分と地面をたたき、両手で糸を引くような仕草をした。

マーシヤがこの地に長くいる………？

『ワカラナイ。デモ』

カレブは慎重に彼女に頷いた。

『おまえがこの地に長くいるかどうかはわからない、でも？』

唾を飲んでカレブがマーシャの言葉の先を待っていると、彼女はもう一度地面をたたきながら続けた。

「ここに居るのなら、私はあなたといたい」

言葉はさっぱりだったが、彼女の訴えるような様子から彼はマーシャの伝えようとしたことが直感でわかった。彼はマーシャの描いた、家と二人と一人の子どもの絵を見た。それは、この地に長くいるのならば彼とずっと一緒にいたい、という意味だ。心臓がぎゅつと締められる気がして、喉の奥がつかえた。

それは俺だって同じだ、できるものならば！

彼の動揺を見てとったマーシャは、自分の伝えたことが理解された上で彼の動揺に繋がったことを悟り、彼女が今した事をすぐに後悔した。彼も自分と同じ気持ちだと思っていたのは錯覚だった？

会話を完全に理解し合っているわけではない二人なので、それは充分に有り得ることだ。彼女は自分の間違いを恥ずかしく思って、激しく傷ついた。

最後の助けを求めるように彼を見たが、彼は困惑して口をつぐんでいるばかりだった。彼女は、勝手に自分に都合がいいように想像した自分自身に腹が立ち、そう思わせた彼にも腹が立った。マーシャは、自分が書いた一連の絵を、手で一気にこすって消した。

『ゴメンナサイ』

彼女はさっと立ち上がると、驚いている彼を残して小屋の表の方へ歩き去った。カレブはあつという間の出来事に唾然とし、だが、すぐに立ち上がって彼女を追いかけた。

## 第29話

『マーシャ、待て!』

後ろに近づいてきた足音はみるまに大きくなり、彼女の肩が後ろにぐいっと引かれた。

「やめてよ!」

彼女が怒って叫び、彼をにらみつけると、彼はびっくりしたように口をぽかんと開けた。

『どうした、何を怒っているんだ？ 俺が何かしたか?』

マーシャが逆上して奇声をあげた。

「今、俺は悪いことをしていないって言ったでしょ!？ そうね、悪くないわよ、あなたは単に私と寝ただけで！ 気持ちがあると勘違いした私が勝手に誤解をしただけでね!」

『おい、何をそんなに興奮しているんだ？ ちよつと待て……  
・おまえはきつと、何か思い違いをしている！ きちんと説明……  
・……ああ、どう言えばいいんだ、どう言ったらいい？ 俺はおまえが好きだ、それは変わらない！ 何を一体怒っているんだ？ ……  
・……おい？ おい！ ちよつと待てたら!』

彼の手を振りきり、彼女がつんとした態度で階段の方へ歩いていた。彼は髪をかきむしって口の中で唸ると、それでも彼女の後を追った。

『マーシャ!』

追ってくる彼を見たマーシャはむっとし、履いていた靴の片方を脱ぐと彼に投げつけた。彼は難なくそれをよけ、それにさらに腹が立った彼女は階段を駆けて上がっていく。

彼女の聞く耳を持つとしない態度に彼も腹が立ち、投げられた靴を拾って、彼も階段の一段目に飛び乗った。あきらめないカレブを横目に見た彼女は、今はもう走り出していた。

『待て！ 俺の命令を無視する女はいないんだぞ!？』

元の部屋に飛び込んだ彼女は、そうしてから初めて、逃げ場のないのは彼女自身の方だと気づいた。悪寒が彼女の背中を襲った。自分によくしてくれた彼の怒りを買ってしまったのは知っていたが、もう遅い。

足音が近づいてきて、自分の体を保護するように両腕で自分を抱いた彼女の前に、豪快な音をさせて扉を引いたカレブが走りこんできた。その拍子に扉の上部の蝶番が壊れ、気絶した女のように扉が外側に傾いてだらしなく揺れる。現れたカレブは怒りで目を血走らせていて、その興奮で体から湯気でも出ているかのように見えた。

『おまえ！ 待てと言っただろう！』

彼の手で首をへし折られる自分が脳裏に浮かんだ。彼女は恐怖に震え、彼にとらえられた視線を動かせもせずにその場に立ち尽くした。彼は乱暴に部屋に入ってきて、彼女の肩を力まかせにつかんだ。彼女は、とうとう殺されてしまうのだと悲しくなった。こんなところで、誰にも知られず、誰にも見つけてもらえずに。

とつさに顔をそむけたマーシャをにらみつけたカレブは、彼女が全身を震わせているのに気づいて、はっと我に返った。彼女の口からは小さな嗚咽が漏れていて、彼は自分の乱暴な行為に急にうろたえ、彼女をつかむ腕から急激に力を抜いた。

彼が手を離し、何も攻撃されないのをへんに思ったマーシャは怖々と片目をそつと開けた。

『……怖がらせて悪かった』

彼女が自分を見るのを待ち、カレブは静かにそう言った。

彼の体からは怒りの症状は消えていて、マーシャは安堵して膝から力が抜けていくのを感じた。彼女が自分自身にまわしていた腕をようやくおろすと、カレブの遠慮がちな手が彼女のそれぞれの手を取り、顔色をうかがうように彼女を見た。

『コワイ』

彼女の呟きに、彼は苦々しげに顔をゆがめた。

「悪かった」

「……………うん」

手を伝わって響く彼女の脈が、だんだんと遅くなっていく。カレブは、彼女の内にある不安を払拭したいと思った。

「話せ。何が気に入らなかった？ 俺の、何に腹が立ったんだ？」

カレブができるだけ穏やかに言うと、彼女はうつむいたまま、小さい声で呟いた。

「オレハ、オマエガ、スキ」

何が言いたいのかと、彼は下から彼女の顔を見ようと姿勢をかがめた。

「俺はおまえが好き？」

「私はあなが好き」

カレブは鼻で息をつき、彼女の顔を上に向けた。

「おまえ……………もしかして、俺の気持ちを疑っているのか？」

俺がおまえを……………もてあそんだとも思っているのか？」

当初はそのつもりだったカレブは、何となく顔を赤くして口を手でこすった。彼女を見ると、今にも泣き出しそうな表情になっていて、びつくりする。彼がマーシャの名を呼ぶと、それにはじかれたように彼女が口を開いた。

「私はここでたった一人なのに？ 私がもし、救助されずにここに残らなきゃならなくなったら、ううん、仮定じゃなくてその可能性は高いけど、そうになったら、私があなを頼りにする気持ちもわかるでしょ？ 私はこの誰も知らない、言葉だつてわからない、一人で生きると言われても、何をどうすることもできない。だけど、私はあなたに出会ったし、すごく強い繋がりを感じているし、あなたも私を愛してくれると思ったし、そんな人がいてくれたら私はきっと、この未知の世界でも生き延びていけるんじゃないかなと思えたの。もちろん、不安で……………すごく怖いけど。私はあなた

が好き。私は、一緒にはいられない？　あなたが私をそこまで好きかどうか、私はよくわからない」

『待った、ちょっと待て！』

はつきりとはわからないが、大事な話をされたように思った。握った彼女の手を胸の位置まで持ち上げ、カレブはもう一度言った。

『待て、マーシャ。もう一度、ゆっくりとしゃべれ』

彼女が手を引き抜こうとしたのに抵抗し、カレブは涙の溢れる彼女の目を覗き込んだ。

『泣くな。俺は、おまえが悲しんで泣くのは見たくない』

マーシャの前でカレブが人差し指をあげ、話せと命令した。もう一度しゃべれと言いたいらしい。

彼女は彼の真剣な眼差しを見つめ返した。

「もう一度？」

カレブが辛抱強く、彼女に頷いた。

『そうだ。少しずつ、話せ』

### 第30話

マーシャのした話をカレブがどれ程理解したのか、本当のところはわからない。

カレブは彼女から一瞬でも瞳をそらすことはなくて、彼女の一語一句を真剣に聞き入っていた。彼女の説明を一通り聞いた後、彼は一緒にいたいのは同じ気持ちだと彼女に何度も言った。彼女とのやっかいなコミュニケーションを面倒がらずに時間をかけてしたことからも、彼女はその言葉を信じていいように思った。マーシャが唇をふるわせて彼を見つめると、彼は穏やかに頷いた。

『本当だ。だから、そんなことで俺を疑うな。いいな?』

彼が大きな口元をゆるませると、マーシャもゆつくりと微笑み返した。

「わかった」

だが、彼女を見つめていた彼が暗い顔となり、他に大きな問題がある、と彼女にぼつりと告げた。彼女が説明を求めても、彼は哀しそうな目で彼女を見返すだけで内容を言おうとはしなかった。

『……後できちんと説明する』

彼は小声でそう口にして、マーシャの額に唇をつけた。

二人の争いの名残でもある、壊れた扉が風に揺らぐのを目にし、カレブはじつと考え込んでいた。何事もなかったかのように扉を修理するのは難しいことではない。ただし、今は少し状況が変わってしまった、というより、カレブ自身が変わってしまった。大部屋の少女たちが誰もいなくなってしまったことがまもなく発覚し、周囲を探しまわる者が小屋の別の部屋にいるマーシャを発見してしまう。彼女たちの食事が供給される夕方までに、何とかして手を打たねばならない。そして、それはあまり遠いことではない。彼は、マーシャの身柄を移動する必要に迫られていた。

『来い』

カレブがマーシヤを外に誘い出した。二人が地面に降り立つと、彼は自分が着ていたチュニツクを脱ぎ、彼女の頭に被せて言った。

『それを着て、おまえの服を脱げ。その靴もだ』

『ナゼ？』

『おまえを家に連れて行く。本当は夜間に移動したかったんだがな。ここにはもう、居られない。さあ、それを早く着ろ。おまえが今来ている服は奇妙で目立つからな』

言われたとおりに彼女がチュニツクに袖を通すと、肩部分が大きくて首まわりが広く開き、裾は彼女の膝近くまできた。彼女は靴を脱いでズボンから足を抜き、彼からベルトの紐を受け取って服を留める。

『……ふーん？ 悪くないな』

一族の衣装にまとわれた彼女をじろじろと眺めまわし、カレブが目を見開いた。服に覆われていない顔や手足は村の一般的な女たちのように骨が見えるほどに痩せてはいないが、髪が彼らと同系色なので後ろから見れば村の民と言ってもごまかせるだろう。

マーシヤは初めての民族服に腕を通した自分の体をあちこちから見ていた。

『この人に見える？』

上半身裸となつて腕組みをしているカレブは笑ってみせたが、彼女の手足の白さは目についた。それに、一族にはありえないマーシヤの瞳の色。

『おまえの体を汚すのは嫌だが』

『カレブ？』

カレブは地面に手をつくすと、両手で地面をさすって砂をつけ、彼女をつま先や足にそれをつけた。

『何するの？』

カレブは唇の端をあげてにやりとし、砂をつけて汚した彼女のつ

まさに自分の腕を並べた。

『どうだ、俺の肌と変わらないだろう？』

「ああ、色を黒くするのね！ 私もやるわ！」

彼女は腰をおろし、地面で手を汚すと自分の腕に砂をすべらせて肌の色を変えた。二人は小さな子どもが土で遊ぶかのようにはしゃぎ、マーシヤは顔まであつという間に顔まで黒くなった。

『家に着いたら汚れを洗い落としてやるから、少しの我慢だ。いいな、マーシヤ？』

二人が並んで歩いて東に向かって行くと、遠くにある人家群と比べて二倍以上の大きさがある、三角屋根を持った横長の建物が見えてきた。屋根は赤茶色の板状でその下には藁のような植物が葺かれており、壁は黄土色の石を積んで造られていて、左の方にある扉から右方向へ三つの四角い窓が並んでいた。そこに来るまでに人間はおろか動物にも遭わなかった二人だが、その建物の前には長い棒状の武器を片手に抱えた男が堂々と立っていた。カレブににわかに緊張感が走るのを、マーシヤも気づいた。

『俺を信じる。おまえはただ目を閉じて、何があってもしゃべらないでいればいい』

彼は彼女の脛に手をやって閉じさせ、はつきりとした発音で、しやべるな、と彼女に念を押した。マーシヤは目を閉じたまままで続けざまに首を振った。

護り番が、族長と隣にいる人物が近づいてくるのに気がついた。

カレブは、男が目の上に手をかざして不審そうにマーシヤの正体を特定しようとしているのを見た。あと100歩も行けば男のいる場所に着く。彼はマーシヤの体に腕を伸ばすと、おもむろに彼女を担ぎあげ、彼女の頭が後ろになるように自分の右肩の上にその体を折り曲げて置いた。約束したとおり、彼女はうめき声さえも発しなかった。

彼女の体に護り番の視線が注がれているのをはつきりと知りながら、カレブは無言で家の裏口に近づき、焦った者がその焦りゆえに普段なら自分から声をかけないのに話しかけて余計に疑われるような失態はしなかった。妻の妊娠期間中での夫の浮気は大目に見られ、彼が妻の目がないのをいいことに女を用立てた過去は護り番も承知だ。心臓は早鐘を打ち、マーシャを抱える腕は熱くなっていたが、彼は完全なしらを切り通すつもりでいた。

### 第31話

『お帰りなさいませ』

カレブは普段、返事などしない。彼の左に通り過ぎる護り番の視線が自分を通り越してマーシャに素早く動くのを逆手にとり、彼は男に意味ありげにニヤツと笑ってやった。そうすると男は気まずそうに視線をさまよわせ、主人は難なくその場をやり過ごした。

裏口から続く通路のつきあたりの召使部屋にいた女が主人に気づいて顔をあげ、彼が運んできた荷物にも気がついた。

『お帰りなさいませ、カレブ様』

ここでも彼は無表情を決め込んだ。彼女のいる部屋の正面に平然と近づき、通路のつきあたりを右に曲がる。そこから通路は一直線に伸びていて、面会部屋、居室、控え室と呼ぶ支度部屋、寝室が右手に並ぶ。召使女は心得たもので、素早く驚きを隠し、主人と新しい訪問人に出す飲み物を取りに家事部屋へ走った。

その間に、彼は居室へ行こうとしたのを思いなおして、隣にある控え室の床にマーシャを降ろした。誰もいない部屋に入れた彼女はほっとしていたが、まだ安心できないカレブは、彼女にもうしばらく無言でいるように言い含めた。

『カレブ様、飲み物をお持ちしました！』

居室の入口でさっきの女が声をはりあげる。カレブは控え室を出て、居室の入口から入ってこようとする女の元へ歩いていった。

『それはこの部屋に置いておけ。それから、控え室にたっぷりの湯を準備しろ。用意ができたなら、俺に言え』

召使は返事をし、二人分のコップがのった盆を居室にある長いすの脇にある台に置いた。彼女はすぐに退室すると主人の様子を気にしていた他の召使を家事部屋から一人連れ出し、湯を沸かすために一緒に庭へ出て行った。

控え室に戻ってきたカレブを、彼を待ちかねていたマーシャが声を出さずに呼んだ。彼は彼女の前に立ち、真顔をくずさずに応えた。  
『今、おまえの汚れを洗い落とす湯を用意させている。準備ができるまで今しばらく待て』

「何？」

『おまえの体を洗うんだ。この土を落とす』

手に塗られた土をカレブに払われた彼女が、楽しそうに顔をしかめた。

この女はなんと無邪気なのか。

カレブは、彼女が笑うのを見て頬をつい緩めた。

二人は居室に移り、彼女が興味深そうに部屋をぐるりと見回した。控え室の倍ほどもある正方形の部屋で、通路とは反対面に小さな窓が二つ並ぶ。控え室と居室を繋ぐ出入口の向かいの壁面にある棚の上で、薄い油紙製の照明カバーの中で火がぼんやりと透けて見えていた。床に敷き詰められた絨毯、布張りの椅子、脇のテーブル、装飾用の面と武具、天井一面に張られたタペストリー。大胆な柄のどれもが鮮やかな多色使いで、それだけカラフルで派手なお互いの存在を邪魔せず、うまくバランスをとっている。

『気に入ったか？』

彼女が感心した表情で調度品の数々に目を移すのを見るのは、カレブもまんざらではない。彼は召使が置いていった飲み物のコップに彼女の注意を促し、椅子に座るように勧めた。

コップからはレモンの匂いがし、マーシャはその水分を一口だけ口に含んだ。爽やかなレモンソーダのような味だ。いつかの食事に添えてあった発酵ビールのような飲料は飲めないが、その他は今のところ、口に合う。彼女は安心して、そのレモンソーダをごくごく飲んだ。

カレブはマーシャの座った長いすと直角に台を挟んだ、一人掛け

の椅子に腰掛けた。この部屋にカレブの風貌はよく似合い、悠々と見える。周りの人家より大きな家、立派な装飾品、使用人。カレブは裕福なのだとわかった。

「いい家ね。カレブ、あなたはお金持ちなのね？」

言ってから、彼女はカレブが聞いていなかったのを知って、言い直した。

「アナタ、エライ？」

「ん？」

彼女が手で部屋の調度品を示して言うので、カレブは肩をすくめた。

「ああ、そうだな。俺はこの族長だ。族長っていうのはな……」

彼はふと思いつき、椅子と背面の壁の隙間に立てかけてあった小さな石板を取り出した。長老やネデルたちと相談事をする際に使う道具だ。脇台の下に置かれた皿の中からチョークを一つ、つまみあげる。

「いいか？ これは人だ。そう、たくさんの人」

彼は石板の下の方に人を表す図をいくつも書き、マーシャに見せる。

「この上に長老。いや、ネデルの方がわかるな。これがネデル」

多くの人間の図を丸く囲み、線で引く張った先にネデルの図を足す。長い三つ編みの髪も忘れない。マーシャから笑いがもれた。

「ネデルが多くの人を面倒みているってこと？」

「俺はこのネデルの上だ」

ネデルから上に線を引く張り、彼は人の図を素早く描いて、自分の名を言った。

「一番、上」

統治者か何かだ。

彼女はあっけにとられ、目の前の男をあらためて見返した。

「本当に？」

『本当だ』

『アナタ、イチバン？』

『そうだ』

わざと疑わしい表情をするマーシャに彼は苦笑する。この道具は彼女と頻繁に使うことになるな、とカレブは石板を見て漠然と考えていた。

俺がこんな面倒くさい事を嫌がらずにやるなんて、我ながら不思議だ。

……時期をみて早いうちに、なるべく脅かさないように例の儀式の話も伝えなくては。

### 第32話

召使が湯の準備ができたことを主人に知らせ、カレブは席を立った。

控え室の中央に置かれた楕円形の桶には、少し熱めのお湯が七分目まではってあった。その横の椅子の上には、擦ると泡立つ薬草の束と毛足の長い布が準備されていた。桶の脇で二人の召使が手伝いのために待機している。いつもであれば、カレブが桶にはられたお湯に足を入れれば彼女たちが勝手に体を洗ってくれる。

カレブは桶の横を通り過ぎ、壁際につけられた椅子に腰掛けた。

『この手伝いは必要ない。おまえたちは下がっていい』

主人の言葉に二人は面食らい、お互いに探り合ってひそかに視線を交わした。ほどなく、年長の召使の方が顔を上げずに主人に言った。

『カレブ様、お手は必要にございましょう。どうか、遠慮なさらずに私たちに何なりとお申し付けください』

『かまわん。手は足りる、助けはいらん』

二人が困惑して顔を見合わせている。カレブは椅子の上で足を組んだ。

『だが、おまえたちには俺が連れてきた者のことを言っておかねばなるまい』

彼女たちは顔をあげず、カレブの方に視線だけを向けた。

『あやつはしばらくこの家に置く。無論、奥方が家に戻る前には去ることになるが、おまえたちにもその心積もりでいてもらいたい。あやつが余計な面倒をかけることはないが、お互いのために顔を合わせようと考えるな。俺が留守にする際は寝室に置くが、俺が在宅の際は居室にも出る。おまえたちが用事で入室したい場合は必ず俺に声をかける。来客があった場合も同じだ』

『はい、カレブ様』

『言つまでもないが……この件は門外不要だ。家の者以外に知らせる必要はない。ネデルにも、だ。言いつけを守らなかつた場合は、おまえたちを石の谷まで引きずって行って蹴り落としてやるからな。わかつたか?』

『は、はいっ!』

哀れな召使たちはかすれた声で返答し、ひれ伏した。彼はその様子を見つくりと見ると、椅子から立ち上がった。

『わかつたら、もうさがね。家の他の者どもにもそう伝えておくのだな』

彼女たちはあわてて逃げ出して行った。

通路から南側にある家事部屋に抜ける扉が閉まるのを見たカレブは、居室と繋がる控え室の出入口から顔だけ出し、マーシャを呼んだ。

『お湯の準備ができたぞ、来い』

彼が笑つと、彼女が飛び跳ねながら居室から走ってきた。

族長の地位を得て以来、自分の体さえ自らの手でまともに洗つたことがないカレブだったが、お湯を見て目を輝かせるマーシャを見て、彼の手が自然に薬草に伸びた。彼女にせがまれて髪を泡立ててやると、彼女が喜んで小さな笑い声をあげた。煩わしいとはちつとも思わなかつた。

結局、彼はマーシャの手足についた土を流しただけでなく、体全体をきれいにお湯で洗いあげてやった。

日が暮れてまもなく、牢小屋の守り番の訪問を受けたカレブは、彼から“生娘の間”の少女たちが全員いなくなっていると報告を受けた。扉の壊された形跡があり、何者かが故意に逃がした可能性がある、と男は続け、度重なる不運に怯え、うるたえていた。カレブはできるだけ不審そうな表情を作り、いなくなつた少女たちを探すようにとだけ男に告げた。

その日の夜、カレブの隣に眠るマーシャは彼の服をまとい、体からは彼と同じ薬草の匂いがした。彼女が自分の居宅にいるのがとても信じられなくて、カレブは何度か彼女を揺り起こすはめになってしまった。最初の二度こそ、マーシャも眠い目をこすって起き上がり、彼に笑い返してくれた。カレブはほっとし、身体中が幸福感で包まれた。

しかし、三度目に彼に起こされた時は、彼女はさすがに眠気に耐えられず、彼の顔をパチンと平手でたたいて寢床に戻っていった。叩かれたことに彼は呆然とした。尚も彼女を起こそうとあれこれ試したのだが彼女が起きてくれることはなく、彼はムカムカとして彼女の開かない瞼を見た。不本意ながら、屈するしかなかった。くっそう、この女。

彼が不満でうなっている、背後で熟睡している彼女が無意識に彼の腰に手をまわしてきた。自分の腹にぶらさがった彼女の手を握るが、力が抜けていて握り返されることはない。

だが、まあ……これも悪くない。

自分の背中に摺り寄せられる彼女の頬の感触に、彼は彼女をゆるすことにした。

### 第33話

少女たちの獲得を義弟の班に頼み、ネデルは先に村へ一人で戻った。自宅での休憩もそこそこに“生娘の間”の現場に行つてから、族長の家へと直行した。

「カレブ様はおいでか？」

庭で食料の野菜をこん棒でたたいていた召使の女が手を休めた。

「まあ、ネデル様？ お早いお帰りでございました」

のんびりと腰を上げ、のん気に笑う女に彼はいらついた。

「私だけ先に戻つたのだ。カレブ様は？」

彼はせっかちに吐き捨てるように女に言い、別の召使女がアロエの盛られた深い皿を手に、家事部屋へと入つていくのにちらりと視線をやつた。

「いらつしゃいますよ。私はさつき居室でお見かけしましたが、ですが、もしかしたら……」

「いい。わかつた」

彼女が話を続けようとするのを遮り、ネデルは玄関へと向かう。女はネデルの後ろ姿を見やり、仲間の召使が入つていった家事部屋の扉にきびしい視線を走らせた。

ネデルが居室の入口に立つと、長いすに座るカレブのサンダルを履いた足が見えた。

「カレブ様、ネデルです」

ぶらぶらと揺れていたカレブの脚が止まる。

「入れ」

ネデルが入口をくぐると、長いすに座っていた主人が彼を見上げた。煎り豆をつまみに発酵ビールを飲んでいたらしく、顔が少し赤くなつていた。彼の表情に焦りや緊張がないかと素早く探つたが、ネデルには普段どおりに見えた。

『思ったより早かったな』

『もう少し遅い方がよろしかったので？』

ネデルの棘を含んだ言い方に、カレブは片方の眉をあげる。

『そうは言っていない。村から生娘の件で知らせが行ったはずだ、おまえたたちが代わりの娘たちを捕獲するのに、もう少し時間がかかると思っていただけだ』

『そうですか。いえ、まだ必要な人数は揃っておりません。娘たちの捕獲は他の者たちに任せ、私だけ先に帰ってまいったのです』

心なしか表情が硬いネデルをカレブが不思議そうに見つめた。

『おまえだけ急用でもできたか？』

『……はい』

それまで立っていたネデルが長いすの反対側の椅子に腰をおろした。空気が微妙な緊張感を帯びてくるのに気づき、カレブは脇のテーブルからコップを取って、酒を少し舐めた。

『ネデル、俺に用事があるのか？』

『ええ。カレブ様？ 私は先ほど“生娘の間”を見てきました』

『へえ。それで？』

『全ての部屋の鍵が壊れておりました』

報告に来た牢小屋の者がそう勘違いしていたので、カレブは次の日に鍵を全て壊しておいた。

『そうらしいな、報告に来た者が言っていた』

ネデルは、まったく態度の変わらない主人を煮え切らない思いで見つめ、どう切り出そうかと迷っていた。言い方を間違えると煙に巻かれてしまう。少女たちを脱出させたとは信じがたいが、あの小屋に近づこうという者は主人カレブしか思い浮かばない。

『それで、俺に何の用事だ？』

『……それはですね』

主人の機嫌が悪くなったことを見てとり、ネデルはあわてて言った。

「カレブ様、その、あの小屋には異人の女もおりました。鍵を壊した犯人はさぞ、怖い思いをしたことでしょうね？」

カレブが鼻の頭に皺をよせて、対面の彼をうさんくさそうに見返す。

「それとも、異人の女を怖いとは思わなかったか……」

「ネデル、何が言いたい？」

「当日、カレブ様はあの小屋に近づきませんでしたか？」

カレブの荒げた声に負けずにネデルがそう尋ねると、主人は啞然として彼を穴が開くほど見つめた。そして、失笑した。

「おまえ、俺が娘たちを逃がしたと思っっているのか？ そんな事をしてどうする？ ばかか、おまえ！」

それから彼は声を大きくして笑った。

「それを俺に訊くために戻ってきたのか！」

「カレブ様、本当に何も？」

「何も、って何を？ 俺が娘を欲しければ、わざわざそんな手荒なマネをしなくても、自分の鍵を使って気に入った娘を部屋から出せる。忘れたか、ネデル？ 大部屋の鍵は俺がまだ持っているのだぞ！」

「ええ、ええ！ ですが、大部屋だけでなく異人の部屋の鍵まで壊し、中の女もいなくなっております……」

「まったく、荒っぽい手口だな。その女も今はどこへ行ったのやら。だが、異形の者がいない方が、何かと問題がなくていいじゃないか？」

「はあ、まあ……それはそうですか？」

「村に男手が少なくなつて守りが薄く、娘たちの一族の誰かが侵入した可能性もある、とも牢小屋の者は言っていたが、それは聞いたか？」

「え？ いえ……」

カレブが再び、あきれたように笑った。

「ネデル、あそこに何かある度に俺を疑うのはやめろ。俺にだって多少の分別はある。おまえにいちいち問いただされるのは、俺だつ

ていい迷惑だ！』

『はあ、その、そうですね………申し訳ございません』

最初にいきりたっていた迫力もどこへやら、ネデルは意気消沈して椅子の上で身を縮めた。

そのあと、カレブに追い払われる形で長老の元へ送られたネデルは、不安と愚痴を長々と垂れ流す長老たちにつきあうはめになった。ネデルが留守にしていた数日間、カレブがこの苦痛の犠牲になっていたようだ。

主人カレブは早々にうまく切り上げて長時間を彼らと共に過ごしていなかったはずだったが、ネデルが何かと理由をつけて長老たちから離れようとする度、彼らは機嫌を悪くし、族長はすっかり聞いてくれたと散々に嘆かれた。さらに、捕虜を追う仲間を見捨てて自分だけ先に切り上げてきたと責められ、彼はますます何も言えなくなった。

まったく、踏んだり蹴ったりな日だった。

### 第34話

ここ数日間、子どもたちが外で元気に遊ぶ声がしない。不吉な出来事を怖れ、母親たちが子どもを自分の目の届く範囲内にいさせることを好んで遠くにやらないからだ。当然、カレブの投げ槍指導も止まっていた。男手が必要とされる場でネデルは次々に用事を頼まれて忙しく、ここ二日間ほど族長宅に寄れなかった。族長宅にはその旨を伝言しておいたが、それがなくても彼の事情は通じている。

ネデルの訪問がない族長宅での二日間、主人がいつになく機嫌よく楽しそうに家の中で過ごしている雰囲気、召使女たちは家事部屋や召使部屋から感じていた。彼女たちからは姿の见えない謎の女と一緒に主人は、居室でくぐもるような声でくすくすと笑い、彼の豪快な笑い声しか知らない召使たちはその変貌ぶりに驚いた。たまに用があつて通路に出てくる主人は生き生きとした瞳を輝かせ、少年のように無邪気な笑顔を見せて、召使たちのご用伺いにも今までにない優しい態度で対応した。夜には通路まで転がってしのび笑いをもらし、息に似た甘く響く声がして、家中に主人の幸福感が漂った。

女たちは、族長が恋をしている、と密かに囁きあつた。

マーシャが来て六日目の朝、居室に用意された朝食を寝室に運び、二人は食事をとっていた。彼女はカレブの日常にすっかり溶け込んでいた。自由に外出させてやれないのはかわいそうだったが、一族の人々が彼女の姿に怖れを抱くと彼女自身が把握していることもあつて、カレブが見た限り、今のところは、彼女は屋内だけでも快適に過ごしていた。

『これ、何？』

マーシャが赤い小さな実をカレブの鼻先にぶらさげた。カレブは口の中いっぱいに入れていた穀物の煮物を噛み砕き、やっとのこと

で飲み込んでから答えた。

『それは、マカ、だ』

『マカ？』

『“クダモノ”だ。それを食べると体が強くなって、元気になる』

果物、とマーシャの言葉に置き換えて言い、カレブは腕の力こぶを彼女に見せてニヤツと笑った。彼女は理解したらしく、マカ、とつぶやき、それを口の中に放り込んでそつと噛んだ。

『すっぱい！』

彼女が予想外の味に驚いてそれを手の上に出すと、カレブが吹き出した。

『まずかったか？ 体にいいのに』

カレブが笑いながら残りのマカの山から一つつまみあげ、彼女を見ると、彼女は大げさに息をついた。

『すっぱい。知らなかった』

『オーケー』

彼はマカを口に放り入れて、美味しそうに種も丸ごと食べてしまった。

『おいしい？』

『うまい』

カレブは傍から見てもうまそうにマカを食べた。  
いい表情だ。

彼女はマカの山に手を伸ばし、一つをつまみあげた。もう一度試すのだとカレブが思っていると、彼女はつまんだマカをカレブの口の前に出した。

『あーん』

『アーン？』

意味がわからず彼がきょとんとしていると、彼女は開けた自分の口を指差して、彼に口を開けるようにと示していた。

『開けて』

『……なぜだ？ 俺は子どもじゃないぞ、一人で食える』

『早く、開けて』

『嫌だ』

『あける、簡単』

言葉がつかないせいもあるが、彼女から指図されたのが気に入らず、彼はむっとして彼女の手を無視して自分の手からマカを食べた。  
……かわいくない。

目の前で自分を無視されたマーシャは面白くなかったが、それをしつこく続けるのはやめにした。代わりに、自分の座っている場所から足を引きずるようにして移動し、彼の向かいから少し離れた隣、顔の見えない場に席をとった。それを見たカレブは、ますますむっとなった。

二人はその後しばらくは無言で各自の食事をとった。カレブはそれでも彼女をちらちらと盗み見たのだが、彼女は彼にまるつきり関心がないように彼を無視していた。彼は腹が立った。

好物のレモンの甘煮を残しておいてやったのに！

彼女の嫌いらしいマカが半分ほど皿に残っているのを見るにつけ、彼は胃がムカムカした。

マーシャが黙って食事を進めていると、視界の左に何かが動いた。顔の前に突如現れたレモンに注意をとられて彼女を見ると、カレブが不機嫌な顔で自分を見ているのに気づいた。

『何、これ？』

『アーン？』

マーシャが彼を見ると、彼はレモンをつまんで持った手を彼女の口元にもっと近づけた。彼女がこの食べ物で気に入っている、レモンの甘煮だ。彼女は早々に自分の分は食べてしまっていた。

『カレブ？』

『口を開け』

彼の言い方は冷たかったが、マーシャと目が合うと彼は顔を赤く

した。彼女は表情をゆるめ、カレブに笑いかけた。彼はうるたえたように目を閉じ、言いにくそうに言った。

「……………アーン」

レモンの果肉が手から引き抜かれ、カレブの指先は自由になった。マーシヤは口を動かしながら満足そうに笑い、カレブに嬉しそうに笑いかけた。彼はほっとした。

レモンを食べ終えたマーシヤは手で体を支えてずらし、カレブの隣に近寄った。

「今度はやつてくれる？」

『何だつて？』

マーシヤは自分の皿からマカをつまみ取ると、カレブの顔の前で振って見せた。

『ああ……………。おまえの手から食べって？』

「あーん」

彼女がくすぐったそうに笑った。

半ば投げやりになって、カレブは差し出されたマカを彼女の指ごと口に入れた。マカの酸味にレモンが混じった味がする。

子どもか病人扱いのようでひどく抵抗があったのに、やってみると大事にされている感があった。彼女はカレブのためにマカを残しておいたのだ。

彼女といると、何もかもが楽しい。

カレブが感動してマーシヤに笑顔を向けると、彼女はくぐもるような声で笑った。

カレブは、幸せだった。

### 第35話

その日の夕方になって、義弟たちを含む二つの狩り班が戦利品を手に戻ってきた。まだ戻ってこない残りの班が、生娘も含めて三、四人を連れてくれば必要人数に足りる。一般の捕虜たちの入る牢小屋には見張りの人数が増やされ、少女たちは頑丈な扉に交換された“生娘の間”に隔離された。一連の事件で動揺しているヨーダの弟子たちにはネデルから経過を報告しに行き、残りの狩り班が戻れば準備が完了する見通しを伝えた。状況を知った長老一同も安心していた。

ネデルが多忙だった過去二日間、ヨーダは一度ずつ弟子たちに顔を見せたようだが、儀式の予定日についてはわからない、との一点張りだったようだ。良からぬ出来事が続いているせいかもしれないと弟子の一人が怖がってもらっていた。

水神の気を静めるために特別な何かを贈呈することも思案している、と、第一弟子からヨーダの考えを伝えられた時、ネデルは即座にマーシャの事を思い浮かべた。大部屋の娘たちと共に逃げてしまった、異形の女。

あの女がいれば何の問題もないのに。あの、変わった瞳を持つ女。娘たちを逃がしてしまった何者かを憎らしく思いながら、ネデルは弟子たちの話を聞いた。そうこうしているうちに日が暮れたので、ネデルは族長への相談を明日に持ち越すことにし、自宅に帰った。

日課の訪問時間より早かったが、ネデルは“妊婦の家”に行く前に族長宅に寄って、昨夜聞いたヨーダの考えを伝えておくことにした。彼の家が近づいてくると、召使女たちは家事部屋の中で作業をしているらしく、族長の家の庭には見かけなかった。朝と夜だけ玄関の前にいる護り番の姿だけがかった。

『おはようございます、ネデル様！』

彼が玄関に近づいていくと、護り番の男が大声を響かせて挨拶をした。ネデルは思わず体をブルツと震わせてしまい、いつにない威勢の良さにちよつと面食らった。

『あつ、ああ？』

ネデルは立ち止まって姿勢を直し、またすぐに歩き出した。

『ネデル様、今日はいつもよりお早いですね！何かよくない事でも？』

護り番の声はあいかわらず大きく、ネデルは顔をしかめた。昨夜はいろいろと考えていて、実は、彼は寝不足だったのだ。男の声は彼の頭に不快にこだましている。

『……カレブ様は？ご在宅か？』

『族長ですか！ええ、いらっしやいますよ、どうぞお入りください！』

この男、耳でも遠くなつたのか？朝からうつとうしい……

ネデルは男に見せつけるように自分の耳をふさぎ、不可解な顔をして玄関を通り過ぎた。

居室にはひと気がなく、ネデルはひよいと入口から顔を入れてみた。すると、通路の奥から、眠そうに顔を手でこすりながら歩いてくるカレブがいた。ネデルは主人に挨拶をし、居室に足を踏み入れた。

『……今日は早いな、おまえ』

まだ眠り足りないともいうように、カレブは大あくびをした。

ネデルが失礼を詫びて、二人は席につく。

『お疲れのご様子ですね？』

『よく眠れなかっただけだ』

『何か心配事でもあるのですか？』

『そりゃあ、族長としてはいろいろな』

カレブは頬をパンパンと両手でたたいて、目を覚まそうとしてい

た。それから家事部屋の召使にレモン飲料を持ってくるように怒鳴り、それが出てくるまでの間、ネデルは座って無言で待っていた。飲み物が運ばれてくると、カレブはそれを一気にゴクゴクと喉を鳴らして飲み干した。

『ああ！』

カレブが息を吐き、長いすの背にもたれて足を投げ出した。

『おまえが朝早く来るということは……』

『はい？』

『よくない知らせか、儀式の日程が決まったか、どちらかだな』

ネデルは主人の疲れた顔を見つめる。自分も同じように疲れた表情をしているとは思うが。

『さあ、どうでしょうか。日程はまだ決まっていません。私は、ヨーダ様のご意向を聞き、カレブ様と長老に相談していただく必要があると伝えに来たのです』

ヨーダの名前を耳にしたカレブの目がすつと冷めた。ネデルは、主人の彼女に対する非礼や横暴な態度がみえても一切を無視することに決めた。

『あの女、次はどんな我がままをきいてくれと？』

『ヨーダ様がおっしゃるには、一連の不吉な出来事のため、水神様が不安定になられているとのことです。新たに特別な贈り物をし、水神様に静まっていたく必要があるそうにございます。贈り物の指定は特にございません。ですから、それを族長と長老方とでご相談いただきたいと思ひまして』

『あの女、何をまた……ばかばかしい！ 捕虜たちは単に自分を哀れんで死に、娘たちは誰かが逃がしたただけだ。どちらもあり得そうな出来事だろうが。そんな事で神が不安定になどなるものか！』

『ですがカレブ様、村の民はそう考えません。悪い事が起きる前兆だと怖れています。不吉な事がふりかかる前に水神様に貢物をし、気を治めていただきたいと考えるのは当然なことですよ！』

『民が迷信深いのは俺もよく知っている。だが、これ以上何が必要だって？ 毎回、俺たちはやっとのことで贈り物をかき集めているじゃないか！』

『それは……それを長老方と相談せねばなりません』

カレブは不機嫌な様子を隠しもせず、ヨーダの名を出して罵った。ネデルは聞こえない振りを決め込んだ。

『ともかく、長老方にもお知らせしてきますので、あちらの都合のよい時間に集まって相談をいたしましょう。時間についてはまた知らせに戻ってきます。よろしいですか、カレブ様？』

カレブは返事をしなかった。だが、ネデルは彼が反対できないのを知っている。ネデルはそのまま、すぐに居室から退去した。

玄関をくぐると、ネデルに気づいた護り番は彼をちらつと見て目礼しただけだった。彼に声さえかけない。さっきの愛想の良さが嘘のように、素っ気無い態度だ。どうにも釈然としなかったが気にかけるのはやめ、ネデルは大長老宅へと急いで歩いていった。

### 第36話

カレブが寢室に戻ると、寝転んでいたマーシャが目をぱちっと開けて彼を見上げた。

「ネデル、帰った？」

「帰った。だが、また戻ってくる」

カレブはマーシャの枕元にあぐらをかいて座り、彼女が自分の足の上に頭をのせようとするのを手伝った。真上にカレブを見上げたマーシャは、彼が顔をくもらせて何かを考えている様子なのに気づいた。

「問題？」

「え？ ああ……まあな」

彼があまり話したくなさそうだったので、彼女は深くつつこむのはあきらめて口を閉じた。カレブの腿と触れている頬が温かい。そつと目をつぶっていると、家事部屋から流れてくる料理の香りが彼女の鼻をくすぐり、間近にあるカレブの腹が大きな音をたてた。

「お腹がなった」

「何だつて？」

「お腹がなったでしょ？」マーシャが手をあげて彼のお腹を指差すと、彼は、ああ、と頷いた。

「それ、おまえの言葉で何て言うんだつて？」

「お腹が、なる」

「へえ？ 本当にお腹の音に似た発音だな。オナカ……？」

「オナカガ、ナル」

彼はその言葉の響きが気に入ったらしく、何度も繰り返して覚えようとしていた。

「カレブ様、朝食ができましたよ！」

毎朝耳にして覚えた言葉だ。それが何を意味するかわかり、マーシャは彼の足元から勢いをつけて起き上がった。ネデルがいつ戻っ

てくるかわからない今朝は、居室で食べるよりも寝室へ運んだ方がよさそうだ。カレブが先にたち、召使が居室に置いていった二人分の食事を取りに行く。彼が持てるだけの皿を持つと、残りの皿をマーシャが面倒をみた。

「ねえ？」

『ああ？』ジャガイモとコーンの蒸し煮を二等分していたカレブが手を休めずに目をあげた。

『カレブ、前、言った、大変な問題、何？』

マーシャの言葉はぶつ切りだったが、意味は通じた。カレブは驚愕し、思わず手を止めた。

『説明、できる？』

『マーシャ、それは……』あきらかに狼狽した彼が何だかわいそうだったが、彼女は訊くのを止めなかった。

『私は知りたい。怒らない、言つて？』

カレブの手から食物の皿をおろさせ、マーシャは彼の顔をのぞきこんで彼の返答を待つ。彼は不安と恐怖が入り乱れた瞳を彼女に向けつづけ、しばらくの間、無言だった。沈黙は重かったが、マーシャは何か言いたくなるのも我慢してじつと彼の出方を待った。

彼が留めていた息をそつと吐き出し、自分に向かってやるように何度か小さく頷いた。

『わかった。おまえは知らなきゃならない事だ、言わなけりゃな。……ちよつと待て』

彼が席を立ち、通路を出て隣の部屋の方へ歩いていった。すぐに戻ってきた彼の手には、石板・チョークと一緒になぜか人形が抱えられていた。

マーシャはいつものまにか顔をこわばらせていた。隣に腰をおろしたカレブは、彼女を安心させようとして無理に笑顔を作った。なんと哀しそうな笑顔なんだろう。彼が愛想笑いをするのを、マーシャ

は初めて目にしたように思う。

何から説明すればいいかと彼は少し迷っているらしかったが、すぐに、石板に複数の人間の図を描き出した。

『マーシヤ、俺たちには食料がたくさん必要だ。だから、食料を作って収穫する』

人間の横に野菜畑のような絵を描き、カレブは朝食の食材を指差して、彼女の瞳をのぞき込んだ。

『食べ物をつぱい、欲しい』

『食料、たくさん、作りたい？』

『そうだ』それから、カレブが人間と畑の頭上に無数の点線を描いていく。

「雨ね？」

『雨だ。作物を作るのに必要な水。わかるか？』

『アメ。アメが欲しい？』

カレブは微笑んで頷き、視線をちよつと宙でとまらせた後、続きを描き始めた。

マーシヤが見た限り、この土地はとても乾燥していて、土埃が常にたち、間近には川や湖などの水源がない。彼女が滞在している間に雨は一度もこの地に降っていない。水道施設などなく、飲料水用に井戸を設けてあるのかもしれないが、そうでなければ、村人たちはかなりの時間と手間をかけて遠くの水源にまで水汲みに行っているにちがいない。

『だから、俺たちは神に雨の恵みを祈る。おまえたちにも神がいるといったな？ 神に、雨を降らせるように頼む。』

『祈る？ みんな、祈る？ 神に、何を？』

『雨が欲しい。神に、頼む。わかるな？』

雨を降らせるように神様をお願いする、ってこと？

マーシヤは、ここが千年以上も過去の世界かもしれないと想像し、あらためて自分の行く末が恐ろしくなった。この人たちは雨が神様の恵みだと信じているらしい。自然現象を神がかりにするなんて、

非科学的で迷信深い。もしかしたら医者代わりにまじない師か何かかいて、人の病気やケガを治療するとも言い出すのではないだろうか。

カレブはほんのちょっとした顔色の变化も見過ごさないようにと、注意深く彼女を見つめていた。かすかな驚きが彼女をかすめていたが、彼女は比較的、落ち着いている。

### 第37話

『神に頼む時は、俺たちには贈り物をする習慣がある。 ああ、わからないか？ そうだな、ええと……祈るとき、神に何かをあげる』

神様に何かを捧げるのね。

カレブが名優さながらに祈る姿勢をし、手近な食物の皿をとって頭上に掲げ、感謝するのを、彼女は面白そうに眺めた。

『わかった。あなた、食べ物、あげる。神、嬉しい』

『そうだ。食べ物以外にもある。衣服、山羊。ただ、それは一族の考えで、俺は儀式にも貢物にも懐疑的だがな。この慣習を廃止したいと思っているが、まあ、なかなか……ままならない』

カレブはマーシャに微笑み、舌で自分の上唇をそつと舐めた。

『神には食べ物の他にも、色々な物をやる』

『他に？』

マーシャの視線は、支度部屋から持ってきた人形に伸ばされるカレブの手を追った。『人形、あげる？』

カレブは黙って首を左右に振り、人形を二人の前の床に仰向けに横たえた。マーシャが見ていると、彼は自分の手の中にナイフを握り、彼女が見つめているのを確認した上で、人形の心臓の位置にナイフの刃を突き立てた。

『カレブ、何？』

意味がわからずに彼女が視線を上げると、カレブはやや緊張した面持ちで言った。

『神に、人間をあげる』

ニンゲン???

瞬時に、様々な想像で彼女の頭の中がかき乱された。  
人間？

彼女を心配そうに見ていたカレブは、混乱していた彼女の思想が一つに絞られてきて、だんだんと気が動転していくのを見た。

「……人間!？」

「人間? 人間を神にあげる?」

さりげなくナイフを背後にやり、カレブは彼女の震える瞳を捕らえて頷いた。

生け贄だ……!!

大昔に世界の一部ではそんな蛮習があったと、中学校の頃に習ったかすかな記憶を思い出した。

でも、よりによって、ここが生け贄の習慣がある土地! カレブが逃がしたあの女の子たちはもしかして……。牢にいた人たちも?

私……??

自分の手にカレブの手が重なり、マーシャはびくつとしてそれを振り払った。彼はその反応にハツとし、彼女は恐怖のあまりに彼の前からあとずさった。声をたてることもできず、彼女は、信じられない思いで一族の男であるカレブを見つめた。

「俺はちがう!」

「私は嫌!」

「おまえをやると思っのか!? 俺だつて嫌だ!」

カレブが詰め寄ろうとしたが、彼女は逆方向に同じ間合いだけ遠ざかった。

「マーシャ、俺はおまえをここに連れてきたんだぞ! 贈り物にしなれば、おまえをあそこに置いたままだった!」

マーシャの息が速くなってきていた。彼の放った言葉は理解されていない。カレブはやりきれない怒りのこもった瞳を彼女に向けた。

「マーシャ、誤解するな!」

「来ないで!」

カレブは動くのをやめ、無念そうに暗い瞳で彼女を見た。

『頼む、わかつてくれ。俺はおまえを神にやる気はない。』  
『わかつてくれ!』

『向こうへ行つて!』

『マーシャ、俺はちがうんだ! 信じてくれ!』

『来ないでよ!』

『俺はおまえをどこにもやらない、本当だ! だが、ネデルは……  
……ネデルは、そうなんだ』

ネデルの名が出たことでマーシャは注意を引かれた。彼女が見返すと、カレブが必死な表情で見つめ返してきた。カレブがまた上唇を舐めている。焦ったときの癖かもしれない。

『……何て?』

彼女が口をきいたことでほっとし、カレブが弱々しく微笑んだ。

『ネデルは、おまえが、欲しい。おまえを、神に、捧げたいんだ』  
ネデルは私を神に捧げたい。

マーシャをこの村に連れてきたのはネデルで、牢に閉じ込めたのも彼だ。彼は、自分の仕えるカレブの命令さえなければ、彼女を牢から出したがってはいなかった。言葉はわからなくても、カレブや自分に対する態度でわかった。彼は、いつもいつも口惜しそうにマーシャを見ていた。マーシャは気が遠のくような感覚に陥った。

『マーシャ』

カレブが近寄り、手のひらで彼女の頬を包むようにして触った。

びくつと震えはしたが彼女は逃げず、涙のにじんだ瞳でカレブを見て、唇の端をきゅつとあげる仕草をした。

『ネデルは私が欲しい?』

『ああ。だから、大変な問題だ』

『……そう。それが、あなたの言っていた、タイヘンなモ  
ンダイ?』

カレブが小さく微笑んだ。

『おまえはネデルに見つからないようにしないとイケない。わかっ

てくれるな?』

カレブは心を悩ませながらも、自分のことを考えてくれている。

『……いつまで?』

彼女には、永久、と言われそうな予感があった。カレブが目を伏せ、マーシャの頬から手に自分の手を移した。心臓が急にドキドキしてきた。

『儀式が終わるまでだ。“祈り”の後』だが、彼は笑って、そう答えた。

肝心の儀式の日付はまだ確定していないそうだ。ただ、例年からいけば、遅くとも二週間後までには済むはずだ、とカレブは答えた。家の者からも顔を隠させているのは、何がきっかけでネデルに彼女の件が知られるかわからないからだ、とも彼は話した。

マーシャはカレブの話を信じた。マーシャの目から涙が落ちると、カレブが彼女の肩を抱えるようにして強く抱きしめた。カレブは今はまだ、儀式の後については何も考えないようにしようと考えていた。

### 第38話

カレブとネデルは、大長老宅の前の道を西にまっすぐ行った、村を南北に縦断する道との交差点でそっけなく別れた。カレブは半日以上の行動を共にしたネデルと一緒にいるのもうウンザリだと思っており、ネデルはネデルで、長老たちとの話し合いの場での主人の言動に辟易していて彼とできるだけ離れていたいと思っていた。相談の場は明日にも持ち越されており、どのみち、今日これからで用事が発生することもないだろう。

自宅へ帰っていくカレブは道沿いの家に住む人々に挨拶されている。主人に挨拶もせず別れてしまったのを後悔し、ネデルが道を西に行くカレブを見ると、彼は普段と全くかわらない態度で住民たちに返事をしていた。

ふん、まあいい。どうせ明日も会う。

大長老の家の玄関を出た後に、明日はここで直接落ち合おう、とカレブから言い渡されたのを思い出し、彼は自宅へと続く道に歩みを戻した。

自宅では、弟夫妻の子どもたち二人とネデルの娘と一緒にしゃいで遊んでいた。甥たちは女の子がかわいいのか、年少の彼女を大事にしてよく遊んでくれる。彼女も甥たちになついている。

結婚後三年間も子どもに恵まれず、周囲から妻との離縁を勧められていた矢先にできたこの娘に、ネデルは並々ならぬ愛情を注いでいた。娘が生まれてから七年間、ネデル夫婦に次の子どもが授かることはなかった。だからこそ、一人娘のことが余計に愛しいと思うのかもしれない。

娘の小さな手足やクルクルとよく動く小さな目を見れば見るほど、ネデルは大長老宅でのやり取りを思い出して、胸が怒りで掻きむしられた。

村の子どもを差し出せとは、カレブ様もよく言ったものだ！

走りまわっていた娘がつかまずいて転び、甥たちが助け起こす微笑ましい光景を見て、ネデルはさらにカレブへの反発心を煽られた。冗談じゃない、とネデルは心の中で毒づいた。

この地に利をもたらずのだから、この地の者であることが特別だと？ そんなこと、誰ができるものか！

ネデルは昨日、つい腹が立って口答えのような形で主人の提案にその場で反論してしまったが、カレブは、自分の子が儀式前に生まれたのなら喜んで捧げてやる、と言い放った。

なんとおぞましい考えた。

怒りで熱くなつた頭を手で押さえ、ネデルはブルブルと頭を振った。

実際に手元に子どもを持たないカレブ様には、親の気持ちなどわからないのだ。そんな事をすれば奥方が狂ってしまわれるのがわからないのか？

それなのに、長老たちは族長の忠誠心を称え、村の子どもを捧げるのも一案だと言う始末だ。四人の長老のうち、大長老を含めた二人が族長の案が最適だと考えており、残りは、気がすすまないが他に案がないなら族長に同意する心づもりのようだ。

村の誰かの子どもを出すようにと人々に告げる役目を負うのはネデルだ。俺に反対なら代案を考えろ、ともカレブは言った。その傲慢な口調を思い出し、ネデルは顔を覆った両手を震わせた。

数々の候補をことごとく否決したくせに、たった一日で他にどんな案を準備できるといふのだ！

次の日の昼近く、ネデルが約束の時間ぴつたり集会場所である大長老宅を訪ねると、族長カレブはひと足早くに既に到着していた。ネデルは彼に挨拶した。彼はネデルの赤い目に気づいたはずだが何も言わず、他の人たちに対するのと同じようにネデルに素っ気なく

接した。ネデルは、カレブのばかげた提案にねじ伏せられないようにと夜通しかけて代案を考えていた。

『皆さん、一日たって、何か良き候補は見つかりましたか？』

態度を保留している長老の一人が出席者を見渡して言った。カレブは腕組みをして黙っており、彼に賛成する二人は首を横に振って残りの者たちを見やる。すると、残った一人の長老がおずおずと皆に言った。

『あれからわしも考えたのだが、白土はどうかね？ あれは肥沃な肥料であって、栄養価が高い食物でもある、貴重な土だ。あれならばヨーダ様も文句は言わない。まあ、白土を掘るには非常に手間がかかるところだがね』

『たしかに貴重な物でいいですな。で、埋蔵場所はもうわかっているのかね？』

『いや……それは今から探さねばならんが』

『何ですと？ それでは話にならないか！ 白土を掘るより、見つける方が数倍も大変なのを、よくご存知であろう？』

『そ、そうでしたな……』

カレブは長老たちのやり取りを興味なさそうに聞いていた。彼はもともと儀式自体に関心がなく、身も入っていないのだ。

長老たちがあきらめ顔でぼそぼそと意味のない話をはじめようと、相談の場が族長の案で決まりそうな流れになっている。カレブは退屈そうに壁の飾りを見ているだけだ。ネデルはむっとして、元の話へと押し戻した。

『あの、長老方？ 私も考えてみたのですが……ラズリではいかがですか？』

カレブが振り返った。族長の注意も引いたことでネデルは満足そうに鼻をならした。

『ラズリを探すのは手間ですが、白土ほどではありません。埋蔵場所もわかっておりますし、往復一日半もあれば事足りましょう。そ

れに、あの宝石は鮮明な青い色をしています。水の色……  
ぴったりではございませんか？』

『おお！ よいではないか！』

『そうじゃ、水の青！ 貴重な神聖な石でもある』

『そうですな、それならば、村の民でなくてもよさそうですな。よ  
う思いついた！』

『よいのではないかな。……族長は、どう思われる？』大  
長老が言った。

全員の視線が、黙って事の成り行きを見守っていたカレブに集中  
する。

思いがけずに良案を挙げて長老たちの賛成をとりつけた自分に面  
白くない感情を抱いているかとネデルは思ったが、カレブは反感の  
こもった彼の視線を受けても何の感情も見せなかった。だが、ネデ  
ルは主人の口から何かしらの反論めいた反応を予期していた。

『名案だな。それにしよう』

カレブは満足そうに微笑んだ。ネデルに代案を思いつかせようと  
いう彼の思惑も知らず、彼の嬉しそうな表情を見て、ネデルはちよ  
つと拍子抜けした。

### 第39話

儀式に必要なだけのラズリを採掘してくるため、ネデルが指揮をとって三人の男たちが随行し、その日早々に出発して明夜までに戻る運びとなった。明日に儀式を執行しないのはわかっているが、明日になってその次の日に実施すると告げられる可能性もある。貢ぎ物を持って、儀式に間に合うように戻ってこなくてはならない。

長老たちと一行を見送るカレブから、ネデルはなんだか誇らしげに見つめられている気がしていた。

自分の部下の提案に喜んでいいのか？ ネデルは主人の好意を素直に受け取れなかった。

主人カレブはわざと意地悪をするような種類の男ではないが、裏でも考えていないかといえればそれは疑問だった。今までに何度も真面目な話をかわされて煙に巻かれ、そうかと思えば、率直に自分にわがままや感情をぶついたりする。彼が族長となつてから二年近くも行動を共にするのに、ネデルには未だに彼がつかみきれない。けれども、主人カレブはネデルの性格を正確に把握しているようだ。ネデルにはそれが何だか公平でない気がしている。

ネデル一行の姿が小さくなっていくのを眺めながら、偶然にも一日半の自由時間ができた実感を徐々にかみしめ、カレブの心は躍っていた。

家の者に別の場所で待機させておいて、マーシャを裏庭に出してやろう。あそこならば人の目がなく、玄関に來客があれば家の者に知らせてもらえばいい。外に出られると知れば、彼女はきつと喜ぶ。彼女の喜び様を想像し、彼の頬がゆるんでいた。

カレブが予想したとおり、ネデルが村を留守にしているので裏庭に出よう、と彼に提案されたマーシャは飛び上がった。喜んで。

『嬉しい！』彼女は叫び、カレブの首に抱きついた。

『おまえが嬉しいと俺も嬉しい』

カレブは自分にすがりつく彼女の体を大事そうに抱きしめた。

カレブが裏庭から護り番を追いやり、召使たちを家の周囲で見張りに立たせ、彼女は何日かぶりの外出を果たして、自然の中に身をおくことを満喫した。空気が若干湿って、涼しくなっている。

久しぶりに空を見上げた彼女は、今までよりも空が低くなっているのに敏感に気づいた。日差しが和らぎ、季節が変わろうとしている。秋が来るのだろうか。

次の日の午前中も二人は裏庭に出向き、秋の気はいが漂う空気を存分に吸い込んで幸福に浸った。カレブは昨日の午後から外出をせずに彼女の側におり、広い空の下でくつろぐマーシャを見ては嬉しそうに微笑んでいる。漂う空気の湿気が昨日より濃くなっていて、東風が吹いていた。空は薄い水色で、村の上には小ぶりの雲がいくつか東に動いていたが、遠くにそびえる山の周囲には縦型の重い雲がまとわりついていた。そこでは雷雨が発生しているかもしれないとマーシャは思った。風向きが変わらなければ、山の周りに発達しつつある厚い雨雲がこちらにも流れてきて、天気が悪くなる可能性がある。

『カレブ』

上機嫌で酒を口に運んでいたカレブがマーシャに振り向いた。

『どうした？』

『明日、雨、来る』

マーシャの言葉にカレブの目が点になった。

『風、同じなら、雨、来る』

『何だって？』

彼はコップを地面に置き、彼女の隣に急いで体を寄せた。

『あ、私の言うことがわからない？ えっと、じゃあね……』

「そうじゃない、おまえが言ったことはわかった！ そうじゃなくてな」

彼はヨードの予言を初めて聞いた時のように混乱していた。

“雨が降る”だって??

「いや、その……明日、雨が降るといっのがなぜわかるんだ？」

「……え？」

なんで彼女はこんな反応をする？

マーシヤは不審そうな顔をして彼を見返し、彼は自分が愚か者になりさがった思いをした。

だが、彼はその疑問を口にしてみて初めて、それがヨードのまやかしを暴く糸口になるかもしれない、と不意に感じた。

「マーシヤ、言え！ なぜ、おまえがそれを知っているんだ！」

興奮した彼は思わず彼女の腕をつかんで、詰め寄った。彼女がひるむのを見て、彼は自分がやり過ぎたことを反省し、手に込めた力をすつとゆるめた。

「カレブ？」

マーシヤは困惑してカレブに掴まれた腕を押さえていたのだが、はっとして彼を見返した。

そうか！ ここでは、雨は神の仕業と思われているんだ！

「マーシヤ、答えてくれ」

「カレブ、雲」マーシヤが彼に笑い掛けた。

彼女の指差す方角を見たカレブは、西の奥にある山にかかっている雲を見つけた。

「雲？ それが、どうした？」

「雨は雲から来る」

「何だって？」

「黒い、縦、雲、西から来る。風、運ぶ。雨、ここに来る」

縦に伸びた黒い雲が風に運ばれて西から流れてきて、ここに

雨を降らす。

彼女の言葉をそう解釈したカレブは驚いて二の句が次げなくなっ  
た。

## 第40話

彼だつて雨が降る際の様子は知っている。

空が暗くなるのは確かで、それを恐れる人々は神が降雨の準備をしていると教えられていた。彼はヨードの説明を丸ごと信じているわけではないが、かといってそれを真つ向から否定する根拠もなく、マーシャの言い分は突飛すぎて信じがたかった。だが、彼女が嘘をつく理由もない。

彼は動揺をなるべく抑えて、興奮で声がつわらないように注意して、彼女に確かめた。

『マーシャ、それは本当なのか？』

『本当。空気が濡れている』

そう言つて彼女は宙に手を伸ばしてみせ、笑つた。

空気が湿っている？

彼らの肌に触れる空気も、一昨日よりはずいぶんと変わっている。いつもの乾燥した空気に慣れたカレブには髪の中や首まわりがうっとうしく、子どもの頃に骨折した痕が鈍く痛む。毎年の儀式以降には時々雨が降り、その度に古傷がうずいたように覚えている。長老たちもこの時期には手足の節々に鈍い痛みを抱えることが多い。儀式日の前にも古傷がよく痛んでいたのを思い出した彼は、何だかすつきりとせず、心が暗雲に包まれていくのを感じた。

まさか、この湿った空気のせいなのか？

彼女が言う、雨の前兆になる湿った空気？

『マーシャ、俺は混乱している。雨は明日、本当に降るのか？ あ

の雲のせい？』

『風、同じなら、来る』

『本当に、本当か？ そんなばかな……』

『風、同じなら、雨、明日、来る。あの雲、雨の雲』

カレブは、山の周りにどんとどんと集まってきている灰色の雲を再び見やった。彼女が嘘をついているようには見えない。彼女は無邪気だが賢く、合理的な人間だ。

『もしかして、おまえは……おまえの故郷の者は皆、それをわかるのか？』

『故郷？ みんな、知っている』

彼女のあっけらかんとした口調がそれを真実だと伝えていた。

彼にはにはわかには信じられない内容ではあったが、他でもないマーシャの言葉だ、信じられるように思えた。彼女の理屈が正しいのであれば、それを知る者がそれを基に“雨を予言”することが可能だ。予言という言葉の下で、降雨という自然な現象を神がかりな奇跡に変えられる。

カレブの体中の血がめぐり、全身で脈を打っているかのようにドキドキと波打っていた。

明日、もしも彼女の言うとおりに雨が降れば……もし雨が降れば、彼女が正しいことが立証される。

『信じない、カレブ？』

彼の様子がおかしいのを不審に思ったマーシャが彼をのぞきこんだ。彼は驚きを抑えきることができないままに彼女に何とか微笑もつとしたが、不自然な笑いになってしまった。

『信じる？』

彼女が顔をのぞきこむと、彼は小さく頷いた。

『ああ、信じている……』

だが、マーシャの目には彼が混乱しまくっているようにしか見えなかった。

その時、家の裏口の奥から召使の押し殺した声が出て、カレブはさっと視線をそちらに走らせた。

『何だ？』

『早くお戻りを！ 大長老がこちらにやって来るのが見えたそうです』

『わかった』

カレブはマーシャの手を引くと、急いで寝室へと走っていく。ネデルの到着を心配したマーシャだったが彼とは違う来客らしく、カレブはただ彼女にじっとしているようにと告げた。

いまだ治まらない興奮をもてあましつつカレブが面会部屋で待機していると、昨日の話し合いの場を提供した大長老がカレブの前に姿を現した。長いあご髭を落ち着きなくいじりながら、彼は簡単にカレブに挨拶をし、向かいの椅子にそそくさと腰を降ろした。

ネデルが帰宅するまでの時間、暇をもてあまして愚痴をこぼしてきたか。

愚痴を聞いてやる気分ではなかったが、驚愕の事実をじっくりとかみしめる時間にするには、ちょうどよい機会だった。

『これはまた急にどうなされた？ 何か問題でも？』

『いや、そうではない』

大長老はあちこちに視線を散らして、カレブは嫌でも注意を引き付けられた。

『どうされたのだ？』

『族長、先ほど祈禱所からの連絡が来た』

『祈禱所から？』

カレブの心臓の音がいきなり高くなり、脈が早まった。

『ええ。急ぎの用向きで』

大長老はカレブをすがるように見つめ、言った。

『ヨーダ様が出てきて弟子たちにお告げを出された。今年の儀式は、明日の午前中に行われるそうだ』

ああ！

カレブは口を覆って彼から目をそらした。心臓が下から押し上げられるような感じがした。

ああ、マーシャ！ おまえはやはり、正しかったのだ……

南の空の向こう - Against all odds -

!

## 第41話

儀式が急遽明日に決まった村は、あつという間にその対応に追われることになった。族長カレブは人々の動員を指示すると、備品等の配置はヨーダの弟子たちの指示を仰ぐことを皆に申し渡し、夕方近くに様子を見に来るまでその場を離れることにした。儀式関連の件については祈祷所が取り仕切る慣わしとなっており、族長や長老が前面に出るのは良しとされない。牢小屋の周囲もあわただしく動き始めた。

ネデルはまだ帰宅していないが、カレブはマーシャの身が心配だった。

今日と明日の昼までを乗り切れば、彼女の身はおそらく無事だ。帰宅したネデルもそのまま式の準備に入って多忙を極め、俺の家に寄り付くことはあまりないはずだ。

彼女さえ外に顔を出さなければ、村中が忙しくしている今、見つける可能性はとても低かった。

今夜はずっと家で待機して、彼女の側で見張っていよう。

寝室に戻ってきたカレブは、そこで退屈そうに足を投げ出して座っているマーシャを見つけた。

せっかく外に出ていられたのにまた室内に逆戻りだ。かわいそうに。

「……………どうしたの？」

入口につっ立って彼女を見つめているカレブを見て、彼女が言った。

「今、知らせが来た」

「来た？ 誰？」

もう少しの辛抱だ、マーシャ。

彼は上唇を舐め、彼女に近づくと床にひざまずいた。彼女の手を

取って自分の額に当て、彼は目を閉じる。

明日の午後になれば、おまえは自由だ。

『カレブ、何？』

『やはり、おまえは俺の女神だ。おまえの名の意味するとおりにな  
再び唇を舐め、カレブは顔をあげて誇らしそうな笑顔を見せた。』

『明日、儀式だ。雨が明日降るとあの嘘つきな老婆が言っ  
てきやが  
った』

後半は何を言っているか理解できなかったが、彼女はカレブの言  
う事にはっとなって体の向きをかえた。

『明日？ 本当？ 明日、儀式？』

カレブが満面の笑みを見せた。

『そうだ、おまえが正しいという証だ。おまえはもう一日だけ、こ  
こで待てばいい。わかるか？ あと一日だ』

彼の立てる人差し指に、彼女は何回も大きく首を縦に動かした。

あと一日、ここに身を隠していればいい。そうすれば、外に出ら  
れる身となる！

彼女が興奮した瞳をカレブに向けると、気持ちを探した彼も嬉し  
そうに顔をゆがめていた。マーシャが彼の首に腕をのばしてその体  
を抱きしめると、彼も無言で彼女を抱き返した。

『明日の朝、俺は外出する。この者も全員いなくなるが、俺がこ  
こへ戻るまではずっとこの部屋にいる。俺が帰った時、おまえは自  
由になれる。これは大事なことだ、俺の言葉をちゃんと理解したか  
？』

『みんな、いなくなる。私は、ここにいます』

『そうだ。俺が戻るまで、絶対にここから出るな』

カレブはマーシャの笑顔を見ると胸がつかえた。

『カレブが戻る。私、ここを出る。私、外に出る』

賢い女だ。

マーシャを見つめ、彼はゆっくりと頷いた。『そうだ』

ああ、この女が俺の妻ならば、どんなによいか。

生け贄の慣習ができたのは、祈祷師が若く美しかったヨードに交代してからの約三十年前だ。カレブの生まれる前からこの蛮習は始まっており、ヨードの予知能力をあがめた一族の男たちは自らの危険も顧みずにこぞって人狩りへと繰り出し、一族とヨードからの賞賛と注目を得ようとした。

当初は一人だった生け贄の人数は、年を追うごとに徐々に増えていった。一族の蛮習が周囲の部族に知れ渡ってからには付近に住む人々がどんどん別の地域へ逃亡していき、人狩りをするのに、村の男たちは数日間もかけて遠隔地へ行かなければ成果があらなくなっていた。

族長の座に就く数年前までは、カレブも何の疑いもなく男たちのグループに合流し、遠くの村まで出かけては逃げまどう人々を無理やりに連行してきていた。狩り班に加えられる事は一族の男としての名誉でもあった。

村の南のはずれにある式場では、明日の儀式が間に合うようにと着々と支度が整えられていた。石のピラミッドがきれいに清掃され、貢ぎ物を載せる白い祭壇がピラミッドと人々の席を区切るように並べられていた。周囲をめぐる柵のあちこちには邪気を祓う魔除けの飾りが掛けられ、明日まで焚き続けられるかがり火が式場の四方向で燃えていた。細長い祭壇とピラミッドの間には長方形の重い石台が置かれる予定だったが、今のところは運びこまれてはいない。神への貢ぎ物である動物たちは当日朝にその命を絶たれ、別の場所から祭壇の上に運び込まれてくる。だが、生け贄である人間はその最も新鮮な血と肉を神に捧げられるべく、一族全員が見守る中、式場で命を奪われることになっている。最初の生贄は、祈祷師ヨードが直接手を下す。特別に作られた石台は、ヨードによって名誉ある死を与えられる者が横たえられる死のベッドだ。その上に体を拘束され、彼女が生け贄の喉元にめがけてナイフを突き立てる。

## 第42話

人々があわただしく行き交い、儀式の準備が着々と進められている。ピラミッドの方を見つめているカレブの表情が険しく硬い。視線はそこから動かず、何かを考えている様子だ。

彼が石のピラミッドに背を向けて空を見上げた。日が暮れかかってきている。西にある山の周辺に浮かぶ雲はまだ位置を変えておらず、風向きも変わっていないかった。

かがり火が風にたなびくのを見ていたカレブを見つけ、長老の一人が忙しく働く人々の間を縫って彼に近寄っていった。

『おお、族長、来ていたのかね』

『まあ、少し様子を見に来ただけだが』

『順調なようですな。けっこうなことで』

満足そうに笑う長老とはちがってカレブの表情は晴れない。カレブは唇をおさえ、長老に黙って頷いた。

『残るは、ネデル殿の土産だけですな。暗くならないうちに戻ってこられればよいのだがねえ』

『あれは約束を守る男です。そのうち戻ってくる』

彼はそっけなく言い、まだその場に残りたい素振りを見せる長老から離れ、祭壇の前から去った。

忙しく動きながらもカレブの姿に目をとめた人々が道を譲り、彼に声を掛けていく。カレブの実兄の姿もあつたが、彼は作業に従事していて弟に気づかないらしかった。カレブも人々の間にいる兄の姿を見つけたが足を止めることはなかった。カレブが族長となり、以前とは立場の変わった今は兄弟が親しく声を掛け合うことはない。カレブは無言で式場の出入口へと向かって進んで行った。

式場出入口から北東に伸びる道の先にはヨーダや弟子たちの棲む祈禱所がある。儀式日のお告げをしたヨーダは“集中力を高める”

ために、当日まで誰とも話さず、食事もせず、独立棟で式の開始時間まで一人でこもっている。三十年以上貫いている彼女のやり方だ。今頃は、彼女の弟子たちが村人の集めてきた貢ぎ物を再点検し、当日にそれらを現場へ運ぶ手順を人々に指南しているはずだ。

カレブがその道をやり過ぎて十歩ほど北上したところ、祈祷所に続く道から彼に足早に近寄っていく男がいた。

『カレブ様!』

男は道はずれて斜めに走り、カレブの歩く道の方へ駆け寄った。彼の部下ネデルだった。頬骨の上が赤く光っていて、日光を邪魔する障害物のない山肌での作業を通して、また一段と日に焼けたようだ。彼は歩みを止めたカレブに追いついた。

『カレブ様!』

『ネデル? おまえ、いつ戻った?』

『つい先ほどです。採掘したラズリを祈祷所に預けてきたところで今から族長と大長老の所へ伺うところでした。ここで会えてよかったです! ああ、カレブ様? 祈祷所で、儀式が明日に決まったと今しがた聞きました。私が間に合って幸いでしたよ!』

『ああ、暗くなる前に村に到着できてよかったな。他の者も無事か?』

『ええ、元気です。……カレブ様、儀式の準備をご覧になつてきたのですか?』

『そうだ』

ネデルに続き、後ろの式場の方向を見やってカレブが言った。

『不備はなさそうだ。おまえが戻ったのなら、これで全て揃ったな』

『お役に立てて嬉しい限りで』

ネデルがめずらしく、嬉々として興奮していた。祈祷師ヨードに、畏怖というよりは尊敬と憧れの念をネデルが抱いているのをカレブは知っている。

自分よりも格段と秩序を重んじるネデルが、敬愛しているヨードに騙されていると知ったらどうするだろう?

南の空の向こう - Against all odds -

尊敬は憎しみに変わるのだろうか？  
カレブはふと思った。

## 第43話

ネデルが大長老宅へ帰宅の報告をするというので、カレブは途中まで彼と一緒に歩いていった。ラズリの採掘は予想外にスムーズに進んだので予定量をすぐに満たせた、とネデルがカレブに話す。大地の法則にのっとって必要以上の量は採掘せず、ネデル一行はすぐに帰宅の途についたのだ。ラズリを目にしたヨーダの弟子たちも喜んで、とネデル自身も嬉しそうに言った。ネデルは名譽ある役目を果たせたことに喜んでいられるらしく、カレブと話す間、彼はずつと笑っていた。

大長老宅に着くと、外で掃除をしていた家の者が二人に気づいて家の中にいる大長老に知らせに走った。ネデルとそこで別れるつもりだったカレブは、大長老と顔を会わせて行く、とネデルに告げていた。二人はほとんど待たされることなく大長老に面会を許され、彼のいる部屋へ通された。

『おお、ネデル殿！ 帰ってきたか！』

彼の顔を見るなり、大長老は大喜びで彼にそう言った。

『はい、無事に戻ってまいりました。ラズリも先ほど祈禱所に預けてきたところです』

『そうか、そうか！ ご苦労であった！ これでヨーダ様もお喜びであろう。ああ、わしも一安心じゃ！』

『ええ、これで明日の儀式を待つばかり……私も安堵しております』

『本当によかった。なあ、族長殿？』

カレブが唇の両端を上げ、硬い笑顔を見せた。

残りの長老たちには自らが報告をしに行く、と大長老が言い張るので、三人は明日の朝ここに全員集まることを約束し、彼らはそろっ

て大長老宅を出た。村を南下して行く大長老を道の交差点で見送った後、ネデルはカレブの自宅へ向かおうとしていたがそれをカレブが止めた。

『ネデル、おまえはもう家に帰れ。明日の儀式の件で俺たちが準備しておくことは、今はない。明朝大長老の家に集い、式場に行つて儀式を最後まで見守ればいいだけのことだ。今日はもう早く家に帰り、明日に備えて休養しろ。俺も今日は早く寝つくつもりだ』

『は……それは有り難い事ですが、本当によろしいのです？』  
『もちろんだ。おまえは外出先から帰つたばかりだ、明日の儀式中に不調にならないよう、しっかり休養しておけ』

ネデルはびつくりした顔でカレブを凝視した。

カレブの表情は真面目で口調も穏やかだ。ふざけているふうでもない。ネデルが山の近くでしてきた採掘作業は重労働ではなかったが、それに先立つ人狩りなどで、ネデルは外出が続いていた。

ネデルが不審そうな目つきをみると、カレブが心配そうな口ぶりで言った。

『おまえ、早く家に戻つて休んだ方がいい』

ネデルははつとして主人を見返した。

『そうですね……明日の儀式はしっかりと立ち会わねばなりません。ありがたきご配慮にございます。明日はここでカレブ様とお会いすることとして、私は、今日はこれでさがらせていただきます』

『ああ、そうしろ。おまえの母親も心配していたぞ』

『おそれいます』

ネデルはうやうやしく頭を下げ、カレブに何度も礼を言つて自宅の方へと帰つていった。

カレブはネデルの姿が小さく消えるまで静かに見送ると、やっと笑顔になつて自宅へと足を向けた。儀式までの最後の夜は、誰にも邪魔されず、なんとしても無事にやり過ごさねばならない。

村が明日の儀式にむけて興奮しているのとは反対に、カレブの足

取りは重く、表情は暗く硬かった。

ネデルが自宅へ戻る途中にある長老宅の玄関先で、カレブの召使女の一人がその嫁と話しこんでいた。それを目にしたネデルは、主人に明日の儀式で着る衣装について尋ねる点があったのをふと思い出した。

『ああ、俺としたことが！』

彼は自分の忘れっぽさに毒づくくと、向きをくるりと変えて引き返した。

太陽はもうそろそろ地平線に顔をつけようという頃だった。

## 第44話

日没がせまり、族長宅の東側に大きな影が伸びていた。

夕食の用意を整え終わつたのか、召使たちの姿はもう庭にはなく、玄関前には族長を守るべき護り番の姿も見えなかった。

『のん気で怠慢な者どもめ!』

使用人たちに腹を立てつつ、ネデルは家の左側にある、家事部屋の開きっぱなしの扉に寄っていった。そこからは室内の明かりがもれていた。

『私は族長を責めやしないわ。なんたってあんな奥様をお持ちよ、同情するわ』

扉の中から漏れてきた召使の周りをはばかりる小声に、ネデルは咄嗟に扉横の壁に身をひそめた。女は扉にほど近いところで話しているらしく、小声にもかかわらず、ネデルのいる所でも内容がはつきりと聞き取れるくらいだった。

彼が息をひそめていると、すぐに別の声が続いた。

『そりゃあ、私もそう思うわよ! 族長のあの笑い顔を見た? 族長があんなにお幸せそうなのは本当に初めてよ。……. . . だけど奥様はそのうち戻ってこられるのよ、そんなに先の話じゃないわ。そうしたら、族長はあの女をどうなさるおつもりかしら』

なんだって? 族長が幸せそう? あの女、とは誰のことだ?

息をのみそうになり、ネデルは自分の口を両手で急いでふさいだ。彼は、彼女たちの会話を一言も聞きのがさまいとさらに耳を近づけた。

『そうよねえ、どこかの家に住まわせるおつもりかしら? でも、奥様に知れたらただじゃすまないわね。きつと、彼女は殺されるわよ』

『ええ、奥様ならやりそうだわ。でも、族長はあの女に首つたけよ、そんなことさせやしないわ。ああ、族長をそこまでさせるなんて、

どんな女なのかしらねえ？ 顔を一度見てみたいわ……」

彼女の目の前にいた女が顔をこわばらせて口を押さえた。不意に、うつとりした表情を浮かべる女の首に冷やかな物があてられた。

『え……？』

不審に思った女が顔を左側へ動かして冷たい何かを確認しようとする。彼女の耳元に生温かい風が吹きかけられた。『ひゃっ！？』女の首に腕をからめて押さえ、ネデルがその首にナイフの刃を当てながら二人を交互にらみつけていた。

『ネデル様！』ネデルの息が女の耳にかかり、彼女の体は硬直した。向かいの女が全身を音が鳴りそうなほどに震わせ、悲鳴をあげようとして彼の怒りの目に出合っただけで失敗している。ネデルが意地悪そうにやりと笑った。

『そうだ、二人とも、そのまま声をたてるな。声をたてれば、この首を掻くぞ？』

女たちは震えながら彼に頷き、彼はつかんでいる女の肩を満足そうにぽんと軽くたたいた。

『さあ、今の話をよくわかるように俺にも教えてもらおうか。族長が夢中だという、奥方でない女とは何のことだ？』

『それはあの……』

『あの、私たちも実はよく知らな……ひいつ？』

喉元にナイフを食い込ませられた女は目をひん剥き、低いうめき声をあげた。それを目撃した女は絶句し、何かを急いでしゃべろうとしたのだが、それがまわらず、出てきた言葉は理解不能だった。

『俺の気があまり長くないのは知っているな？ 知っていることを全部しゃべれ』

ネデルはむっとして召使女の首からナイフを離し、その代わりに自分のひじの内側に彼女の首を巻き込むようにして体を拘束した。

『さあ、言わないか！』

低い小聲で彼が怒鳴ると、彼の元にいる女が口を開こうとした。

だがその前に、ネデルは向かいの召使女の背後にある、配膳されるのを待つばかりの二人分の食事に目がくぎづけになった。

「まさか……！！」

彼は呆然とし、その直後には歯をくいしばってこめかみに青筋を立てた。食事に見えられた彼の目は、真っ赤に血走っている。

「うお……っ」

ネデルは腕に抱えた女に加え、向かいの女の腕もむんずとつかみ、二人を引きずりだすようにして家事部屋の外に出した。二人は怯えきつてネデルに必死に命乞いをしていたが、彼は彼女たちに家に背を向けて立つように命じたただけだった。

「おまえたち、俺がいいと言つまで声を出さずにここにいるんだ。一歩でも動こうと思つてみる、即刻、殺してやる！」

彼女たちは涙を流しながら彼の命令に従つことを誓い、ネデルは最後に二人をじろつと睨みつけると再び家事部屋に戻つていった。開いていた扉は内側からそつと閉められた。

ネデルは外と断絶された家事部屋の中でぐるぐると歩き回つていった。

「なぜ、俺に愛人のことを黙っていたのだ！ 部下であるこの俺に！」

ネデルは声を出さずにそう言い、土間の床を蹴った。

「女たちが知っているのになぜ俺には知らせない……！！」  
族長の食事の皿を憎らしそうに見つめ、彼は大声を出しかけて口を覆った。そして、皿から視線をそらさないまま、土間に両膝を落とした。彼が興奮して上下させる肩が治まるまで、彼は少しも動かなかった。

しばらくたって、ネデルは深呼吸をし、何とか立ち上がった。食事の皿からはあえて目をそらし、家事部屋から屋内の廊下に繋がった扉をゆっくりと静かに開ける。

扉の正面には控え室があるが、そこにも居室にもひと気はなく、音がしない。彼が耳をすますと、扉を左にいった一番奥にある部屋から流れるように低い声が聞こえてきた。ネデルは天井を見上げてもう一度深呼吸をし、通路を奥へと歩いていった。

## 第45話

いきなり寢室の入口をふさいだ人影に、カレブはそれまで寝転がっていたマーシャの膝から飛び起きた。彼女を自分の体の影に隠すようにして、彼が立ち上がる。

『ぎいええ〜〜〜っ』

ネデルの目に、確かにあの“魔”の瞳が映った。

カレブが女の膝から立ち上がる寸前に、その紫の両目もネデルをとらえ、驚きでさらに目が大きく見開かれていた。

あまりの驚きに思わず逃げようとしたネデルの服の襟をカレブの手が後ろから引つ張り、ネデルがバランスをくずした。ネデルの体があやうく通路の上に落ちていきそうになったところをカレブの手がその胸ぐらをつかみ、彼は壁に上半身をたたきつけられる。ネデルがぎゃつと叫んだ直後、首筋にカレブの左手が伸び、ネデルの後頭部が壁にぶつかる音がした。その拍子にネデルの耳の後ろが切れ、血がにじんだ。

ネデルが血走った目をずらすようにしてカレブに視線を向けると、彼は狩りの際のような闘争心を剥き出しにして、怒り狂った形相でネデルを睨みつけていた。

『盗人のような真似を！！』

カレブは腕に力をこめ、ネデルの首に押しつけた手を上に軽く動かすようにしただけで彼の体を宙に浮かせた。カレブの左のこめかみに太い青筋が浮き出していた。

『おまえ！ こんな事をしてただで済むと思うな！ よくも主人の俺に向かつて舐めた真似を！』

『……………カレブ様……………あの女……………？』

『だまれ！ そんな事を一言でも口にしてみる、おまえの首をへし折ってやる！』

『なん……正気……ああ!』

カレブがさらにネデルの首を絞めたので、彼は苦痛に顔をゆがめ、空気を求めて何度もぜいぜいと息を吸おうとした。それでもカレブの力はまったく弛まず、ネデルは恐怖で顔をゆがめた。

『カ……ブ様……』

その時、通路の先に大きな足音がした。

カレブは振り返って二人の護り番が走ってくる姿を見たが、ネデルを持ち上げる力を決してゆるめはしなかった。走ってやって来た護り番たちは尋常ではない二人の姿に驚愕し、二人の手前で急停止した。

『向こうへ行っている!』

二人が口を開く前にカレブが吠えるように怒鳴った。

『は、はいっ』

男たちは彼の腕に拘束されているネデルの青ざめた顔を一瞥したが、一族最強の男であるカレブの血走った目と気迫に怖気づき、我先にとあわてて退散していった。そして外に出た彼らは、家事部屋の前で立たされている召使女たちを見つけ、彼女たちの所に走って寄っていった。

邪魔をするものがなくなったカレブは、彼の腕の下で逃げようと暴れるネデルに視線を戻した。

『ど……か、お静まり……を……』

彼はネデルの首を片手で押さえ、片手で彼の両手首を壁との間に押さえつけた。

『これが平気でいられるか! 俺は部下に侮辱されたのだぞ!』

『わ……心配を……!』

『おまえは自分の身だけ心配しろ! さあ、おまえをどうしてくれようか?』

『……言いま……せん』

『おまえの言葉など信じるか!』

カレブの取り出したナイフの光る刃先を見たネデルは身震いし、  
だらしなく口を開けて目をそむけた。

『おまえがこの件を皆にしゃべれば、俺は族長を追われて終わりだ。  
おまえは俺が嫌いだからな、そうするだろう。ただ、それをしたと  
同時におまえも終わりだ。それがなぜか、おまえもわかつているな  
？ おまえはヨードに背き、俺に三度も加担した。おまえが言い逃  
れしたくとも、牢番はおまえが彼女を連れ出すのを見ているし、お  
まえは“生娘の間”の合鍵も持っている。おまえもおまえの一家も、  
一生呪われた者として残りの人生を生きていくことになる』

ネデルが驚いて怯えきつた視線をカレブに向けると、彼はにやり  
とほくそ笑んだ。

『おお・・・カレブ様・・・!!』

ネデルが悲痛な声を出すと、カレブは無言で眉だけ上げて、また  
笑った。

『来い、ネデル！ 儀式前日に不吉で粗暴なふるまいは俺もしたく  
ない。だが、今夜はおまえをここから出す訳にはいかない！俺の事  
を言いふらしておいて・・・ 一家で逃げ出されたら困るから  
な』

物でも運ぶかのように軽々とネデルの体を引きずり、カレブは彼  
を控え室に放り入れた。それから、さつき追いやったばかりの護り  
番たちを大声で呼びつけると、緊張している彼らにネデルの手足を  
縄で縛らせるように命令した。護り番たちは一言も口をきかず、ネ  
デルの口も布でしばって声が漏れないようにした。ネデルは恨めし  
そうにカレブや護り番たちを見上げたが、自由がきかない体をさら  
に椅子にまで固定されてしまい、身動きがとれなかった。

護り番の一人を同じ室内で見張りにつけることにし、カレブは晴  
れ晴れとした顔になってネデルを悠々と見下ろした。

『明日になったら縄を解いてやる。ここから俺と一緒に儀式に向か  
えばいい。心配するな、おまえの家にはちゃんと伝言しておいてや

る  
『

ネデルはあきらめたように目を伏せ、カレブの言葉に何の反応もしなかった。

カレブは護り番にも彼をしっかりと見張るようにとくぎをさした。それから護り番によって自由になっていた召使女を呼びつけ、ネデルの家に行き、彼は族長宅で重要な話をしているので明日の儀式には族長宅から直接行くと伝えるようと命じた。

## 第46話

全てが終わったカレブがようやくマーシャの待つ寝室に帰ると、彼の顔を見るなり、彼女が駆け寄ってきた。

「大丈夫？」

指先を震わす彼女の両手を取り、カレブはマーシャに顔を近づけて微笑んだ。

「大丈夫だ」

「本当？」

「本当だ。ネデルは隣の部屋に置いている。縛ってな」

体を縄で縛る仕草をし、カレブは隣室に面する壁をさした。それでも、マーシャの不安そうな表情はとれなかった。

「心配するな、今夜さえ乗り切れば大丈夫だ」

カレブはマーシャの顔を両手ではさみ、キスをした。すると彼女は小さく笑い、カレブの肩に顔をあずけ、背中におずおずと手をまわした。カレブが彼女の髪に手を入れると、彼女も彼の肩の上で唇の端を上げた。

「俺はおまえが好き」

彼女を笑顔にする常套句をカレブが不完全な発音で口にすると、みるみるうちに彼女に大きな笑顔になった。彼の背中にまわされた彼女の手に力が入り、彼はまた彼女にキスをした。

儀式当日の朝、ネデルは不自由で窮屈な格好だったというのに、見張りの男に揺り起こされるまで椅子の上で器用に眠りこけていた。マーシャの身を案じて一睡もできなかったカレブと違って充分な睡眠をとったようなのに、ネデルの目の下には黒ずんだクマができており、顔色が病人のように悪い。体を固定されていた縄から自由になっても、ネデルは気力が萎えてぼんやりしているようだった。彼に何を言ってもやっても反応が鈍く、召使女は彼を叱咤して着替え

を済ませた。

ネデルとカレブの身支度が完了し、護り番や召使女たちが先に出発する二人を見送るために家の前に出揃った。誰の目にも明らかかなほどに気落ちした表情のネデルは、主人から借りた儀式用装飾品を肩と手首に着けている。カレブの目はまだ赤く、明るい声で笑うどころか一言も発せず、口をきつと結んで無表情を決め込んでいるように見えた。一夜明けて主人とあらためて顔を会わせた女たちは、自分たちの軽率な噂話がネデルを家に侵入させてしまった失態への後ろめたさや怖れからか、主人と目をまったく合わせようとせず、身を縮めてうつむいているばかりだった。

『行ってらっしゃいませ』

『私たちも後ほど参ります』

護り番の男たちがそう声をかけると、カレブは視線を動かすこともなく、微かに頷いた。

『行ってらっしゃいませ……』

遠慮がちに召使女たちがそう言うと、カレブは扉の横に佇む彼女たちを静かに見た。彼女たちは頭を下げ続けていた。

『おまえたちが出たら家には鍵をかけていけ。裏口も忘れるな』

静かだったが、言外におそろしいほどの圧力を感じさせるカレブの口調だった。

命じられた彼女たちだけでなく、護り番たちも主人の命令に返事をした。

カレブはネデルの半歩後ろについて歩き始めた。カレブの鋭い瞳はネデルの横顔とその脇腹に向けられ、右手は腰のナイフから動かない。彼がちよつとでも妙な行動をしたら、瞬時に横から脇腹を刺してやるつもりでいた。ネデルは身構えることもなくぼんやりと地面を見て、ただ足が動く方向に進んでいるだけのようだ。

『おまえは儀式が終わるまで、ずっと俺の隣だ』

『……はい』

ネデルは機械的に返事をした。

『少しでも誰かに俺の事をしゃべろうとしてみる、その場でおまえを刺すからな』

『・・・・・・・・はい』

カレブはネデルの表情をじっくりと探るように見て、彼の手や足にいたるまで細かく観察した。

少し猫背になって、精気のない瞳は地面を見つめ、とぼとぼと老人のように歩いている。

大長老宅が見えてくると、朝の早い老人たちである長老たちは既に全員集まっているのがわかった。長老の一人がカレブたちに気づいて二人に片手を上げる。

『カレブ様・・・・・・・・』

今日になって初めての言葉らしい言葉を発したネデルを睨みつけ、カレブは周囲に視線をめぐらせた。

『・・・・・・・・何だ？』

『あ・・・・・・・・あの女と会話をしているように聞こえたのです  
が・・・・・・・・』

『おまえは！』

カレブはネデルの腕をねじりあげ、歩みを止めさせた。顔をあげたネデルが、焦点の合わない目でぼんやりと主人を見た。

『おまえ、殺されたいのか！ そんな事を口にするのなら、今こ  
でその首を切つてやつてもいいぞ！』

『はあ。いえ、私はただ・・・・・・・・お二人が話す、というのがど  
うにも不思議で・・・・・・・・』

ネデルがため息をついてうな垂れたが、カレブは彼から手を放さなかつた。

ネデルがもう一度深いため息をつき、力なく目を閉じる。それを見て、カレブはにこりとせせず低い声で囁いた。

『彼女は言葉を覚えた。一度教えればすぐに覚え、他の知識も豊富

にある、賢い女だ』

ネデルは曖昧に頷き、目を開いた。

『 あれは、今日も雨が降ると知っていた。ヨードがお告げを出す、前の話だ。ヨードでなくても雨の降る時がわかるんだ。おまえも、誰もが信じないだろうが、次に雨が降る時はヨードの代わりに俺が“予言”してやる。そうすれば、俺の話が正しいこともヨードが預言者などでない事も納得できるだろう』

ネデルが顔を上げ、いぶかしげにカレブを見た。

『 …… はあ？ 』

『 雨を降らせるのに贈り物は必要ない。今日がヨードの最後の儀式になるはずだ、よく見ておけ』

カレブは低い声でそう言い、不可解な顔をしているネデルの手を自由にした。

## 第47話

大勢の人々が式場入口に川の流れるように飲み込まれていく。入口の両側には二人の護り番が配置され、門の両端に神聖なかがり火も追加されていた。風向きは昨日に引き続き西からで、空気中の湿気は鬱陶しいくらいに増えており、空が低く暗くなっていた。長老やカレブたちを通り過ぎて先に行く者の中には、不気味な上空を憂いて祈っている者さえいる。

ネデルの母親、妻と娘も式場内の人の群に加わろうとしているところだ。長老たちと族長の姿を見つけた護り番たちが、彼らに道を譲って門の横に少しずれた。村中のあちこちから人々が続々と集まりつつある。カレブは古傷である左肘に手を触れ、顔を強張らせた。場内の人だかりの奥、地面より一段高い祭壇には様々な貢ぎ物があるところ狭しと並べられていて、そのさらに奥にある石のピラミッドの最下段には、昨日遅くに運びこまれた重厚な石台と生け贄から取り出した心臓を置くための装飾台が用意されている。

祈祷師ヨードは村人全員が集まった後に一人で登場する。彼女の弟子たちもまだ来ていない。カレブは彼女が立つはずの石台の向こう側を鋭く見て、低くなってきた空を見上げた。

式場入口を通り抜けた直後、どこからか寄ってきたネデルの義弟ソニーがカレブの隣にいる彼を引き止めた。

「ネデル様！」

彼は隣にいたカレブに気づかなかったらしく、カレブと目が合うと焦って挨拶した。

「ネデル様、どうかお助けください！ 牢小屋から出して祈祷所の敷地内に移したのはいいものの、何人かがひどく暴れて連行役の男たちが手こずっている状況です……生贄たちを連行するのに手間取っているのです！ 大切な貢ぎ物を傷つけるわけにはい

かず、力の強い男たちで押さえようとしているのですが、どうもうまくいっていないようで』

カレブはネデルの反応を牽制するように無言で見守っていたが、必死の義弟の表情さえ彼には見えていないかのようだった。ネデルがあっさりと首を左右に振った。

『他の者に頼んでくれ』

ソニーは信じられない彼の言葉に耳を疑った。

『ネデル様？ ヨーダ様が困っておられるのですよ？』

『知らん。他をあたれ』

カレブが心配するまでもなく、ネデルは追いつがる義弟を袖にもしない態度で彼を追いやった。ネデルが儀式に関わる名誉なら何でも加担したがるネデルにあるまじき行為だ。

ソニーはひどく困惑していたが、それでもカレブに挨拶をするとすぐに別の方向へと走って消えていった。

祭壇正面の所定の席にカレブたちがたどり着くと、正装した弟子の一人が石台の最後の掃除を丁寧に行っていた。先に席にいた長老同士は機嫌よく話に夢中で、集まっている人々は口々に噂話や世間話をしては和やかで、儀式特有の緊張感はまだそこにはなかった。

『……顔色が悪いようだのう、ネデル殿。大丈夫かね？』

長老ののんびりとした声に、カレブがネデルに視線を戻した。視線をまともに長老に向けないように注意し、カレブが長老とネデルのやり取りに神経を集中させていると、ネデルは、大丈夫だ、と抑揚のない声で彼に答えていた。長老は納得しかねているようだったが、背後にいた村人に話しかけられ、彼の注意はそちらに移った。

## 第48話

長老たちが村の老人たちとしゃべっている中、カレブとネデルの前にヨードの一番年下の弟子である女がひょっこりと顔を出した。

『何だ？』

カレブが威圧するように彼女を見下ろすと、小柄な女は族長に素早く挨拶をして、ネデルに囁いた。

『ネデル様、生贄の者どもが暴れて、連行に手間取っております。ネデル様のお手を借りに来ました。どうか、私と一緒に来て助けてくださいまし』

『……他の者にあたってもらいたい』

焦点の合わない瞳をピラミッドの方へ向けてネデルが呟くように答えると、女は小さく息をのんだ。

『ネデル様、どうか……他の者は皆、あの者どもに触りたがらないのです』

女が迂闊にカレブをちらっと見てしまい、彼をむっとさせた。あわてて彼女は頭を下げ、口を聞こうともしないネデルの様子をうかがいながら、尚もくいさがった。

『ネデル様、あの者どもがいなければ儀式が進行いたしません。どうか、お願いでございます』

『女』 口を差し挟もうとした矢先、ネデルが嗚咽に似た声を発したのでカレブは言葉を止めた。

『……もういい。他の男がいるだろう……』

女はさっきの義弟と同じく、非常に困惑した表情を浮かべてネデルを見上げた。そうして彼を見つめた女は、彼が頼りにならないと悟ったのだらう、カレブにお辞儀をして、人の群の中に舞い戻って行ってしまった。カレブはネデルを疑わしそうに見つめた。

人がますます増えてきた式場内で背後に人の熱気を感じながら、

カレブはいまいましたように空を見上げた。空はさつきよりも低くなっている。

大長老が和やかな笑顔を浮かべてやってきて、二人に声をかけた。カレブは素っ気なく挨拶を返した。

『おや、あれは？』

二人の背後に視線をやり、大長老が言った。カレブが振り向くと、ネデルがさつき追いやった弟子の女とネデルの実弟オルウエンが並んで二人の方に歩いてきていた。

オルウエンはネデルと違って快活で気のいい男で、体は大柄でもないが女たちにも人気がある。人々からの頼みをめったなことでは断らないので、弟子の女も彼を思いついてネデルの代わりに頼んだのだろう。

『大長老、族長！ 兄様！』

彼はにこやかに三人に挨拶をし、気まずそうにカレブから顔をそらす弟子の女の隣で歯を見せて笑った。大長老はにこやかに、カレブは慎重に返事をし、ネデルは弱々しく頷いた。

『兄様！』

オルウエンは兄の異変に気づきもせず、ネデルの肩をぐいと引いた。

『ここで何をしているのですか、兄様！ 一緒に祈祷所に行きましょう』

カレブがはつとして眉をひそめたが、ネデルはふてくされた顔をして弟の手からすつと逃れた。

『兄様？ 勇敢なあなたが行かなくて、誰が行くのです？ さあ！』

『向こうへいけ』

『なんじゃ、祈祷所？ 何の話だね？』

長老の横やりが入り、カレブは彼をさっと見た。弟子の女はあくまでカレブから目を背けている。

『ああ、大長老。今聞いたばかりなのですが、捕虜どもがひどく暴

れていて、まとめられないそうなのです。もう少ししたら式場へ連行しなければならぬというのに、誰も手を出したがらず困っているとのことですよ。』

『それは大変なことではないか！ おお、ネデル、ここは是非に行つて皆を助けてやりなさい。ヨード様のためにもう一肌、脱いでやりなされ。』

ところが、ネデルは恐怖とも焦りともとれる形相で弟を見て、カレブの体の後ろに急いで隠れようとした。その時になって初めて、オルウエンも兄の態度がおかしいことに気づいた。

『兄様？』

『大長老、ネデルは少し疲れているようで……』

カレブがネデルをかばうように彼を後ろ手にまわすと、大長老は憤慨して語気を荒めて言った。

『おお、族長、そのような庇い立てはネデルの身にならんぞ！ 彼は毎年、何らかの役目を当日に任されておるではないか。いくら昨夜帰宅したばかりとはいえ、甘えは許されん身だ。』

『いや、だが』

『ネデル、さあ、早く行つておまえの役目を果たすがよい。こんな所でのんびりしておつて、儀式に支障でもきたしたら大変なことだ。おまえたち、ネデルと一緒に連れて行きなさい。』

カレブが制止する間もなく、大長老のしわだらけの手がネデルをカレブの後ろから引っぱり出し、ネデルは弟と女の腕に引き渡された。彼は怯えてひどく動揺した表情でカレブをすがるように見つめたが、大長老の前でカレブは口出しができなかった。

大長老に急ぎ立てられ、オルウエンに引っ張られるようにして式場の入口に消えていくネデルの姿を、カレブは齒噛みしながらまんじりともせず見送った。

## 第49話

まるで生まれたばかりの子山羊のように、自分に手を引かれて転がるように歩いている兄を視線の端にとらえ、オルウエンは首を捻っていた。いつもの彼は弟や格下の者にこんな扱いをされたなら激怒するだろうに、それに腹を立てないばかりか怯えたように口を閉じ、視線をあちこちにさ迷わせている。まるで、兄自身が生け贄にでもされるかのように。

祈祷所の門を抜けたところに、木の檻を囲む人の輪が出来ていた。牢小屋の守番二人、ソニー、族長の護り番の一人、鍛冶屋、石切り屋、その後ろにヨードの弟子たちが困惑して檻を見つめている。檻内の捕虜たちが彼らに近づこうと試みる者たちを威嚇するように柵の間から手や足を出して振り回し、柵に体当たりして暴れていた。

「ネデル様！」

ソニーが、連れられてきた義兄ネデルを見つけて歓声をあげた。

「どんな様子だ？」

ネデルを連れて来たオルウエンが、走り寄ってきたソニーに向かって冷静に状況を尋ねた。

「どうもこうも……最初の生け贄用に元気な男を捕まえようとしているんだが、あんなに暴れられて、無傷で身柄を拘束するのに手間取っているんだ。あれでは檻の鍵も開けられない。あの三人の男のうちどれでもいいんだが」

「槍で威してもだめか？」

「奴等、俺たちが体に傷をつけられないと知っているんだ、効果はないよ」

低くうなづいて、ソニーが捕虜の檻を見た。

捕虜の抵抗は毎度のことだが、大抵の場合は、劣悪な環境下での

拘束が続いた後の捕虜たちは身体的に弱っていて、数人で押さえればいつも何とかなっていた。男たちが暴れている檻には中央に一人の男と三人の女たちとが固まっただけで、外側から手出しを加えられないように檻内でぐるぐる回りながら、周囲を牽制していた。

牢小屋の守番の後方には別の木製の檻があつて、そこには生娘たちが入れられている。中の娘たちは怯えきつて顔色が真っ青だ。

『あの三人でないといけないのか？ あつちの生娘で代用しては？』  
『あつちを使うだって？ 冗談じゃない、生娘なんか使えるわけがないさ！ それくらい知らないのか！』

ソニーになじられたオルウエンは気分を害し、むっとした。

『じゃあ、どうするんだ？』

『だから、困っているんじゃないか！ 俺たちで三人のどれかを捕まえるしかないだろう！』

彼はオルウエンを侮蔑するように見た後、地面にぐったりと腰を落とす義兄の背中を見て大げさにため息をついた。彼にならってネデルを一瞥したオルウエンも、檻の中の捕虜たちと周囲にいる者たちをやるせなさそうに見つめた。

そこにいる誰もが困惑し、焦って檻を見つめている。例年より拘束期間の短い三人の男たちは元氣過ぎるくらいに元氣だった。

オルウエンは自分の手が引かれたことに気づいて、ネデルの頭に視線を落とした。

祈祷所に着くやいなや、ネデルは力尽きたようにオルウエンの隣で庭の地面に腰を落としてしまっていた。オルウエンが多少あきれながらも放っておいた、その彼が目生き生きと輝かせて彼を見つめていた。

『……おい！』

『兄様？』

『元氣ならば男でなくてもいい、そうだな？ おい！ いるぞ、格好の獲物が！』

『はあ？ どうしたのです？』

オルウエンの目の前で、ネデルは地面から跳ね上がるようにして立ち上がった。彼のいつものちよつと意地悪そうな笑みまで復活していた。

彼はぽかんとするオルウエンの前を堂々と通り過ぎて、ソニーの肩をたたいた。

『ソニー、俺と一緒に来い！ ヨーダ様がお喜びになる、最初の生け贄として最適な者がいるぞ。捕まえるのを手伝え！』

『はい！』

実弟より自分が選ばれたことに、ソニーは挑発的に鼻を鳴らしてみせた。オルウエンは相手にせず、やれやれ、と肩をすくめる。

ソニーを連れたネデルは、檻の近くで状況を見守っていた族長の護り番の元に一直線に向かった。

『おい！』

呼ばれた男は興味なさそうに振り返った。彼は現れたネデルを物憂げに見て、隣にくつついているソニーをちらつと見た。彼は呼ばれても、ネデルに返事をしなかった。

『おい、おまえ！』

ネデルが早口でそう言うと、護り番はわざとらしく長い息を吐き、面倒そうに言った。

『何でしよう？』

ネデルはむつととして彼を睨んだが、彼の態度は改められなかった。族長カレブの次にくるネデルの立場ならば、誰もがネデルを敬って然るべきなのだ。

主人が部下ネデルを軽視するから、主人の使用人たちも彼を軽んじるようになったのだ。

ネデルは思わず握っていた拳を見つめ、護り番の冷たい目を見返した。

『おまえに名誉ある役目を与えてやる。俺と一緒に来るがいい』

『え？ いえ、結構です。 私はここですべき仕事がありますので』  
『なっ？ つべこべ言わずに来い！ おまえにも手伝ってもらおう、早く！』

護り番はあからさまに不満そうに顔をしかめたが、ソニーにいきなり肩をつかまれた。 『ちよっと？ やめてくださいよ！』

祈祷所を出る前に、ネデルは捕虜の男を捕らえるのは急がなくてもいい、とオルウエンに伝えた。

## 第50話

彼ら三人は祈祷所を出て、村の南北の道を北上した。式場へと向かう人々の姿はまばらになっており、「妊婦の家」を除く村中の人家が空っぽになるのも近い。

『どこへ行くのですか、ネデル様？』

興味津々のソニーが尋ねても、ネデルは卑屈に微笑むだけで返答しない。護り番の男はネデルに使われるのが気に入らないため、面白くなさそうに欠伸をした。

長老宅の手前に建つ食品保存庫の脇にあつた大きな麻袋を拾い、ネデルたちは大長老宅から伸びる道との交差点を左折した。その先にある人家はまばらだ。一般の人家を少し離れると族長宅がぼつんと建っている。

それまで何の疑問も持たずにネデルたちに同行していた護り番は、突然、自分たちがどこに向かっているかに気づいてはつとした。

『ネデル様、まさか……あなたは！』

声をあげて立ち止まった彼にネデルが冷たい視線を向けた。義弟が興味深そうに二人の間を見守っている。

『何だ？ 俺がどうした？』

『いけません、ネデル様！ 村の民に手をかけるなど！ ……ましてや族長の！』

義弟に視線を走らせて言葉を切った彼だったが、彼は反意を示すためにネデルが自ら持つ麻袋の先をぐいと引つ張った。ネデルは目をつり上げて彼の無礼に怒りを示し、しかし、不敵に鼻で笑った。

『何の悪いことがあるものか。おまえ、あれの顔を見たことがあるのか？ あれは村の民ではない、元々は俺がヨード様に差し上げるために捕まえてきた者だ。おかわいそうに、カレブ様は死んだ捕虜の悪霊に取り付かれて神経がおかしくなっているのだ。カレブ様は

あの女を外に出したばかりか、ご自宅にまでお引き入れなされた。俺は、その女を元の立場に戻してやるだけだ!」

『悪霊　ですって?　ああ、族長はそのような弱い心の持ち主ではございません!　族長はただ、恋をなされているだけですよ!』

『は、恋だと?　ばかなことを言うな!　あの者を一目でも見たら、おまえの方が間違っているとすぐにわかる。あれに恋をする者などいるか!　さあ急げ、もう時間があまりないのだ!』

彼がつかんでいた麻袋はネデルによって力まかせに引き抜かれた。ネデルは先頭を切つて急ぎ、興奮したように顔を上気させるソニーは彼に必死についていきながら、護り番の腕をつかんで急がせた。護り番は困惑し、怯えていたが、ソニーの手で無理やりに連れていかれた。

おそらく、ほとんどの村人たちが式場に詰め寄せていただろう。

何十人という民が長老やカレブに声を掛けていった。年に一度の神聖かつ残虐な儀式を目前にして、村人たちは気分を高揚させているはずだ。カレブは祭壇前の指定席で長老たちと並んで儀式の時が来るのを待っていた。

しかし、ネデルはまだ戻ってきていない。

彼の側を去る時のネデルの様子から想像すれば、彼が暴れる捕虜の前では全然役に立たないままに返されそうなものだが、今のところは戻つておらず、カレブが何度も振り返つた式場の入口にもそれらしき姿は見えなかった。カレブはずっとそわそわとし、長老たちの話も村人たちの言葉にも、耳が傾けられないでいる。

空が例年になく暗くなってきた。

何十回目かに入口をカレブが見た時、門の護り番が村に続く道や周囲を見渡し、人がいないことを仲間と確認し合っていた。彼らはそろそろ式場の出入口を封鎖し、内側から開けられないようにしてしまつた。

カレブはとんでもなく、胸騒ぎがした。  
時間が、かかり過ぎている。

いてもたってもいられなくなったカレブは発作的にその場を飛び出し、人々を掻き分けて出入口へと走り寄った。長老が彼を呼ぶ大声が後ろから飛んできたが、彼はそれを無視した。

『族長？ もう儀式が始まりますよ？』

『わかっている。すぐに戻る！』

護り番たちの間をすり抜けるように走り、カレブは祈祷所へと続く、ゆるやかな坂道を駆けのぼっていった。彼がそれほど走らないうち、祈祷所から出たばかりの弟子数人が正装でしすしと歩いてくるのに出くわした。

『おまえたち！ ネデルを見たか！？』

式場に座っているべき族長のいきなりの登場に全員が驚いていた。だが、儀式のために祈祷所を出た祈祷師とその弟子たちは誰とも口を訊くことが許されていないため、誰もが何の言葉も発しない。五人の弟子たちはカレブの横を黙ってただ通り過ぎて行った。いまいましい儀式の規則にカレブは歯軋りした。

髪を振り乱し、カレブが祈祷所の門にたどり着くと、門の陰でヨードとしゃべっているネデルの意気揚々とした姿を発見した。

その瞬間、カレブはネデルが裏切ったことを知った。

## 第51話

『ネデル!』

彼への殺意を全身で表しながらカレブが門を駆け抜けていこうとすると、どこから現れたのか、三人の男たちがふつてわいてきたように彼の周りを囲み、驚いている彼に飛びかかった。その男の中には、ネデルの義弟とカレブの護り番もいた。カレブの体を三方向から捕らえた男たちにより、彼はあつという間に地面に倒された。

『おまえたち、よくも俺にこんな事を……!』

頭を護り番の腕に押さえられながらも、カレブの目にはヨードとネデルが恐怖をたたえた目で自分を見下ろしているのがはっきりと見えた。

『ネデル、おまえ!』カレブの怒りは爆発した。『おまえだけは絶対に……絶対に殺してやる!!』

男たちが暴れるカレブに体を乗せて押さえ込み、腰にソニーの尻を乗せられたカレブはうめき声を出した。カレブの体の下で黄色い土埃が舞った。

『放せつ! おまえ、マーシャをどうした、あの女に、マーシャに危害を加えたら許さない! おまえたち、放せと……放せと言っているだろうっ!』

左手を背後から押さえていた男を跳ね飛ばすことに成功したカレブだったが、すぐに別の手が彼を押さえ、彼は手足の自由がきかなくなつた。地面に唇が押しつけられ、彼は小さな呻き声をあげる。土埃が大きく舞い上がり、三人の男の下でカレブは苦しさのあまりに咳き込んだ。それを見ていたヨードの瞳に同情ともいえる色が浮かぶのがカレブにも見えた。

『ヨード、よくも俺たちを騙してくれたな! おまえは空の動きを見て雨が降る前兆を見つuckerただけだ、誰にでもできることなのに!』

雨を予知するなど神々しい事を言つて、おまえのやる事はただのインチキじゃないか！」

ヨードの顔が一瞬さつとこわばつたが、彼女は何事もなかつたかのようにいつものすました表情に戻つた。

「なんとということじゃ、族長ともいふお方が。亡くなつた捕虜たちの悪霊にとりつかれ、すっかり度を失つてしまわれた！」

それから、族長を拘束していることで多少弱気になつてゐるだろ  
う男たちを励ますように彼女は優しい声色で言つた。

「おまえたち、そんな顔をするでない。ここにおられるのは族長であつて、今までの族長ではない。普段の族長であれば、あのような異形の女に………惑わされようはずもない」

「ヨード！ ネデル！」

ネデルはヨードに同意し、カレブの叫びに嘆くようにため息をついて、カレブの動きを止めている男たちに彼の体を頑丈な縄で縛るように命じた。

「ネデル、おまえにそんな事ができると思つのか！ あの女を牢から出して俺に連れてきたのは、おまえだぞ！」

「ええ、そうです………私も危うく悪霊の餌食となるところでした。あの時の私は、自分が何をしているのかわからなかつたのです」

「いい加減なことを言つな、ネデル！ 悪霊などどこにもいないし、俺は、あの女を愛している！」

「おお、なんとという事！ おまえたち、族長を早く縛りあげなさい！ 悪霊が体から出てこないうちに！」

ヨードが顔を覆い、男たちに作業を急がせるように叱咤した。

彼らはカレブを後ろ手にきつく縛り、その上、腕を体に固定させるように二重に縛つた。三人がかりでカレブが立たされると、彼はヨードとネデルに毒づき、ネデルを烈火のごとく怒つてにらみつけた。ネデルは怯えた態度を見せてはいたが、その一方でカレブを卑

下する表情も見せていた。

『………マーシャをどうした？』

『あれは女神などではありませんよ』

『彼女の名前だ。マーシャをどうしたんだ？』

ネデルはむっとして口をつぐんだ。だがすぐに、捕虜たちが放り込まれている檻の方へ視線を投げた。カレブがそれをたどって見ると、木製の檻の前に口を閉められた茶色い麻袋があり、それは上下に小さく動いていた。

カレブははっとなつてネデルに視線を戻した。

『おまえ………彼女をどうするつもりだ！』

カレブの瞳はネデルの唇から離せなかった。顔が震え、どうしても止められない。

『言え！ マーシャに何をするつもりだ！』

口惜しさと哀しさでカレブの両目から涙がこぼれた。ネデルだけでなく、族長の周りにいた男たちは心底驚いたように彼を見つめた。頬を流れていった涙が唇に触れ、カレブはそれを親指で拭い、濡れた指先を見た。そこから目をそらせず、カレブの喉の奥が小さく震え始めた。彼の目からは涙がとめどなく流れ始めていった。庭中が沈黙し、ネデルは動揺したようにカレブと男たちを見て、答えを言わねえているようだった。

『ネデルはな』

沈黙を破つたのはヨーダのしわがれた声だった。カレブは彼女を鋭く睨み、人々が彼女に振り向いた。

『ネデルは、あれを最初の生け贄として捧げると言うてくれたのじや。なんと素晴らしい贈り物なこと』

彼女は鼻の穴をふくらめて笑い、隣のネデルを賞賛するように眺めた。

『のう？ わしはそろそろ行かねば。民が待ちかねておる』

『ヨーダ！』

カレブの叫びはヨードに無視された。

カレブとのやり取りに興味を失くしたらしいヨードがネデルの側を離れようとした。ネデルが囁くように彼女に何かしゃべり、彼女は満足そうに頷いて門の方へと歩き出した。

カレブは、ヨードの動きを追う男たちの、一瞬の間をついた。無言でヨードに走り寄ってその大きな体を彼女に体当たりさせる。ヨードは逃げる間もなく、まともに大きな筋肉質の男の体を受けて軽々と後ろに吹っ飛んだ。彼女の体は緩やかな弧を描いて地面に背中から着地した。

『ヨード様！』

悲鳴をあげたネデルがヨードに駆け寄って助け起こす間に、ソニーがカレブの脇腹を力まかせに肘でつき、彼が傷みでひるんだところを男たち三人が体の両側を拘束した。

## 第52話

『カレブ様、なんとひどい事をなさる！』

ネデルが悲痛な声をあげて抗議すると、痛む肩をおさえながらヨードがそれをたしなめた。

『よい、ネデル。わしにケガはない、大丈夫じゃ。族長を責めるでない。言っただじやろ、今の族長は悪霊に惑わされておいでだ』

『俺は正気だ！ おまえがインチキだというのも、俺があの子を愛しているというのも、全て本当だ！』

ヨードは目を伏せ、カレブの言葉が聞こえない振りをした。そして、ネデルにこっそりと耳打ちした。

『ネデル、族長は儀式には出せぬ。どこかに隔離せねば』

『わかっています』

ネデルは彼女の囁きにそっと目配せして同意を示した。

彼女を無事に送り出したネデルがカレブに振り向いた。

『カレブ様には儀式の間、退いていただきます』

カレブのあまりの眼力にネデルが一瞬ひるんだ。

『俺はここから動かない』

カレブは麻袋に視線をやり、口惜しそうに唇をかみしめて地面を何度も蹴った。

『ここにずっといるとおっしゃるなら、それでも結構です。』

カレブはずっと唇を震わせながら、マーシャの入られている茶色い袋を哀しい目で見つめていた。彼を見る男たちの表情に同情のような哀れみが浮かんでいた。

『ネデル』

ネデルが顎を上げ、カレブに向いた。

『おまえがどうしてもヨードに特別な贈り物をしたいと言うなら、マーシャでなく……この俺を使い』

『ええ？』

『俺はこの族長だ、特別に値する。その代わり、彼女の命は取るな』

『何をおっしゃるのですか！ そんな事をしてどうするのです！』

『………マーシヤは生きられるだろう』

体の底から搾り出されるようなカレブの声を聞いたネデルにひどく焦った表情が見えた。

『そんな、族長をあんな者の身代わりになどできるはずもありません！』

『頼む！』

カレブが頭を下げたことでネデルはさらに仰天していた。

『お止めください、カレブ様！ 私にはできません！』

『それならばいっそ、俺も一緒に殺せ………！』

カレブは息をするのも辛そうに何度も肩を大きく上下させて、涙のたまった瞳を隠しもせず、ネデルに差し向けた。

ネデルは怖ろしかった。族長の想いに心を動かされた男たちが檻の中の捕虜をどうにかして捕まえ、マーシヤの代わりに最初の犠牲者として差し出してやる図まで脳裏に浮かんで来た。

彼は、あの水の色を瞳に持った女をヨードに、儀式に、捧げたいのだ。族長にいらぬ悪影響を与え、ヨードの立場を危うくさせるような存在は、彼にも一族にも必要なかった。

『そのような事、できるわけがない！』

ネデルは大声で叫ぶと、奮起して、次の指示を与えるためにカレブから離れた。

『早く族長をお連れしろ！ おまえたちが儀式に遅れてしまうぞ！』

ネデルと目の合った男が戸惑って、尋ねた。

『どちらへお連れしましょう？』

『ネデル、やめろ』

カレブが穏やかながら押し迫った声で言ったが、ネデルは無視し

た。

『「生娘の間」がいい。あそこなら今、空いている』

『ネデル、聞け。……聞いてくれ!』

憎しみの込められた冷たいカレブの視線を避け、ネデルは牢小屋の守り番を呼びつけて、“生娘の間”の小屋の鍵を差し出させた。

『儀式が終わるまで開けるんじゃない。扉の鍵を閉めたら、おまえたちはすぐに式場へ戻ってくるんだ。いいな?』

『ネデル、俺は行かない! おまえたちの誰にも、彼女には指一本たりとも触れさせない!』

ネデルは主人の声を必死に無視し、彼らの前から急いで去った。

カレブの抵抗する気はいがして、男たちともみ合っている音が彼の耳にも届いた。

『待て、ネデル! やめろっ……彼女を放せ! 放せと言っているんだ!』

『族長、どうかお静かに!』

『嫌だ、マーシャを残して行けるか! マーシャ! 聞こえるか? 俺だ、マーシャ!』

ネデルの視線の先で、麻袋がさつきより大きく動き出した。近くにいた者が駆け寄って、袋をあわてて押さえる。

『マーシャ! 俺だ、マーシャ!』

『族長、どうかおとなしく!』

『俺に触るな! 彼女を放せ!』

三人の男はカレブに手こずり、結局彼の体を全員で抱えるはめになった。

『やめろ、俺を降ろせ! 頼む、彼女を放してやってくれ! できないのなら、俺をいっそ、おまえたちの手で殺せ! マーシャ? マーシャ! 嫌だ……放せ……!』

絶叫とも言えるカレブの大声に祈祷所の庭にいた者たち、捕虜にいたるまでの全員が、門の外に出ていった一行に振り向かされた。祈祷所の建物の陰にいたネデルはガタガタと震えて止まらない手足

を触り、これが族長自身だけでなく村全体にとって良いのだとあらためて自分に言い聞かせ、心を落ち着けようと必死に努めるのだった。

## 第53話

祈祷所の庭はきまり悪い沈黙に支配され、族長が拘束されるといふ異常事態を体験してしまった男たちには動揺の色がありありと見えていた。ひっきりなしにうごめく大きな麻袋を、囚われの身である捕虜たちまでもが不気味そうに見つめている。族長宅の寝室にいたマーシャの姿は、彼女を捕らえてきたネデルたち三人の他にはまだ目に触れられていない。ただ、牢小屋の守り番はネデルたちの会話から中身が誰かを知ったようで、誰よりもその袋から離れて立っている。

ネデルは、儀式を通常どおりに進行させるために、自分が指揮をとらねばならないとひしひしと感じていた。

最初の生け贄は手に入り、儀式進行を妨げる族長は連行され、儀式の実施者ヨードも式場へと向かい、役者は全て出揃った。

ネデルは、事の経緯に困惑し、所在なさそうにしているオルウェンを近くへ呼びつけた。

『兄様』

彼からはいつもの明るい笑顔も陽気さも消えていて、彼は心配そうにネデルを見返している。

『オルウェン。あの袋を開けて中の者を出せ』

『兄様？ 私が、ですか？』

ネデルの命令に彼は不審そうに目を細めた。ネデルは無言で彼を見返し、実行するように弟に促した。

『ああ。おまえがやれ』

『ええ、兄様がそう言うなら。もちろんいいですよ』

兄と族長たちの会話や袋の大きさから、彼には中の人間が女であるとわかっていた。

どこから捕まえてきたのかは知らないが、女を袋に詰めて運んで

くるとは乱暴なやり方だ。

兄の粗暴な性質も把握している彼は、ネデルの非情さに少し腹を立てながら、袋の中でもがく女に近づいた。牢小屋の守り番がさらに後ろへ逃げ、捕虜たちは檻の一边へと移動して体を寄せ合う。残っていた数人の男たちが、族長を惑わした謎の女を一目見ようと体を乗り出し、その時を待っていた。

オルウエンが袋に手を触れ、口を縛っている紐を引くと、それまで暴れていた女の動きがふと止まった。彼は、自分の一族のために犠牲になる人間に誠意を見せようと、中で息をひそめる女に囁くように声をかけた。

『苦しかつたらう？ 今、そこから出してやるよ』

中からは、すすり泣きともあえぎ声ともいえる音がした。

紐解いた袋の口からは、折り曲げられた裸足の足と背中にまわされた腕を縄でぐるぐる縛られた女の体が見えた。捕らえられた後に座らされて縄をうたれ、頭からすっぽりと袋を被せられたのだから。彼は兄のひどい仕打ちにショックを受けた。

彼は彼女の手にも廻された縄を素早く見ると、全身を拘束している縄の結び目をさつと弛ませた。彼の手が触れると彼女はビクツと体を震わせたが、動こうとはしなかった。

オルウエンは立ち上がり、袋の底部分を両手で持つと、それを上に向かって引つ張りあげた。そして、ようやく姿を人々の前にさらした彼女のさるぐつわを背後から静かに外した。ネデルが、弟の勝手な行為にむっとしたようだ。

ほんの一瞬の沈黙の後、捕虜や男たちからどよめきと悲鳴があがった。

近くで見ていた男の一人が驚きで腰を抜き、皆の反応がおかしいことによく気づいたオルウエンが女を正面から見るために回りこみ、彼女を目のあたりにして絶句した。

ネデルに焦点を定めていた彼女が彼にゆっくりと視線を移し、眼

力が弱まり、涙の跡が残る顔を少し柔らかくして微笑んだ。

『ありがとう』

オルウエンは異人種の彼女を怖いとは思えなかったが、その奇妙な目から視線が外せなかった。彼女に何の返事もできないまま、彼は他の者と同じようにゆっくりと彼女との距離を広げて行く。

ネデルや武器を持つ男たちを恐れる素振りすらせず、気丈に自分だけをにらみつける彼女にネデルは畏怖さえ感じた。声はかすれていて発音はへんだだったが、十分に理解できるほどに、彼女は一族の言葉を発した。彼は、族長までも惑わす彼女こそ、儀式の最初の贈り物にふさわしいと思わずにはいられなかった。

『オルウエン？』

彼女の側からじりじりと離れていくと、ネデルが彼を呼び止めた。オルウエンはネデルを非難するように見返し、無言で首を横に振った。ネデルが赤ら顔に変わり、それを見たオルウエンは一目散に祈祷所の門の方に向かって駆け出した。

『待て！ オルウエン、どこに行く！？』

彼は後ろを一度も振り向くことなく、あつという間に式場へ続く下り坂を走って行ってしまった。

『男のくせに何たる情けない様だ！』

ネデルは憤慨し、弟の代役となる男を決めるべく、後に残った牢小屋の守り番、鍛冶屋、石切屋を順番に見た。誰一人として彼と目を合わせようとはせず、彼はかっとなった。

『ネデル、カレブはどこ？』

ネデルは突然聞こえたぎこちない言葉にはっとして、マーシャに振り返った。

彼女の全身をきつく縛っておいたはずなのに、彼女は地面に手をつけてゆっくりと立ち上がり、その場の人々をさらに恐怖に陥れている。彼女の体に何重にも巻かれていた縄が、音をたてて彼女の足

南の空の向こう - Against all odds -

元  
に  
落  
ち  
た。  
。

## 第54話

『ネデル、答えなさい』  
ネデルは、彼女の後ろに立つカレブの幻影に命令された気がした。

彼女の瞳には以前から視線合わせられなかったネデルだが、今の彼女に視線を合わせでもしたら目が焼けただれそうにも思えた。

何なのだ、たかだが異人の女ではないか。なぜ俺が命令されなきゃいけないんだ？

ネデルはイライラして、顔をしかめた。

『おい、おまえ！ そうだ、おまえだ！』

ネデルに呼ばれた牢小屋の男はきよろきよろとして左右や後ろを見ていたが、彼に指を差され、驚いて見返した。

『おまえ！ この女を早くヨーダ様の元へお連れしろ！』

『え？ わ、私？』

『ああ！ ぐずぐずするな！』

けれど、彼女に顔を向けて彼女の注意を引いてしまった男は全身をひどく震わせ、大きく頭を振った。

『いえ、いいえ！ 私にはとても……とても無理ですよ！』

『おまえ、女相手に何を言っている！？ こいつに触ったからといって害があるわけではない、さっさと俺の言うことに従え！』

ネデルが怒鳴ると、男はマーシャをちらつと見て、すぐに顔をそむけた。ネデルが怒ったように鼻息を荒くすると、仕方なく、男は彼女との間合いを詰めて近づいていく。

彼らの様子を観察していたマーシャは、ネデルの命令で近寄ってくる男も、地面に座って青ざめている男も、自分を相当恐れているのだと簡単に気がついた。彼女が捕らえられた時も今も、自分では決して手を下そうとしないネデルは、実は心の中では彼女に触りた

くないと思っっているのだろう。

男が数歩先まで近寄ってくるのを待ち、マーシャは視線をネデルから彼にいきなりぶつけた。彼女の注意が向けられたのに気づき、彼が恐怖の表情をたたえて立ち止まる。

『私に触るな』

男の目が彼女に向けられると、彼女はカレブの笑い方に似せて小さく笑った。

『私に触るな。いいな？』

彼女がそう告げると、男は体を硬直させ、言葉を失ってうつむいた。そして、神妙な表情をして地面にひざまずく。

『おまえ？ 何をしている！？』ネデルが叫んだ。

マーシャは目下の者に対しての口調が身に付いたカレブから全ての言葉を覚えたために、威圧感を与えるという意味において、それは今、非常に効果的に働いてきた。

彼女は男からネデルに注意を移した。

『ネデル、カレブはどこ？』

しかし、今度ばかりは、ネデルも怒り狂ったように彼女をにらみつけた。

『おまえが心配することではない！ おまえは、おまえは、ただの生け贄なんだ！』

『生け贄？』

彼の言葉に反応して彼女はすつと真顔になった。

『必要ない。儀式は不要、雨は降る』

『！？ 何を言う！』

ネデルが真っ赤になって叫んだが、牢小屋の守り番も鍛冶屋の男も何かに打たれたように顔を上げ、その次にはひざまずいて彼女に頭を垂れていた。男たちの行動に仰天したらしいネデルは二人に駆け寄り、体を揺さぶって彼らを罵倒した。

『おまえたち、こんな者に何をしているんだ！ こいつは異形、儀

式の生け贄だぞ!? 神や祈祷師ではない!」

だが、ネデルの説得に男たちは見向きもしなかった。

「おお、なんてザマだ! こいつは守り神などではないのだぞ!」  
吠えるようにネデルは叫び、男たちの体を力任せにたたき、足で地面を踏み鳴らしたが状況は変わらなかった。

彼が奇声を発してマーシャに振り返った。その彼の視線を待つていたかのように、彼女は彼の視線をゆったりと受け止めた。彼は怯えた様子を見せたが、発狂したように再び言い放った。「おまえが何と言おうと、おまえはヨード様への貢ぎ物だ!」

使い物にならなくなった三人の男を見捨て、ネデルがつかつかとマーシャに近づいた。彼女が近寄ってくる彼を悠然と見返すと、彼は余計に彼女に怒りを燃え上がらせたようで、耳までを真っ赤にさせて彼女をにらみ返した。

「おまえなどに心を奪われる、カレブ様の気が知れん!」

マーシャの正面に立ったネデルがそう言い放ち、それがカレブへの悪口だとピンときた彼女はネデルをきつとにらみ返した。激しい怒りを含んだ瞳に彼の膝が震えるのに彼女は目ざとく気づいたが、彼は唇を噛み締め、後ろ手に縛られている彼女の腕をつかもうと手を伸ばした。

その瞬間だった。

「あつっ!?!」

バチツと大きな白い火花が二人の手の間に飛び、ネデルがびつくりして後ろへ飛びのいた。

「おお、なんと!?! 天の神が怒っておられるぞ!」

鍛冶屋がもらした声にネデルが口惜しそうに後ろを振り向いた。捕虜たちも今の光景に息をのみ、驚いているようだ。

「そんなばかな! この女が神であるわけではないだろう!」

彼がもう一度マーシャに向き直ったが、彼女へと伸ばしかけた手は彼女の体になかなか触れられない。

彼女は、平然としていた。その白い光が静電気だと知っている彼女は、人々の反応に目を配りながらネデルの様子を覗いていた。

## 第55話

西からの風は徐々に力を強めて濃い暗雲を村の方角へ押し流し、西空に見える山の周りには小さな稲光まで時々発生していた。木檻の到着が遅れたことに加え、当然いるべき指定席に族長の姿がいつまでも戻らないことを怪訝に思う長老たちや村人たちが眉をひそめ、声のトーンを落として囁きあっており、会場は不穏な空気を感じ取って不安に苛まれる人々のうごめきで静かに波立っている。

ネデルよりひと足先に式場入りしていたヨードは、生娘や一般の生け贄たちの入った木檻が運ばれてしばらく経っても最初の生け贄の女が届けられないことで、焦燥と不安をつのらせていた。上空に響く雷鳴がさつきよりも近づいてきていて、村人たちの不安を不必要に煽っているように見えた。

一向に届かない知らせにしびれを切らしたヨードは、第一弟子に会場から何人かの男たちを祈祷所まで手伝いに向かわせるようにと耳打ちした。彼は静かに頷き、席に戻って仲間たちに素早く彼女の指示を伝言していた。儀式の祈りと進行に関する事由にだけ口をきくのを許されている弟子たちは彼からヨードの指令を伝え聞き、数人の屈強な男たちの協力を求めて人々の間にまぎれていく。

式場の門を抜けていく数人の男たちの姿を見てやっとな、ヨードは群集に背を向けた。

ピラミッド頂上には聖なる皿にかがり火が据えられ、強まる風とともに大きく揺らめいている。致命的になりえる儀式進行の遅れを取り戻すため、また、人々を鎮めて儀式を通常の雰囲気に戻す目的で、ヨードは神に捧げる祈りと誓いの神聖な言葉をピラミッドに向かって唱えあげ始めた。

この長い祈りが終わってしまう頃には、いくら何でも最初の生け贄は到着しているだろう。

動きが鈍くなったネデルの前から、マーシヤは少しずつ間合いをとって移動をしていたが、それも長くは続かなかつた。門の向こうに伸びる道の先に、ネデルの義弟や族長宅の護り番を含む数人の男たちがこちらに急いでいる姿が見えたのだ。数を数えてみると、六人もいた。族長を監禁し終えて式場に戻ろうとしていた彼らが、何らかの理由で祈祷所に足を戻したのだ。

マーシヤは緊張で体を強張らせ、両拳を強く握りしめた。

『ネデル様！』

彼女が二度と聞きたくない声の持ち主の一人である、ネデルの義弟が遠くから義兄に手を大きく振った。ネデルが肩で息をつき、加勢の登場にあからさまに安堵した表情で後ろのマーシヤを振り返って嫌味な笑い方をする。

一人だけ先に走り寄ってきたソニーが、ネデルの前に自分ひとりで立っている彼女を見て驚きの声をあげた。

『縄を解いたのですか！』

ネデルが小さく首を左右に振った。

『そうではない。あれが自分ではずした』

『何ですって？』

ソニーの目は、地面に放り出されていた輪状の縄と彼女の全身を見比べた。

残りの男たちが祈祷所に着き、マーシヤを初めて目にした数人の男たちは目を点にしていた。

彼女の緊張感が高まるのに呼応したように、遠くの上空で地の底から響くように不気味な割れる音がしている。午前中だというのに辺りはますます暗くなってきた、勢いを増した風がマーシヤの濃茶色の髪を東になびかせていた。

彼女に恐怖を表す男たちの三人はここに残っていた三人と同様に

使いものにならないとみなし、ネデルは彼ら六人を二つの木檻の運搬にあてがうことにした。檻を丈夫な運搬用台車の上にそれぞれ乗せ、台車にはめられた木枠を人力で引つ張っていけば、重量に相当するほどの労力を使わずに式場まで運んでいける。捕虜たちはずいぶん静かになっており、護り番の男も手を貸したので、二つの木檻は各台車の上に短時間で乗せることができた。

生娘の檻に三人、一般捕虜の檻に三人の男が付き、準備が終わって出発するだけとなった。マーシャを捕らえるのに同行した族長宅の護り番がネデルの名を呼んだ。

『ネデル様！ 準備ができましたが、どういたしますか？』

呼ばれた彼は護り番に振り返り、その後ろに控える男たちを見やっ

った。

『おまえだけ残って、あとは先に行け。俺も、すぐに後を追う』

それから、ネデルは義弟に振り向いて、一般捕虜たちの台車に付き添うように言った。

『私が？ どうしてです、あの男が行けばいいじゃないですか！』

男たちの作業を手伝った護り番が引き返してくるのを怒ったように見て、彼は不満そうにネデルに言った。だが、ネデルがつきさすような視線で彼に一瞥を与えると、彼はふてくされたように唇を噛んで視線をそらし、押し黙った。

マーシャを捕らえる際、実際に彼女に手を出して拘束したのは護り番だ。

義弟は彼女の手が縛られて抵抗できないとわかってから、彼女の全身を縛る縄をかけただけだ。そして、ネデルは彼女に少しも触れることなく、二人に指示をしただけだ。

実際に、本当に頼りになるのは、護り番しかない。

義弟はしぶしぶ台車の後ろを押すこととし、死の先行隊はマーシヤを置いて出発した。

## 第56話

ネデルが彼女に注意を引き戻すと、二人の男に阻まれても尚、彼女は緊張と焦りを顔ににじませながらも、恐れをちらりとも見せなかつた。

みあげた根性だ。

『カレブはどこ、ネデル？』

彼女の口から繰り返される同じ質問に、ネデルは苛立つて目を閉じた。護り番の男が、彼女が自分たちの言葉をしゃべるのを聞いて、驚きで目を見開いている。族長宅で狩りさながらに彼らが彼女の身を封じたときには、彼女が発したのは訳のわからない言葉や奇声だけだった。

ネデルが目を開けると、護り番が顔色を覗うように彼を見ていて、彼はその視線にせかさされるようにマーシャに目を向けた。

『俺は知らん』

『嘘をつくな。おまえは知っている』

『知らんと言っただろう！ あの男は一族の裏切り者だ！』

女がカレブと同じ口調で同じ言い回しをするため、彼女がしゃべる度にいまましいカレブの姿がよみがえってくる。彼は族長の事を頭から追いやるために必死で言い放った。だが、彼女はまた同じ質問を口にした。

『カレブはどこだ？ 私は、彼に会う』

『ええい、うるさい、うるさいっ！ おい、早くこの女を連れて行け！』

『はい！』

護り番が彼女の肩に触れようとすると、またもや激しい発光が二人の間を襲った。

乾いた破裂音と共に指先が痺れてしまった彼が動揺し、困惑してネデルを見た。

『これは　ネデル様？』  
『俺も同じめにあつた。女の、まやかし……なのかもしれん』

儀式の始まりと共に、人々の口からは不吉な囁き声は徐々に減っていった。しかし、族長と最初の生け贄が不在という非常事態の中では、人々の不安を完全に消し去ることはできなかつたようだ。

大長老は隣の空席を見つめては、儀式直前に血相を変えて飛び出して行つた族長の安否を心配していた。彼の知る族長は、大胆で少し常識に欠けるところはあるが、大事な儀式をすつぽかすような振る舞いをする非常識さはない。

今回の儀式は開催前から難儀続きでもあり、彼は族長の身に何かよからぬ事が起きて、戻るに戻れないのだと、確信に近い思いを抱いていた。

生け贄の到着を知らせる弟子の声がなかなか聞こえないので、ヨードは、祈りの言葉が民たちには理解されないというのをいいことに何度かむなしく繰り返し、終了をただらだと引き延ばしていた。

祈りが終われば、人々が恐れながらも楽しみにしている、ヨードによる生け贄の心臓摘出という儀式が待っている。だが肝心の犠牲者が現れないことには、ヨードができることは何もないのだ。彼女の背後で集う村人たちの、不審そつで不安そつな囁きがいつそつ強くなつたように思えた。

これ以上の引き延ばしは不自然だとヨードが感じた頃、式場の門のあたりで人々が大きくざわめいた。

そのざわめきは静かな波となつて前列まで達し、彼らに背を向けているヨードは、最初の生け贄である異形の女がようやく式場に届けられたことを悟つた。

上半身を二箇所にとらわれて縛られ、一族とは明らかに違う種類の人間が家畜のように紐にて引つ張られて歩くと、その先の人々が脇へと逃げて人の波の形が変わり、その位置は前列にいる人々からでも容易に推測できた。

マーシャが人々の列の半分ほどまで歩いたところ、祈禱所で彼女を神扱いた男たち二人が急に走り出てきて、彼女の前にひれ伏した。周囲の人々が驚きの声をあげ、ネデルたちはびっくりし、啞然とした。ネデルが彼らをどかさうと押し殺した声で二人を脅したが彼らは屈せず、マーシャもそれにはとても驚いていた。

『おお、女神様！ 私たちの女神様！ 何卒、私たちの無礼をお赦してください！』

『どうぞ、私たちにご加護を！』

『どけ、どけしたら！ こいつは神などではない！』

周りの村人たちが彼らの意外な行為でざわめき始めている。苦勞してやっと式場にまで連れてきたマーシャを尚も邪魔立てする存在に、ネデルはうんざりした。

『ネデル様、どうかこの方はお連れするのはお止めください！ 必ずや、天罰が村にくだりますよ！』

『神のお怒りに触れる前に、どうかおやめください！』

苛立ったネデルは男たちの行為に我慢できず、近くにいた鍛冶屋の男を足蹴にした。なんて仕打ちを！ と、群集の奥から非難めいた声や小さな悲鳴があがる。

ネデルは村人たちの反応にますます腹が立ち、牢の守り番も同じ目にあわせ、男たちは地面に転がった。しかし、二人とも、彼女をあがめる姿勢を変えようとはしなかった。

## 第57話

風が完全な雨風になり、柵に据付けられているかがり火の炎が強風で激しく揺れた。空を見上げたマーシャの目にも、真つ暗な雨雲が西の空から滑り込むように侵入してくるのが見えた。

私、こんなところで死んでしまうの？

縄につながれたマーシャが地面にかがみ、彼女の前で地面にひれ伏す男たちが祈っている手に手をそつと伸ばして触れた。マーシャの手の感触に男がおずおずと顔をあげると、彼女はにっこりと微笑んだ。

『ありがとう。神はいつもおまえと一緒にだ』

『おお？ なんとというお優しい言葉を！ 我らが女神様！』

人々の間に妙などよめきが起き、彼女の行為に腹を立てたネデルが彼女の縄をぐいと引いたのでマーシャは後ろにひっくり返りそうになった。

『女神様！？』

男がバランスをくずした彼女に駆け寄ろうとすると、急にとんでもない突風が巻き起こり、西側の両角にあつたかがり火が一気に消えて会場がさつと暗くなった。

『女神を返せと神がお怒りだわ！！』

どこかの女が叫び、周囲はあつという間に人々の悲鳴とわめき声で錯乱状態に陥った。

『何だ、どうしたのだ？』

最前列の長老たちは、式場の遠方で起きた小さな騒ぎが群集の全体を巻き込んで大混乱と化していくのを、その理由がわからずに面食らっていた。

群集より高い場所にいるヨードは状況こそわからなかったが、儀式を余儀なく中断させる人々の混乱ぶりと、迫りくる西の暗い空を

見上げ、焦燥感で心がかき乱された。

『落ち着け！ 皆、落ち着けというに！』

何度も群集に呼びかけたが、大勢の声にかき消され、神経が異常に高ぶった人々の耳にはヨーダの声は届かなかった。

ネデルは縄の先にマーシャがまだ繋がっているのを確認した。マーシャは地面に体を起こし、人々の足に踏まれないようにと周囲をきよるきよるとしていた。どさくさに紛れて人々に彼女を取り上げられないかと気が気ではなかったが、混乱した人々は自分たちの事しか考えていないようで、泣き出して叫ぶか嘆くか、外へと続く式場の門へ押し寄せて行くかだった。入口では、護り番たちが流出しようとする人々を門扉で押し戻すのに必死になっていた。

『待て、行くな！ 皆のもの、落ち着くのじゃ！』

ネデルはヨーダがピラミッドの頂上に登って群衆に叫ぶのを見たが、効果はなさそうだった。彼女は何回も空を見上げ、髪をかきむしって何かを口走っている。

『何があつたのじゃ！ 儀式はこれからだというに！ 皆、戻らんか！』

上へ下へと大騒ぎする群集の中で、ネデルは立ち上がってヨーダの方に視線を送った。彼の視線を感じて自分に気づいてくれると信じて。

彼女はピラミッドを降り、そこでも人々にむなしく訴えていたがあきらめ、再度ピラミッドの上に戻った。彼女はイライラして幾度も西の空を見上げ、とても焦って困っている様子だった。彼女は髪をかきむしり続け、そして、ネデルの送り続けていた視線にようやく気づいた。

『ご指示を！』

彼はあえて声に出さず、唇の動きを大きくして彼女に言葉を読ませた。最初こそヨーダは彼の意図に気づかず、怪訝に彼を見ていたが、すぐにハツとなり、ちよつと何かを考える仕草をして、ピラミ

ツドの天辺で燃えるかがり火の炎を手で指し示した。

『かがり火を戻すのじゃ!』

ネデルは彼女の希望を理解し、マーシャを人の波から守っていた族長宅の護り番に言った。

『ここはいい。消えた火を点けてこい!』

ネデルの指令を聞き、男は静かにその場を去った。

それまで暗かった式場が急にぱつと明るくなると、蜂の巣をつついたように大騒ぎをしていた人々がその動きをぴたつと止めた。ネデルの機転により、風に消えたかがり火の炎が点け直されたのだ。

人々の沈黙を取り返した式場に、すかさず、ヨードのきびしい声が飛んだ。『儀式を再開する! 生け贄をこれへ!』

けれども、マーシャの神秘性を感じ、生け贄としての妥当性に一度疑いをかけた人々は、ネデルたちの前からすぐにはどかなかつた。人の輪は彼に攻撃的ではなかったが、幾重にもなって彼の行く手を阻んでいた。

『おまえたちは神聖な儀式の邪魔をする気か!? 早く通せ!』

不機嫌で不審そうな面々がネデルを見つめる。

村の重要な儀式にこれだけ貢献しているというのに、一族からそんな扱いをされるのが、彼はまったく我慢ならない。

『邪魔をするな! どけと言っているだろう!』

彼は前に立つ者たちを次々に振り払い、マーシャの体の綱を引き、不本意にのろのろとしたペースで前に進んだ。

『道をあける!』

馬鹿な者どもめ! この異人が生け贄としてどれほど特別なのか、おまえたちにはちつともわからないのだ!

『何をしておる! 生け贄を早く連れてまいれ!』

彼が必死の苦勞をいとわないで彼女の為に働いているのに、ヨードが高台でネデルに激を飛ばした。彼女を見ると、今までにないほ

どに形相が醜く変わり、高台の上を何度も行ったり来たりして、おそろしいほどに焦っている。

『何をやっておるのじゃ！ 早くせんか！』

尊敬するヨーダに怒りさえ感じ、彼は人垣を何とか縫って進もうとした。マーシヤはあきらめたのか抵抗もせずについてくるものの、彼女が人々の横をすり抜ける度に一族の無礼な振舞いに対する赦しを乞う声がち、祈りの言葉がマーシヤと共に移動する。ネデルは煙たがられているのに、だ。

なんとということ、この異人は族長だけに飽き足らず、村人どもの心をもからめとっている。

『ネデル！ 遅いぞ、いつまでも何をしておる！』

いつになく冷静さを失ったヨーダが名指して彼を一族の前で非難した。度を越した焦燥感ただよう彼女の様子に、長老たちでさえも彼女を気味悪がる態度を見せ、当人のネデルにいたっては、大勢の前で恥をかかされたことで恥ずかしさと憤怒で頭がいっぱいになっていた。

彼は精一杯やっているつもりだった。

主人の族長を追いやってまで神聖な儀式に貢献することを選び、ヨーダに忠誠を誓って働いている。

そこまで言うなら、自分でこの女を取りに来ればいいのだ・

・  
・  
・  
・  
!

## 第58話

つい立ち止まってしまったネデルの握りしめられた手の甲に、何か冷たいものが飛んだ。彼は気にも掛けなかったのだが、今度はもっと大きな、冷たいものが鼻の頭に当たった。見ると、彼の数人先にいる背の高い男も、手を触りながら気味悪そうに周囲をきよるきよるとしている。

ネデルがぼろ布のようになって人込みからやっと脱出すると、怒りに目を血走らせたヨーダが高台の端にまで来てネデルに怒鳴りつけた。

『のろまな！ おまえは、なんと遅いのじゃ！ この役立たずめ！』思わず反抗的な態度で言い返しそうになるのを人々の目があるために何とか抑え、ネデルは彼女に丁寧にお辞儀をし、謝罪した。彼の心は急激に冷めていった。

ヨーダは、やっと手に入った宝石のような生け贄をじろつと見た。マーシャにじつと見つめ返されて彼女はあわてて目をそらし、ネデルにマーシャを石台にくくりつけるように言った。

『儀式の進行が遅れている！ 急いでやれ！』  
中央に戻る際にヨーダは捨て台詞のようにそう吐き、ネデルをまたもやむつとさせた。

ピラミッド前の中央にある石台の前までマーシャが連行されると、それまで事態を静観していた長老たちでさえ、小さな驚きの声をあげた。彼女の視線が彼らの一人一人に移っていくと、彼らは動揺してお互いの顔を見たり、ヨーダに困惑した顔を向けたりした。

その近くにマーシャを女神とあがめる人たちがいないのは、彼女を束縛する役目を負ったネデルにとってせめてもの救いだっただけだ。彼女を石台に寝かせ、そこに体を固定している間中ずっと、上空の雷鳴は低くうなづいて鳴り止まなかった。群衆の後方部でたくさんの囁

き声が飛び交っており、祈りの言葉が流れてくるのが聞こえた。

ヨードはひどくイライラし、祈りの声が聞こえてくる場所にいる村人たちを威圧するように睨み、ネデルの作業の邪魔になるのもかまわず、石台の側から離れようとしなかった。彼女は何度も短く息をつき、そわそわとして空を見上げていた。かがり火が随所でたかれているのに、式場だけでなく村全体が灰色の影の中に入っているように暗い。

マーシャが数度、何かをさけるようにして顔をそむける度、ネデルは怯えて手を止めたが、彼女が暴れることはなかった。何とかして彼女を石台につなぎ止め、ネデルの役目は終わった。彼は名誉ある役目を果たして嬉しいはずだったが、体は疲れ果て、言いようもない虚無感に襲われていた。

『終わったか。さあ、そこをおどき』

ヨードはネデルにぶっきらぼうに言い、彼の仕事を称えることはなかった。ネデルが彼女の為に何かを行えば必ず、有り余るほどの賞賛を彼に与えてくれていたヨードが、今回は何も言わなかった。

ネデルは呆然として、よろめきながらヨードの前から立ち去った。

『おまえも最後まで手こずらせてくれたこと』

腕を体の脇につけ、全身を四箇所まで固定されたマーシャを見下ろし、ヨードが卑屈な笑いを見せた。彼女の体がやっと拘束されたことでヨードも安心し、少し気が抜けたようだった。

空に向けられていた目をヨードに移し、マーシャは目を細めて、黒い顔に深い皺の刻まれた老婆ともいえる、昔は美しかっただろう女を見上げた。

『神は私と一緒にだ』

マーシャが声をあげると、ヨードは脇へ飛びのいた。彼女が話すとは思わなかったらしい。

ヨードのそんな反応にマーシャは笑い声をあげ、あわてて戻ってきたヨードを挑戦的に見つめ返した。

『か、神はわしと一緒にいるのじゃ！ おまえは、わしの尊い手によって神に捧げられるのじゃ！』

『神は空だ。神は皆と一緒にだ』

マーシャの声が沈黙している一族の頭上にとおり、それを聞いた前列部の人々が彼女の言葉を後ろに伝えていった。意外そうな表情と驚きが村人たちに広がっていき、ヨードは自分の聖域が侵犯される危険性を察知して、早くこの人間の命を断つてしまわなければという気持ちになった。それでなくても、雨は今すぐにでも空から落ちてきそうなのだ。

ヨードは空を厚く覆う暗雲をちらつと見やり、彼女の命を奪うべく、装飾台の上に用意されていた鋭い刃を持つナイフを手の中に取りつた。

生暖かい風が頬をなでていき、マーシャはカレブの姿を思い出していた。ここに来る前の建物で、彼が自分の名を呼ぶ切迫した声と悲痛な悲鳴を、確かに聞いた。そして、彼女がこの石台に連れてこられた時、最前列の一席がぼっかりと空いているのが目に入った。横には立派な装飾品をつけた老人たちが並び、その空席は特等席にちがいがなかった。空席は、一族の統治者であるカレブの場所としか思えなかった。

統治者たる人間が重要な儀式に出られないとなると、それはよほどの事情だ。

主人を裏切って族長宅に押し入ったネデルが、彼女を救出しようとしたカレブに手を出したと考えるのが最も道理にかなっている。男たちともみ合ってケガをしたのかもしれないし、ケガ以上のことだったのかもしれない。

いずれにせよ、カレブの気はいは、どこにもない。

## 第59話

式場全体が儀式のクライマックスに直面して静まり返り、マーシヤは静かに目をそつと閉じた。

ヨーダが死者へと送る言葉をおざなりに口にした後、波打った形状の短剣を彼女自身の胸に押し当て、口元に怪しい笑みを浮かべていた。

苦しみは一瞬で終わる。

どこかの書籍で目にした文句を自分に引用し、マーシヤは最後の瞬間への覚悟をひっそりと決めていた。

マーシヤは、死への恐怖は感じていなかった。その代わりに、乾燥した虚しさだけが彼女の心の内側を隙間なく埋めていつている。

彼女は、カレブがもうこの世にいないと感じていた。

『女、覚悟はよいか？』

ヨーダの余計な一言に気をそがれ、マーシヤは目を開けた。ヨーダが両手で短剣を操り、彼女の頭の上に高く掲げていた。

『生け贄は不要。雨は降る』

激昂したヨーダがマーシヤの顔をたたこうとして、彼女の肌に触れ、逆に静電気にはたかれた。

『うっ！？』

前方にいた人々が白い光の存在を次々に口にのぼらせ、式場の後方から押し寄せてきた女神崇拜の波と途中でぶつかり、群衆の声が大きく高くなってヨーダのいる前方へと押し戻されてくる。

最前列の長老たちが大きく動揺し、ヨーダは焦燥感で顔を引きつらせ、一族に生け贄の儀式開始を示すために、高く掲げた短剣の刃を広い空に向けた。

彼女がさらに短剣をふりあげるのが目に入ると、マーシヤの胸の中にカレブの面影がいつぱいに広がった。

『我が一族に神のお恵みを！』

ヨーダが甲高い声で叫び、憎しみのような感情で顔をひきつらせた。

ああ、イヤだ、死にたくない………！

歪んだ刃が自分の体に迫ってきて、マーシヤは上空に向かって目を広く見開いた。

空気を長く貫く、悲痛な悲鳴が響き渡った。

ガリツと耳障りな金属音がし、両手首への予期せぬ強い衝撃に耐えられず、ヨーダは思わず握っていた短剣を手放した。放り出された短剣の柄は石台にぶつかって跳ね、そのまま石台の下へと音を立って落下していく。

彼女は手首をかばいつつも、そこにあるべき人間の体が見えなくなったという事実には呆然とした。あまりにも信じられない光景に、彼女の口からは言葉とならないあえぎ声しか出てこない。

マーシヤは、ヨーダの振り下ろした刃先が自分の首に突き刺さっていくのを、自分の体よりも下方から自分自身の目で目撃して驚いていた。首筋に飲み込まれるように刃が入っていったのに、痛みは全くなく、刃が皮膚に触れた感触もない。彼女は突然、地下の暗闇に落ちていつている自分に気づいた。

ヨーダの短剣が遠のき、石台が上方に離れていき、やがて、彼女のいた世界が小さな丸い光になって遠のいていった。視界から光が消え、彼女が吸い込まれたその真つ暗闇の世界で、ヨーダの短剣が彼女の横たえられていた石台に激しくぶつかる音も聞いた。音まで耳に聞こえるのに彼女は痛みも感じず、生きている。

次の瞬間、彼女の視界が眼もくらむほどにまぶしい光に包まれた。

『生け贄が消えたぞ！』

群集の前方で誰かが叫んだ瞬間、村の西方から真つ黒な雲が嵐の

ような雨を降らせながら急接近してきた。その雲は黄色い光を内側にいくつもたくわえており、大量の水瓶を一度にひっくり返したような激しい雨が、西から、文字通りに襲ってきた。

恐怖に震え上がった村人たちは悲鳴をあげ、儀式もそっこのけであちこちの方向に向かって走り出した。そんな逃げまどう人間たちのスピードより何倍も早く、雷雨は瞬時に式場の上空を覆いつくした。かがり火は全て消え、人々は服の中までびしょ濡れになり、大粒の激しい雨に視界がきかなくなって、一瞬にして泥と化した地面の上で転ぶものが続出した。こんなひどい雷雨は初めてだった。

我を失った民に取り残され、呆然としていたヨードが生け贄を失くした石台の上を何度も手で確かめているところを、凄まじい爆音と視界が真っ白になるほどの光を放つ大きな雷が襲った。その地響きに人々は恐怖で地面に突っ伏し、子どもたちは大声で泣きわめいた。

『ヨード様!』

体を低くして雷を避けていた弟子たちが、稲光の中に浮かびあがる彼女の影を見つけて絶叫した。

体に刺さるほどの激しい大雨と強風から自分の身を守るのが精一杯で、彼らが次に石台を目にしたのは、怒り狂った雷雨が、来た時と同様にもすごい速さで人々の上から去ってしまっただ後だった。弟子たちの前に石台はあったが、その後ろにあったピラミッドの上半分が吹っ飛んで無くなっていた。さっきの雷が直撃したのだ。

顔面蒼白となった彼らがあわてて祭壇の後ろに廻ると、石台の裏に腰を抜かしてへたりこんでいるヨードを見つけた。

『ヨード様、ご無事で!?!』

第一弟子が泣きながら声をかけると、彼女は呆けた顔で彼を見上げた。外見上はどこにもケガが見られないようだが、白髪だけでなく彼女の顔のうぶ毛までもが逆立ち、涙に鼻水、涎を垂れ流し、失禁までしていた。

彼は、彼女の変わり果てた様子に絶句した。彼はそれ以上彼女に近づけなかった、いや、近づきたいとは思わなかった。

## 第60話

“生娘の間”の大部屋に投げ込まれたカレブは、さんざん泣き尽くして涙も涸れはてたはずなのに、何度も頑丈な扉に体当たりして出血した腕や足の裏の痛みがよみがえってきて、涙を流した。あざだらけの腕やひどくぶつけて骨折したかもしれない肘が痛くて泣くのではない。彼自身の軽率さでマーシャを永遠に失ってしまったことが悲しく、何かきっかけがある度に涙が出てきてしまうのだ。

体当たりを繰り返すうちに彼の全身を縛っていた縄がとれ、せっかく手が自由になったというのに外に出られない事に泣き、雷鳴が空に大きく響いた時も泣き、あまりにも強度の高い扉が部屋に取り付けられている無情さでも泣けた。カレブがその扉を壊したと確信していたネデルが、ここの装備を増強するように頼んだのかもしれない。だが今は、そんな事はどうでもいい。

後悔してもし切れない。どんな理由であれ、カレブは彼女を死なせるために、ネデルの手に渡してしまったのだ。

どれだけわめいて叫んだかも忘れたが、カレブは顔を上に向け、マーシャの名をかすれた声で叫んだ。

ベッドでもある台に座り、彼を拘束していた縄の切れ端をぼんやりと見つめていた彼は、外で妙な物音がするのに気づき、台から降り立った。新しい扉には親指の長さほどの覗き窓がなく、彼の方からは外の様子が窺い知れない。耳をすましてよく聞くと、扉のすぐ外側で、何か重いものが引きずられているようだった。

その音は三回繰り返され、カレブは警戒を強めて次の展開を待っていた。そして、不意に扉に誰かが手をかける音がした。

「ネデル!？」

開かれた扉から姿を現した憎き相手に、彼は迷わず飛びかかった。勢いをつけてカレブが体当たりすると、ネデルは衣服が風にたなび

くように宙に跳ね飛ばされ、二人は通路からそのまま小屋の下の地面へと落下した。地面に背中からたたきつけられ、その後にも大柄なカレブにのしかかられたネデルは相当に体を痛めただろうのに、彼は一言も声を発しなかった。

『おまえ！！ よくも、おめおめと俺の前に現れやがって！』

ネデルの胸ぐらをつかんだカレブは彼の頬を拳で強打した。体の底から湧き出る激情と慟哭が治まらなかった。殺してやりたかった。彼は狂ったように同じ部分を何度もなぐりつけ、ネデルの体をつかんで地面に叩きつけるようにして揺さぶった。ネデルを殴りながら彼は悲しみでつぶれた胸の痛みにあえぎ、大筋の涙を流しながら裏切り者をなじって叫んだ。

一通り泣いてから、カレブはネデルの様子がおかしいのにやっと気づいた。彼は全身を震わせてさめざめと泣いていて、衣服が泥だらけで、全身がぐつしりと濡れていた。カレブが知る限り、雷の音はひっきりなしに響いていたが雨なんか一滴も降っていないし、彼らの今いる地面だって白く乾いている。彼から受けた暴力の痛みで泣いているわけではなさそうで、訳がわからなくなったカレブはネデルをつかむ手を体からパツと放した。

『おまえ・・・・・・・・どうした？』

『雨・・・・・・・・なく・・・・・・・・』

ネデルはうわ言を言うように呟いては、目をぎゅっとなぐりつけて大きく震えていた。

『おい？』

カレブが手の甲で彼の頬を軽くたたくと、彼は目を開け、恐怖に怯えた瞳をカレブに向けた。だが、カレブの姿をとらえた彼は小さな悲鳴をあげ、両手で顔をおおってもっと激しく震え始めた。

『ネデル？』

何かがおかしい。

異変に気づいたカレブは無理やりにネデルの顔から両手を引きは

がすと、彼の耳に口を寄せて大声で言った。

『何があつた!?』

大声のはずがかすれた小声にしかならなかったが、とにかく、カレブの声はネデルを現実に戻すのに成功した。ネデルは彼をほんの数秒じつと見ていたが、なぜか大粒の涙をあふれさせ、そして嗚咽した。

『おお！ カレブ様！ 私は 』

『落ち着け！ 何が起きたんだ!』

カレブは、嫌な事なるべく想像しないように、混乱しないように、と自分にも強く言い聞かせながら、ネデルの次の言葉を待った。彼と視線の合ったネデルは恐怖にあえぎ、目を力いっぱい強く閉じた。

『ネデル、言わないか！ 儀式はどうなった!?』

『おお、カレブ様、どうか、愚かな私をお許してください！ 罪深きこの私を、どうか、その寛大なお心でお許してください……!』

今頃になって主人に許しを請う彼にカレブは心底腹が立った。怒りに燃えた彼が部下の胸ぐらに再び手をかけた次の瞬間、ネデルは体をガバツと起こして彼の襟元にしがみつき、ぶたれて変形した顔をカレブの鼻先に近づけて、泣きながら一気にしゃべり出した。

『ヨード様は神の使いなどではなかった！ あのような女を信じるとは、何と愚かなことを！ 生け贄がなくとも雨が降るなど、本当に雨が降るなど！ カレブ様の言うように、あの女は女神だったのです！ 私は少しも耳を貸さず、ましてやそれを生け贄にしよう……私は何ということをしてしまったのか！ 神は、村に天罰を下され 』

一語一句を聞き逃さないようにとネデルの説明に耳を傾けていたカレブは、息を呑んだ。

湧き上がってくる期待に、カレブは興奮して唇を舐めた。ネデルはしゃくりあげて泣いていて、カレブは彼の首元を持ち上げた。

『ネデル、それはつまり……マーシャが殺されずに済んだ、ということか？』

ネデルはカレブの問いを聞いてしゃくり上げる声を高くさせ、震えて頷いた。答えを知ったカレブは呆然とし、胸にわきあがってくる喜びで目頭が熱くなるのを感じた。

『本当か？ 本当だな？ 本当に、彼女はまだ生きているんだな？』  
ネデルが顔をそむけたことに急に不安になり、カレブは彼の顎をつかんで自分の方へ向かせて訊いた。

『どうした？ 生きているんだらう？』

『……わかりません』

『わからない？ どういう意味だ？』

『それは、消えてしまったので……刃は空を切り……  
・ヨード様が短剣を突きつけようとした瞬間、そこから風のように、いなくなってしまった。きつと、きつと、神が、彼女を手元に戻されたのです！ 神は村にお怒りになり、その後にピラミッドが破壊されてしま』

『消えた、だと？』

カレブはネデルを放し、その場に立ちあがった。式場の設置された方角である南の空を見上げると、濃い灰色の雲の切れ端がまだ残っていた。

それから彼は、自分が監禁されていた小屋が建つ村の最北端から式場の設置された最南端へ、全速力で走っていった。

第60話（後書き）

次回が最終回です

未熟な私の小説をここまで読んでくださった皆さん、本当にどうもありがとうございます！

本編の「あなたと私をつなげる空間」はまだまだ連載中ですので、もしよかったら、そちらも楽しんでもらえれば幸いです

## 最終話

カレブが村を半分ほど縦断すると、数人の村人が人家の周囲でうろつろつとしている姿が目に入った。道は乾燥しているというのに全員がネデルと同じようにずぶ濡れで、誰もが一様に不安で怯えた顔をしている。

彼が尚も走っていくと、ある地点から線で区切りをつけたように道が滑りやすい泥と変わって、周囲にある建物の屋根・壁が全部水浸しになっている不思議な光景が広がった。道には、北へ向かうたくさんの足跡が残っていた。

そのうちに、カレブの前方から数人の長老たちが疲れきった様子で歩いてきた。やはりびしょ濡れの彼らはカレブに気づいてびっくりにしていたが、傷だらけの体で彼が脇目もふらずに彼らの横を全力疾走していく、異様な姿にもっと驚いたようだった。

長老たちから声をかけられたが、彼は南に向かって一直線に去っていった。

カレブが壊れた式場の門扉を跳ねのけると、見るも無残に荒廃した式場が閑散として目の前に開けた。

地面はまだしつかりとぬかるんでいて、人々の無数の足跡が四方八方に伸び、壊れた柵の破片や貢ぎ物の一部が泥にまみれて散乱していた。式場の正面には木製の檻が置きっ放しで、人は、その檻内に取り残された捕虜以外には誰も見えなかった。彼は、ひっくり返って倒れている祭壇の方へ走った。

『マーシャ!!』

叫んだ自分の声がつぶれていて、いまいますい。

『マーシャ! マーシャ、どこにいる!?!』

祭壇から滑り落ちた貢ぎ物があちこちに飛び散って、茶色の地面を色彩豊かに彩っていた。それらを飛び越え、三角の上部がなく

なったピラミッド前の石台に駆け寄ったカレブは、その端の方にある、短剣による小さな傷を見つけた。隣の装飾台はピラミッドの方向へ倒れ、三つに大きく割れている。焦った彼はその高台の場所から、人々が集まっていた場所を見渡して叫んだ。

『マーシャ！ 返事をしろ、どこにいるんだ！』

式場からは何の返答もなく、彼は焦って石台の周りを調べながら回り、壊れたピラミッドを一周した。誰もおらず、彼女の手がかりになる物も何も見つからなかった。

ネデルの、消えてしまった、という言葉が彼の頭にこだましたが、それを信じたくなくて彼は頭を振った。

『くっそう・・・！！ マーシャ、いるんだろう！？ 俺が呼んでいるんだ、早く返事をしろ！』

彼女が神なんかであるものか！

俺はよく知っている、マーシャは、れっきとした人間の女だ・・・

・・・！

三度ほどピラミッドの周りをむなしく回って手がかりのないのを確認したカレブは、式場の端に置き去りにされていた捕虜たちの檻を思い出して、近くへ寄って行った。同じ空間で神がかりな体験をした一族の錯乱を見た彼らにもかなりの動揺が広がり、怯えているようだった。

『あんた！ 俺たちを助けてくれ！ 出してくれ！』

カレブが現れると男が悲愴な表情で叫んだが、何人かは檻の奥へと戻って、躊躇する素振りを見せた。カレブはその男の腕をつかんで言った。

『最初の生け贄の女はどこに行った！？ 知らないか！？』

面食らった男は手を抜き去ろうとしたが、カレブは頑なに放そうとしなかった。

『あの女はどこだ？ 知っている者はいないのか！？』

捕虜を一人ずつ見て、彼は怒鳴った。

ほとんどの人間は目をそらしたり伏せたりしたが、腕や服に血のついた跡を残し、青黒いあざをあちこちに作っている男を刺激したくないとでも思った女が、奥の方から恐々と顔を出した。

『あの……皆が、消えたと言っていたわ。神が助け出したんだって、言っていたわ』

カレブは茫然とした。

『女神だって皆が祈っていた』別の女が言った。

女神だと？

ちがう！ 彼女が、俺を置いて去るはずがない！

カレブは唇を噛み、男の手を放した。彼の口から勝手に嗚咽が漏れた。

『た、助けてくれないか？ あんた、俺たちをここから』

カレブは涙があふれてくる目を必死で閉じ、荒れかけた呼吸を落ち着かせようとした。

まだ、悲しむのは早い。

彼女が、彼女だけの知る方法で密かに脱出し、村のどこかに身を隠しているだけなのかもしれない。

彼は目を開けると、地面に落ちていた柵の一部だった頑丈な太棒を拾った。

『……下がっている』

捕虜たちは後方に退き、檻の片隅に固まって手を握り合った。それから、カレブは檻の扉部分の棒に向かって、力いっぱい太棒を振り下ろした。

一度の打撃でヒビが入り、彼は続けざまに二度、同じ箇所をめがけて太棒を叩きつけた。柵は半分の位置で折れ、彼は上部半分を肘で、下部半分を足で蹴って、人が通り抜けられる大きさの空間を作り出した。

捕虜たちは顔を輝かせて喜び、順々にそこから脱出した。一般の捕虜たちがそこをすり抜けている間に、カレブは同じ方法で少女た

ちの檻の柵も器用に壊した。少女の一人は、カレブが一度逃がしてやったが再び捕らえられた少女だった。

彼に助けられるのが二度目の少女が一際深くお辞儀をして、目に涙をためていた。

最後の少女が檻から出るのを待ち、捕虜たちは口々にカレブに礼を言った。カレブはそれをさえぎり、喜びで彼を見つめる人々を前に、真摯な口調で告げた。

『おまえたちが村へ帰ったら、おまえたちの族長に伝えてほしい。この一族の儀式は今日をもって最後とし、今後は廃止するつもりだと』

カレブの願いに、彼ら全てが半信半疑の表情で彼を見つめた。それも無理はない、既に儀式は三十年も行われ続けてきたのだから。

カレブは疼く胸を押さえ、込み上げてくる涙と戦いながら、彼らに嘆願するような口調で言った。

『本当だ。各族長に、ここの族長カレブの言葉として伝えてくれ。あの祈禱師は即刻に処刑する。もし俺の言葉が嘘となった時は、この首をいつでも取りに来るがいい』

暫しの間、彼らは戸惑ってお互いの顔を見合わせていた。が、そのうちに女の一人が返事をする、それを合図にしたように他の全員がカレブに同意を見せた。

彼らは口々に感謝の意をとなえ、カレブの言うように村人の誰にも会わないうちに村の門まで急いで走っていった。

儀式から一週間が過ぎても、マーシャはカレブの前に一向に現れなかった。彼は、彼女を求めて村中の至る場所を必死で探し、ネデルに道案内をさせて彼女が発見された地点まで行ってその周囲もくまなく探し、夜は彼女がいきなり出現する気がして何度も飛び起き、その都度、彼女の姿を見つけられずに深く落ち込んだ。

妻帯者である族長が別の女に心を寄せている状態が公になっても、一族たちは、彼が愛する女を日々探し回って疾走する哀れな姿を見ては同情し、一緒に悲しみ、彼の相手が女神であり、その女神に愛された男として、族長を非難することはなかった。

人々を数十年に渡って騙し続けた祈祷師ヨードについては、どこかに逃げてしまったか、それとも一部の村人に秘密裏に殺されたのか、一族が断罪する前にいつのまにか行方をくらましてしまった。

そして、カレブがいくら待っても探しても、マーシャは、その行方はおろか形跡さえつかめなかった。

## エピソード

族長の新しい部下オルウエンが族長宅を訪問した。道中にすれ違った大長老から、族長を何とでも苦境から助け出せと命令に似た依頼を受けたばかりだ。

ネデルの実弟でもある彼はネデル一家として身分を落とされるはずだったが、彼がマーシャの縄を解き、式場でも実兄たちに真っ先に一緒に反抗したのを目撃して知っていた牢の守り番や鍛冶屋の男が長老たちに直談判し、彼だけが刑を免れ、ネデルの後任としてのその地位に引立てられたのだ。

彼は実兄や義弟の行為を自分の事のように恥じており、族長の下で働くことさえ申し訳ないと一度は断ったものの、長老たちに説得され、身内の横暴で愛する者を失った族長を何とかして支えようと献身的にカレブに仕えていた。

居室や支度部屋をのぞいて族長の姿を見かけなかったので、オルウエンは裏口を抜けて家の外に出た。視線の先に、大岩の上にぼんやりと座るカレブがいた。西風に髪を吹かれ、彼はしきりに左手を気にして、肘のあたりをなでていた。

『族長！』

カレブが戸口の方を振り向いたのでオルウエンは明るい笑顔を見せ、大股で近づいていった。

『オルウエン』

『ここで何をしていたんですか？ たまには、東の岩棚にでも行きましょうよ』

彼の提案にカレブはただ寂しそうに笑い、彼から視線を外して南の空を見上げた。

『ねえ、族長？』

『放っておいてくれ』

人を寄せ付けけない雰囲気を作り、カレブが彼に背を向けた。

オルウエンは、元気で豪快だった族長の変わり果てた姿にあらためて心を痛めるとともに、この族長にかけられた村の未来も心配だった。カレブはまだ若いガリスマ性があり、族長としては彼の他に適任となる人物はない。現在の族長の様子ではその職から放免されてしまいかねず、そうなら、村は治める者を失ってますます混迷を極めてしまうだろう。長老たちも連日集まって相談をし、族長と村の将来を案じているのだ。

『族長、私は族長のお体が心配です。このままでは病になってしまいますよ』

『俺のことなど気にかけるな』

『そんな。マーシャだって、今の族長を見たらきつと嘆かれますよ』  
彼女の名が出されたことに彼は気分を害したらしく、むっとした目をしてオルウエンに振り返った。

『おまえに、あいつの何がわかる？』

『わかりますよ、自分の好きな人にはいつでも元気でいてもらいたいものでしょう？ 彼女だってそうですよ！ 自分の体も一族の事も気にかけて、自分を失った悲しみにだけ浸る事を、彼女が族長に望んでいると思います？ そんな男を彼女は愛したとでも？』

『俺は……マーシャが戻るなら族長の地位などいらん。奥方と離婚してその権利を捨てるのも全く惜しくない。大長老にもそうやって伝えたところだ』

カレブの表情にあつた怒りが悲しみに取って代わるのを見て、オルウエンも胸がきりきりとした。

『そうですか。ええ、奥様とは離婚なさるべきです、その方がいいでも、たとえ離婚されたとしても、私たちの族長はあなたに変わりはありませんよ』

カレブが訝しげにオルウエンを見ると、彼は陽気に笑って頷いた。  
『おまえ、そんな事ができているのか？ 前族長の娘と離婚した後も俺が族長でいられると？』

『ああ、族長、常識にとらわれないあなたが、そんなふうにおつしやるとは！ あなたは女神に愛された方です、目には見えなくても、あなたの側には女神がいつもついておいでだ。私は、村を救出しようという族長の後押しをするために彼女が現れ、その役目を終えたから彼女は去って行ったのだと思っっているのです。前族長の娘が何ですか？ 慣習は常に正しいのですか？ 正しくないと明かしたのは、他でもない族長じゃないですか。女神が目をかけた方が私たちの族長でいれば、一族はいつまでも安泰ですよ！』

オルウエンはそう言って大きく笑ったが、カレブは眉をひそめ、しばらく部下の顔をだまつて見つめていた。オルウエンは、族長から困惑した表情が無くなるのを忍耐強く待ち続けた。カレブはしばらく無言で俯いていた。

やがて、カレブが涙をにじませた目を閉じ、そして、何かを思い出したように目を開けた。

『オルウエン、明日か明後日に雨が降るぞ！』

『は？』

『雨が降るんだ！』

『族長？ まさか、雨を予言できて・・・？』

『そうじゃない、これはマーシャが教えてくれた事だ！ 予言なんかじゃない、雨が降るかどうかは誰にでもわかる！ そうだ、この事は一族全員が共有すべき知識なんだ！』

オルウエンが戸惑っている横で、カレブがいきなり立ち上がった。『オルウエン、大長老の所へ行くぞ！ 第二のヨードが出てこないよう、この知識を一族の者全てに広めなきゃならない。それに祈禱所の弟子たちを解散させ、誰か一人だけが力を持って不正を働く事がないよう、祈禱師の制度自体を廃止させたい。村には、心の平安を得るために祈る場所があるだけで充分だ！』

カレブがオルウエンの隣を通り過ぎ、ふと振り返って、彼を不思議そうに見つめた。

『オルウエン、行くぞ。おまえは、俺を手伝ってくれるんだろう？』  
『え？』

オルウエンが我に返って息を呑むと、カレブがにやりと笑った。  
『ついて来い！』  
『はい！』

オルウエンが族長の隣に追いついて彼を見上げると、カレブが目の縁に笑い皺を作って大きく笑った。

それから数週間後、カレブは一族の歴史が始まってから初めての、継承権によらない族長として承認された。

その二週間前、カレブの妻は彼の子どもを無事出産したが、生まれた男児は出産から数日たってひどい高熱を出し、女たちによる必死の看病の甲斐なく、一週間というはかない命を閉じることになった。彼と離婚した前族長の娘は息子の死を含む一連の不幸から半狂乱となっていたが、少したって、カレブや自分の身分をすっかり忘れて村の年若い少年と恋に落ち、すぐに妊娠して再婚した。

オルウエンは族長の良い右腕として彼をうまく支え、彼からも大きな信頼を得た。

村は平安を取り戻し、近辺の部族の中でも祈禱師を持たない、めずらしい慣習を持つ部族として生まれ変わった。

それでもオルウエンは、族長が時々遠い目をして南の空を見てはそつとため息をつくのを知っている。

あの時以降、カレブの口からマーシャの話が聞かれることは一度もなかったが、彼が片時も彼女を忘れたことがないのもわかっていいる。族長はせっかく自由な独身に戻ったというのに、一族の女には見向きもしない。

突然に消えてしまったマーシャは族長の心に大きな傷痕を残したが、同時にそこまでの深い愛を彼にもたらして、彼は、幸福でもあるのだとオルウエンは思っている。

オルウエンも彼女が二度と帰ることはないと察してはいるもの、もう一度だけでも会って彼女とちゃんと言葉を交わしてみたいと漠然と思っていた。村人たちが噂し合うような神としての威厳よりも、親近感のある彼女の微笑む姿が思い出される。

彼が大長老宅にあったラズリをぼんやりと眺め、誰かの視線に気づいてふと目をあげると、そこに立っていたカレブがくるりと背中を向け、去っていった。

ラズリの濃青色を見て、おそらくは彼と同じように彼女の事を思っていたのだろう。

大長老宅の裏口にまわると、暗闇の中で壁を背に佇んでいるカレブがいた。オルウエンはその隣に音を立てて体を預け、彼の笑顔を引き出した。

『ああ、お腹が空きましたよ。今夜の食事は何でしょうね？』

カレブは彼がお腹をおさえる様子に笑ったが、少しして笑顔を消し、遠い目をして南の空を見上げた。

『オルウエン、俺は思うんだ。俺が正しい統治をしていれば、彼女がいつか俺の前にもう一度現れるんじゃないかと』

彼の想いを邪魔しないように、オルウエンは返答することなく、無言で彼に頷いた。

『俺はそれを信じて、俺自身が元気に幸福でいて、一族も元気に幸福でいられるように努めようと思う。それが彼女の望みでもあるだろう。ちがうか？』

『……いいえ。その通りだと思いますよ』

オルウエンがにっこりと笑うのに安心したように、カレブがゆっくりと微笑んだ。

『なあ、おまえが女だったら時々思う。そうしたら、俺はおまえと結婚したのに』

『本当ですか？ それは光栄です。……族長、結婚をお考えで？』

『はは。おまえが女に変わりでもしたら、考えるさ』  
『族長!』

カレブは大笑いし、追いかけてよとするオルウェンの手から軽々とすり抜けていった。

エピソード（後書き）

やっと完結しました

最後までお付き合いいただき、本当にどうもありがとうございました  
これからも、もっと楽しめる作品を書いていきたいと思えます  
機会があったら、連載中の他作品も見ただけだと嬉しいです。

ありがとうございましたー！！

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1536e/>

---

南の空の向こう - Against all odds -

2009年3月24日09時21分発行